

アーマード勇者育成記  
チート？いいえ。ロ  
ストテクノロジーです  
が、何か？オレ流勇者  
& パーティ好き勝手に  
ビルドゥ p

snyp\_0

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

V R M M O R P G で使っていた自分のアカウントを、当時の装備のまま転生の媒体にしてくれるというおまけ付きで、剣と魔法の異世界へ転生を果たしたゲイン。

しかし、転生した先はプレイしていたV R M M O のびっくりする程未来の異世界、おまけにゲインのジョブである派生元の種族は既に絶滅していた。

図らずもロストテクノロジーと化してしまった一癖も二癖もある脳内AIや様々なガジェット・ツールが搭載された外格を装着し、ある日つい倒してしまった相手、それが勇者だった。

成り行きで勇者に同行し、適度に勇者をしばきつつ、一人前に育成できるのか？パー

テイ仲間も問答無用でオレ流超強化。

これは伝説の機甲騎士と呼ばれた主人公のハチャメチャな勇者育成計画&冒険記である。

# 目次

55

第1話 俺、転生する | 1

第2話 俺、状況を確認する | 4

第3話 俺、一悶着 | 9

第4話 俺、驚愕の事実を知る | 21

第5話 俺、金を作る | 26

第6話 俺、ギルドへ行く | 34

第7話 俺、ギルドマスターと決闘する | 40

第8話 俺、依頼を受ける | 44

第9話 俺、ホームで休む | 47

第10話 俺、森へ赴く | 50

第11話 俺、同郷の人とお話する | 50

第12話 俺、イシスさんに自己紹介する | 59

第13話 俺、勇者を発見する | 62

第14話 俺、vs勇者 | 68

第15話 俺、勇者の師匠になる | 74

第16話 俺、勇者とお話する | 79

第17話 俺、勇者の修行への前準備をする | 86

第18話 俺、アーサーにスキルを教える | 91

第19話 俺、パーティに誘われる | 91

第20話 俺、再びアーサーにスキルを

第27話 俺、喫茶店で休憩する

教える

146

105

第21話 俺、エルメンテのお願いを聞

第28話 俺、宝物庫へ行く

153

く

第29話 俺、コロッセオへ向かう

第22話 アーサー、殺戮マシンと化

158

109

す

第30話 俺、魔法を教える& a m p ;

113

第23話 俺、vsリヴァイアサン

俺、エルの過去を見る

162

117

第31話 俺、エルとの修行の最終調整

第24話 俺、宴会

する

122

第25話 俺、アーサーとエルメンテ

第32話 魔術大会予選開始

173

をギルドメンバーへ招待する

第33話 予選 sideエル

178

第26話 俺、魔法大国ルギームの入国

第34話 予選 sideゲイン & a

131

	mp ;	ちよつとだけエル	182
	第35話	予選終了	187
	第36話	俺、二つ名を付けられる	
192			
	第37話	俺、ルギームのギルド長とお話する	196
	第38話	決勝戦開始	201
	第39話	俺、vs零影	207
	第40話	俺、忍者のルーツを知る	
213			
	第41話	俺、エルの実家にお邪魔する	
	第42話	俺、朝食をご馳走になる	219
	第43話	俺、vsジエミニスターライ	227
	ト		
	第44話	魔術大会 閉幕	242
	第45話	エルと因縁	246
	第46話	俺、賢者とお話する	255
	第47話	王立騎士団副隊長エスカの一日	269
	第48話	俺、王都に行く	276
	第49話	俺、vsビッグ・アント	
286			
	第50話	俺、ビッグ・アントの召喚主と対峙する	294

第 5 1 話	邂逅		299
第 5 2 話	俺、称号を授かる		304
第 5 3 話	俺、晩餐会に赴く		312
第 5 4 話	俺、エスカと組手をする		
319			
第 5 5 話	俺、ア－サーの実家に行く		
327			
第 5 6 話	俺、ガイドウと一騎打ちをする		334
第 5 8 話	俺、ア－サーのリユツクサクを クを確認する		338
第 5 9 話	俺、大衆酒場に行く		343
第 6 0 話	続 俺、大衆酒場へ行く		

	350		
第 6 1 話	反逆		355
第 6 2 話	俺、城にカチコミをかける		
361			
第 6 3 話	俺、V S ロンメル		366
第 6 4 話	俺、V S アンノウン		373





## 第1話 俺、転生する

俺は変身ヒーロー物とロボット物が昔から大好きだった。

鋼鉄の皮に身を包んだヒーローが悪を打倒する。

または、パワードスーツに身を包み敵を破壊する。

これを俺、齋賀さいが 建登けんとうはこよなく愛している。

それと同時にゲームも大好きだった。

そんな俺が、今寝る間も惜しんでやっているひとつのゲームがあるVRMMORPG RP

### G 『鋼 戦記』

通称『ハガセン』と言われているこのVRMMORPGには、他のMMOにはありそうでなかった特徴があった。

よくある、剣と魔法のファンタジーなのだが、何故か特撮ヒーローもしくはロボット  
枠があるのだ。

双方が大好きな俺はハガセンの存在を知るやいなや、PCショップに駆け込み、家に  
引きこもり血眼になってプレイし続けたのである。

一心不乱にやり続け、気付いた時にはハガセンの中でも1、2を争うトッププレイ

ヤーとなっていた。

そんなある日、コンビニで買い物をしレジで順番待ちをしていると、突然店内へダイナミック入店してきた車に潰され、俺はひしゃげたトマトの様に潰れて死んだ。

気が付くとなんだか宇宙空間の様なところに俺はいた。

「ここは何処だ？　俺はあの時……」

「やあ、どうもこの度はご愁傷様です」

後から声がし俺が振り返ると、そこには羽の生えた真つ白な球体が浮いていた。

「え……ご愁傷様で……っというか何者？」

「何者とは失礼な！　僕は君達の所で言う神様だよ！」

神様と名乗る球体は更に続ける。

「君はあの時不運にも死んじやったの！　実は手違いだったんだけど……」

「ちよつと待て今何つった？」

聞き捨てならん台詞が聞こえた気がした。

神を名乗る光るテニスボールの物体Xは、俺を無視し喋り続ける。

「僕は寛大で優しいからね！　君を転生させてあげようと思つて、ここに君を呼び出した訳です！」

「死んだ？　俺が？　転生つて……そのまま生き返らせるとか——」

「あく！ 無理無理、規定で不運や事故死等で死んでしまった魂は、転生か極楽浄土へ行くかの2択のみなんだ」

「規定があるって事は結構ある事なのか……」

「うん！ たまにね！」

やだなにそれこわい。

「で？ どうする？ オススメは転生かな！ 今なら出血大サービス！ 君のやってたハガセンとかいうVRゲームの全てをそのまま使える状態で、異世界へ転生させてあげようと思うんだ！ 君がゲームでやってた世界にそっくりな世界にね！」

これには心底びつくりだ。まさか俺がハガセンで使ってた使用キヤラ（ゲームキャラクター）になれるというのか。

「是非お願いします」

俺は即答した。

「OK！ じゃ、僕は仕事に戻るよ！ 新たな人生を楽しんでくれたまえ！ とりあえず村の近くの草原辺りに送っとくね！」

そうして突然足元に魔法陣が現れ、俺はゲインとして第2の人生を歩み始めるのであった。

## 第2話 俺、状況を確認する

鳥のさえずりが聞こえ目を開けると、鬱蒼とまでは行かないものの、青々とした森に俺は立っていた。尻目で左右を確認しつつ、間近にあつた泉を覗き込み、自らの体を確かめる。

そこには真つ黒な鋼鉄に身を包み、紅いマフラーを首に巻いた自分がいた。

「うおーッ！ マジでゲインだこれー！ 待て、落ち着け俺」

確かに見た目だけは、ハガセンで使っていた最強装備のヤルダバオトⅧ式であつた。ハガセンでのアバターは課金アイテムを使うことにより、顔面のみだが自由に作成することが出来る。ヤルダバオトⅧの見た目は全身黒で統一された騎士の様なデザインだが、顔面だけは俺が幼少の頃から大好きだった、特撮ヒーローのマスクドブレイバーに似せて作られている。

単純に自分が覚えているスキルは、状態異常全耐性、HPMP自動回復5000/秒、全格闘スキル対応、全武器スキル対応、全魔法スキル対応、全料理スキル対応、全鍛冶スキル対応、位だ。

この他にも数え切れないほどスキルを習得したが、一々覚えていない。

ハガセンでは、覚えられるスキルは当然ジョブ毎に違うのだが、レベルが1000を超えると、MPの下に熟練度ゲージが追加され、この熟練度を最後まで育てると運営からスキルの制限突破ができるアイテムが貰えるのだ。

勿論、ゲージMAXで対応できるスキルは1つずつ解禁していかなくてはならず、覚える為には特定のNPCに師事しなければならない。

初めてこの情報が某大型掲示板にアップされた時は、鯖が1週間は死んだままだったのを覚えている。

「よし、いっちょ試しに使ってみるか」

周りに誰もいない事を確認し構える。

「炎えんがれつしよう呀烈掌！」

格闘スキルにおける3番目位に覚える攻撃スキルを、木に向かつて放つ。——パー  
ンツ！ 風船が弾ける様な轟音と共に、木が跡形もなく消し飛んだ。

「ええ……マジか、あんまし強くないスキル選んだつもりなんだけど」

あまりの威力に俺はぼう然としたが、スキルが無事に発動するとわかるとふと思い出す。

「スキルか使えるという事はあいつも使えるのか？ おい、ネメシスいるか？」  
「はい、ゲイン様ご機嫌麗しゆう」

頭の中に女性の姿が浮かび上がった。

絹のような白い肌、薄い碧眼、髪は目の色と同じく薄碧色で超ロングだがうなじの辺りで折り返し髪留めでまとめられている様だ。服装は白いワンピースを着用。少女の容姿が完全に表示され一瞬微笑んだかと思うと、恭うやうやく俺にお辞儀をした。

彼女がヤルダバオトⅧ式に搭載されている、超高性能自立型AIネメシスである。

「こいつまで使えるのか、こりゃいよいよチートだな」

「ゲイン様どうなさいました？ 何かトラブルでしょうか？」

「ネメシスこの辺り一体をスキャンニングして、簡易マップを作ってくれ」

「承知いたしました。マップングを開始します」

待つこと3秒後……。

「マップング完了しました」

「おう、サンキュー！」

頭の中にマップが表示される。

見ると、どうやら北西辺りに村らしきものがあるのがわかった。

「ゲイン様、この世界は何なのでしょう？ 私のデータベースには存在しません」

「聞いて驚くなよ、どうやら神様が異世界へ転移させてくれたらしい。」

「……理解不能です」

「ですよ！ 俺もよくわかりません！ まあ、とりあえずなんだ村とやらに行ってみよう」

「承知いたしました。ゲイン様」

そして、颯爽と俺は脳内彼女ネメシスと共に歩きだしたのである。



## 第3話 俺、一悶着

暫く歩くと、村が少しずつ見えてきた。

「おッ！ 遂に初村人とエンカウントだな〜」

しかし、何やら様子がおかしい。怒号のような声が聞こえる。

「何かヤバそうだな」

「早急にした方がいいと思われませう」

「ああ、走るぞ」

脚部に搭載されているミニマムブースターを使い、速度を急上昇させる。

村へ着くと、盗賊が村を襲っていた最中だった。

住人が縛られているのが目に入った。

「ヒヤッハー！　こんな所に村があるとはラッキーだったぜー！　金品と食いもんと女をよこせー！」

某世紀末に出てきそうなセリフをはきながら、村長らしき初老の男性を足蹴している奴がいた。

見つからぬように認識阻害系スキルのインビジブルを起動させ、周りの様子を確認する。

見るとあっちこっちで略奪行為を働いている奴らがいた。初老の男性はモヒカン頭の野盗に足蹴にされ続けている様だ。

「お願いだ！　もうやめてくれ！　私の命をやる！　だからもう村の皆には手を出さなくてくれ！」

「うぜえんだよ！　クソ爺とつとと死ねや！」

モヒカン頭の野盗が鞘さやから剣を抜き振りかぶる。

俺はインビジブルを起動させたまま刀身を掴み、そのまま握り潰す。

「け、剣がいきなり潰れ——うがッ!？」

俺はもう片方の手で首根っこを引っ掴み持ち上げると、勢いそのまま地面に顔面を叩きつける。

野盗は目と耳から血を流し、ぴくりとも動かなくなった。

「一体……これはなにが……?？」

「爺さん大丈夫ですかね?」

俺はインビジブルを解除し、初老の男性の前に姿を見せる。

「ッ!？」

初老の男性は俺に驚いたのか、足を震わせながら野盗が使っていた剣を俺に向けてきた。

「い、いつから!? 貴様も野盗の一味か!」

「え、いやいや違う違う。落ち着いて下さい。俺は別にだな? え、旅人です、偶然この村を見つけて立ち寄った所、何か一悶着あったみたいだったから助けた。ただそれだけ」

「ほ、本当か!」

「本当も何も殺すつもりなら一々突つ立って話なんかしないでしょ?」  
「た、確かに」

初老の男性の手から剣が滑り落ちた。

「嫌アアツー!」

「今の声は!! 頼む! 村を救ってくれ! 何でもするから!」

「ん? 今なんでもするって言ったよね? よし、ちよつと待って下さい」

俺は再びインビジブルを起動させ、声のした方へと向かった。

「ぐへへ、もう誰も助けに来ねえよ。おとなしくしな」

見るとあられもない姿になった女性が足を引きずりながら後ずさるのが見えた。

「おい、お前」

「チツ、うつせえな何——」

俺は振り向きざまに鉄拳をお見舞いした。

あらぬ方向に首が曲がり、そのまま絶命する野盗。

「お姉さん大丈夫?」

「ひッ!」

安否を気遣ったつもりが、どうやら怖がらせてしまったようだ。

「ゲイン様、この女性は足の骨が折れているようです」

「さっきの野盗か。酷いことを……大丈夫、すぐに治してあげます。エクストラヒーロー」

俺は回復魔法で最も効果の高い魔法のエクストラヒールを起動させた。彼女の折れた足が逆再生されたVHSの如く、元に戻っていく。

エクストラヒールは通常のヒールと違い、怪我や状態異常を徐々に治すのではなく、怪我する前や状態異常になる前の状態に戻す魔法であり、すぐに行動可能になる最強の回復魔法である。

「え……あ……ありがとうございます！　お願いです騎士様！　村を……村をお救い下さい！　このままでは、皆殺されてしまいます！」

「落ち着いて下さい。わかっていきます」

怪我を治した事で警戒が解けたのか、お姉さんが追いつがってくる。

「良いですか？　ここで隠れていて下さい」

「はい！　村の皆をお願いします！」

この人が村長の娘さんだったのか。

「ネメシス索敵開始、位置情報を送ってくれ」

「承知しました」

「一気に片をつけるぞ。まず、ポイントアナライザーの感度を最大に引き上げる。ク  
イーンビー・デステインガーを使う」

「承知しました」

今自分は薄暗く狭い家内にいるが、ポイントアナライザーの機能で赤いシルエットが  
幾つも確認できる。

俺は簡易武器インベントリを起動する。

半透明の四角いボックス俺を中心に囲む様に現れ、あらかじめ設定されている12個  
の武器がゆっくり右へ流れていく。

俺はボックスを指で右になぞるとルーレットの様にボックスが回りだした。それを  
目当ての武器のボックスで止める。

すると眼前に蜂の迷彩が施された派手なアサルトライフルが現れた。

俺は銃を手にとり、赤い標的の頭に狙いを付けトリガーを引く。

黄色い銃弾が敵の脳天にぶち当たり、顔面が弾け飛んだのが視認できた。

「巢の完成だ。奴の躰を媒体にして、クイーンが行動を開始する」

今し方絶命した頭のないシルエットがムクリと起き上がり、躰中から米粒の様な赤い物体が空へ散らばっていく。

散らばっていったのはクイーンが奴の体内で産んだ子供達だ。

「子供は親の習性を真似するもんだ。今回は頭を撃つたからな。こいつ等に限っては同じ匂いを持つ奴らの頭に入り込み、そのまま頭パーンって感じか。やっぱ数だけの雑兵一気にヤルならこいつ一択だな。一発で済むし、何よりほぼ即死を狙えるつてのがいい」

次々とマップに表示された赤い斑点が消えていき、1つだけが残った。

マップに表示された野盗の位置を確認しつつ、処理していき最後にボスらしきだけが



残す。

周りが急に静かになったためか、世紀末ボスは声を荒らげているようだ。

「おい！ オメエ等どうしたなんで急に静かになったんだ！」

「さて、何故でしょうね？」

インビジブルとポイントアナライザーを解除し、真後ろから声をだしビビらせる。  
ボスの見た目もやはりモヒカンだ。

「ツてめえか！ どうやって始末した！ 俺の仲間は30人は居たんだぞ！ どうやって一斉に……」

相当狼狽しているのか、冷や汗をかき目が泳いでいる。

「大丈夫か？ 血圧がどんどん下がっていくな？ お化けでも見たか？」

「し、質問に答えやがれ！」

「うるせえんだよ雑魚が、せつかくの俺の第一村人発見を邪魔しやがってよ。全員首から上がなくなってるじゃねーの？ 興味ねえよボケが」

「怒るのはそこなのですね……」

ネメシスがちやちやを入れてきたが無視する。

「バケモンが！ ぶっ殺してやる！」

「ネメシス、左肩の簡易武装のロックを解除」

「承知しました。サブウエポンレッツサーバーストガン、レディ」

世紀末ボスがナイフを腰から取り出し俺に向かってくる。俺は腰をほんの少しがゆめ、ヤルダバオトⅧ式に内蔵された武装が起動する。左肩の装甲がパツクリと割れるように開くと2つの銃口が突起し、そこからけたたましい炸裂音と共に光が発せられた瞬間、世紀末の右腕が消え去っていた。

「——うぎゃあああああ！ 俺の！ 俺の右腕がああああああ!?!」

半狂乱になった男は無くなった右腕を左手で確認するかの様に、わきわきと動かしている。

男に残酷な真実を告げるが如く、肩から白い骨が露出、心臓の鼓動に連動し地面に赤い鮮血が滴り落ちる。

「うっせえな。腕の欠損くらいで騒いでんじゃねーよ。このスカタン」

「ひいいいいいい!!」

情けない叫び声を上げながら男は尻もちをつき、小さなナイフを握りしめたままめちゃくちゃに振り始めた。

「く、来るな! 来るなああああああ!!」

「どうした? 治さないのか? 精霊の輪舞曲<sup>ロンドン</sup>でバリアを貼らないのか? エクストラ

ヒールで腕の即時再生は? マスタリアンキュアーでのデバフの予防は済んだのか?」

「た、たす……助け……」

「んだよ、なんにもできねえのか。もういいや話にならん」

俺は男から距離を取り、村長の無事を確認しに行く。

「た、助か——」

何か聞こえた気がしたが、右手の親指と中指で音を鳴らすと、無詠唱で設置しておいた単体向け火属性最強魔法であるインフェルノペインが発動し、野盗がいた場所に一瞬紅蓮の火柱が発生する。火柱が収まるのを尻目で確認すると、そこには何もなかった。強過ぎる火力により、黒く結晶化された地面が残っただけであった。

## 第4話 俺、驚愕の事実を知る

「騎士様！ 村と娘を救っていただき、本当にありがとうございます！」

世紀末盗賊団を打倒した俺は縛られていた村民達を開放し傷を癒やすと村長が急に地べたに頭を擦りつけた為、目を白黒させた。

「いや、偶然通りかかっただけですから頭をあげて」

「是非、我が家へ！ お約束通りお礼なら何でも致します！」

「ん？ 今なんでもするって——」

「ゲイン様、ふざけている場合ではございません」

冗談の効かない超高性能AIネメシスちゃんがジト目になっておられる

「ゲフンゲフン、情報を頂ければそれで結構ですよ」



——村長の部屋にて。

「騎士様、情報と言われましても近くの街へ行く道筋位しか」

「大いに結構です。あとこの金貨なんですが使えますか？」

「これは……少々お待ち下さい」

そう言うと村長は奥の本棚へと消えていった。

「ネメシスさっきの反応をどう思う？」

「何やら見覚えがある様に見受けられます」

「……ここはハガセンの世界ではないはずだ。そもそも、ハガセンにこんな村——というイベントはなかったはず」

そう言うとはほぼ同時に村長が1冊の本を持って戻ってきた。

「待たせてしまつて申し訳ございません、なかなか本が見つかりませんでしたので。騎士様がお持ちになつていた金貨ですが、3000年程前まで流通していたメイタリオ金貨ですな。現在はほとんど使われておりません」

衝撃の一言が村長が発せられた。

メイタリオとはハガセンの世界の呼称である。という事は、この世界はそっくりどころか、ハガセンの未来なのだろうか？

「な……なんだって？」

「……」

ネメシスはただ目を伏せ、何かを考えてるようだった。

「メイタリオは3000年程前、繁栄を極めていたが、突如として崩壊したと言われてお

ります」

「これマジ？ 驚天動地過ぎるだろ。一体……どういふ事なんだ？」

ずっと黙っていたネメシスが口を開く。

「推察致しますに、この世界はハガセンの世界であつて、ハガセンの世界ではないという事では？」

ネメシスが哲学的な事を言っているが、俺はショックで理解するのを拒否した。

「あの、俺のジョブは騎士じゃなくてフルメタラーつて言うんだけど、勿論知ってるよね？」

「申し訳ございません。私は冒険者ではございませんので、その辺の知識には疎くて」  
「そ………そう」

「ここでこうしていてももちが明きません。最寄りの街までの地図を見せてもらい、街へ行く事を推薦します」



ネメシスの提案に俺は我に返る。

「そうだな！　そうしよう」

地図を見せて貰らい、ネメシスが最短距離ルートを割り出す。

「とりあえずお世話になりました」

「何をおっしゃいます!?　命の恩人に対して大したお礼も出来ず申し訳ありません！」  
「いやいや、良いですからホントに。ではさようなら！」

俺は画面上のミニマップを頼りに村を後にした。

## 第5話 俺、金を作る

「どうやら何事もなく街に着いた様だな」

「はい、そのようですね」

着いた街は中世ヨーロッパの町並みが色濃く見える、ベローアへと俺は到着する。中世とは言っても道端にうんこが捨ててあるとかさういった事は全くなく、実に小綺麗な街である。

「しかし、メイタリオの金貨はこの世界じゃ使えないんじゃないか？」

「武器をお売りになれば宜しいのでは？ もしくは錬金術のスキルで素材変換を使い、この世界の金貨もしくは銀貨へ変えてしまえば——」

「普通に犯罪ですよねそれ。まあ、要らない武器防具なら腐る歩あるし、無きやまた作りゃいいしな」

しばらく適当に歩き、剣と盾が書かれた木製の看板が掲げられた武器屋を見つけ、店

内へと入る。

カウンターには左の頬から目にかけてガッツリ傷の入ったドワーフが暇そうにしていた。

「武器を売りたいんだが良いかな？」

「ああん、おめえ……言い値で買おう」

「は？ まだ見せてすらいないんだが？」

「あんたが装備してる、甲冑だか鎧だかわからねえそれ、そんじよそこのモノじゃねーな。言い値で買わせてもらう。その代わりお前さんが装備してるそれ触らせてくれ」

「触るだけでいいのか？」

「ああ……」

変な事をいうドワーフだな。

まあ言い値で買ってくれるってなら、幾らでも触らせてやろう。

右手をそのままレジカウンターへ置くと、ドワーフは両腕を震わせながらガントレッ

トに触れ、目を瞑つぶる。

「じゃ、じゃ鑑定させてもらうぜ」

ん？ 詠唱とかなしで触って分かるもんなんだろうか？

「ああ……信じられん。まさか生きて神の鉱物に、出会える日が来るなんて……」

ドワーフをよく見ると、泣いていた。

目を開けたドワーフはすす汚れた服で顔を拭くと、赤くなつた眼を俺に向ける。

「な、何だどうしたんだ。急に泣き出したりして」

「こいつは、ヒヒイロカネ合金で出来てやがるな。それも装備一式全部だ。そうだろう？」

鬼気迫る表情で俺の顔を真つ直ぐ睨みつけるこのドワーフに、嘘は通じまいと思ひ正直に話す。

「ああ、そうだよ」

「あんたが何者かは聞かん。たまにで良いから店に顔出してくれ。約束通り武器は言い値で買ってやる」

「ありがたい。でも今のレートとかよく知らねえから見繕つてくれ」

俺はインベントリから無作為に武器防具やアクセサリを選び、カウンターへ次々置いていく。

「…………ツ」

然程、強くない武器や防具を選んだはずなのだが、ドワーフのおっさんは絶句している様に見える。やはり3000年という月日は相当なものらしい。

「で、どの位になるんだ？」

「あ……ああ、俺の今この店にある金庫の金、全部でどうだ？。確か70億位あつたはず」

「いや、それは——」

「足らねえか」

「そういう事言つてんじゃねえよ。店主はそれで良いのか」

「おらあ武器や防具が好きだから武器屋やつてんだ。金なんて二の次に過ぎねえ。お前の武器はすげえ業物だ。生半可な覚悟でたどり着ける頂きじゃねえ。俺にはそれがわかる。だから、そんなものをこれだけ売つてくれるあんたに、せめてものお返しとして俺の持つ全財産をやるつて言つてんだ。この武器達に囲まれるならもう死んでも後悔はねえ」

「そこまで言うか。わかった。あんたの覚悟として金は頂くぜ」

「じゃあ、裏の金庫に案内すつからよ。一緒に付いてきてくんなあ」

俺は頷き、店主の後に付いていく。

裏手の扉を開け、1人用の小さな工房を抜けるとまた扉だ。

その扉を抜けると地下へと続く階段が現れた。

「この下が金庫だ」

石造りの階段を店主と共に降りていくと、ダイヤル式の鋼鉄製の扉が現れた。

「よしよし、いい子だ。さあ言う事を聞いておくれ」

主人公はまるで子供を諭す様な言葉づかいでダイヤルを不規則に回しだす。

しばらくしてダイヤルから手を離すと扉がひとりでにゅつくりと開いた。

金庫の中は埋め尽くされんばかりの金貨でいっぱいだ。さながら金の波と表現できるだろうか？

眼前には数え切れない程の金貨が積まれている。

「——これ全部が金貨？」

「さつきも言ったが、70億はあつたはずだぜ。煙臭え故郷飛び出してはや半世紀、世界中周った時に集めた金だ」

「ほんとにいいんだな？ やっぱ返せつてのはなしだぜ？」

「おう、どーんと持つていけ。どうせおらあ貯めるだけで使わねえからよ」

俺はインベントリから、コードレスの赤い掃除機を取り出し、スイッチを入れる。金  
がみるみる掃除機に吸い込まれていき、あっという間に金庫は空になった。

「やっぱ面白え奴だな。ヒヒイロカネの兄さん」

「そうか？ まあお金大好き君掃除機パージヨンは確かに見た目ユニークだしな」

店主は踵を返し、階段を登っていく。

俺も掃除機をインベントリにしまい、後を追う。

「今日はいい日だ。酒が飲みたくなった。もう店じまいとするか」

「じゃあ、俺も行くわ。じゃあなドワーフのおっさん」

「おうヒヒイロカネの兄さんも達者でな」

俺は店の出入り口の扉に手をかけ、外に出る。扉のかけた手を離そうとした時、ふと  
思い出し聞いてみる事にした。

「なあ、ドワーフのおっさん。この金貨の名前は何て言うんだ？」



「金貨の名前？ ローゼス金貨だが？」

「ローゼスってのがこの大陸の名前なんだな？」

「ああ、そうだけ。ヒヒイロカネの兄さん。んなもん、常識だろ？」

「ふうん。ありがとな、ドワーフのおっさん」

まさかとは思ったが、金貨の名前が大陸の名称になっているのもハガセンと一緒に。

この異世界の名称を知った俺は、ドワーフに礼を言いながら武器屋を後にした。

## 第6話 俺、ギルドへ行く

武器屋で資金を作った俺は、ブラブラと適当に町を歩いていた。

「そろそろギルドに行つて、冒険者登録でもするか」

ベローアの街をあらかた見て回り、やる事が無くなつたため次の段階へ進もうと俺は思った。

「承知しました。では、マップにギルドの場所を表示させます」

「ああ、よろしく頼む」

頭の中のマップに、赤く点滅を繰り返す斑点が表示された。

「然程、遠くはないな」

暫く歩き続け、ギルドの建物が見えて来たため扉の前で足を止め、外観をしげしげと見つめる。

ギルドは2階建ての中々に立派なログハウスの様なデザインをしている。中からは人の笑い声やら怒鳴り声が聞こえるあたり、かなり賑わっている様だ。

「結構、立派だな」

両開きの扉を押しギルド内へ入ると、あれだけうるさかったギルドに一瞬静寂が訪れる。

俺は注がれる視線の一切を無視し、受付のお姉さんへと向かう。

「ようこそ！ ベローアのギルドへ！ 御用は何でしょうか？」

見るとお姉さんさんには可愛らしい犬耳が生えていた。

うお〜！ 獣人だ！ そういやはがせんには亜人種って基本的に敵ばかりで、コミュニケーションとれるのなんていなかったな。

「あの、お客様？」

「いや、失礼あまりに可愛かったもので、見惚れてしまいました。ギルドへ登録したいのですが良いですか？」

「あら、ありがとうございます。勿論、大歓迎ですよ」

「不潔ですわ……」

ネメシスが何か言ってるが、華麗にスルー。

「受付を担当させて貰っています。ウエンディと申します。では、こちらの水晶に触れて頂けますか？」

俺はウエンディと名乗った受付嬢の言う通りに水晶へ触れる。

すると、最初はニコニコしていたウエンディさんはどんだん顔を強張らせていく。

「え……えつとゲイン様、ほ……本当に当ギルドに登録でよろしいのでしょうか？」

さつきと言葉使いが違うウエンデイさんに一瞬困惑したが、平静を保つ事に尽力する。

「え、ええ、よろしくお願います」

「申し訳ございません。私では決めかねますので、上の者を呼んでまいります」

そう言うとうエンデイさんは早々と2階へ上がっていった

「何いッ!? 全ステータスと職業判定不能の新人が来ただど!?!」

「おいおい……マジか?」「故障だろ」「ああ、そうに違いねえ」

後ろがざわついているが無視する。

バアンツとドアを乱暴に蹴破る音がし、2階からマッチョなハゲがこちらを睨み付けながら近づいてくる。

「おらあ、このギルドマスターやってるヴァルガスってんだがてめえがゲインか?」

「ん？ ああ、そうだけど？」

「妙ちくりんな甲冑着やがって……おい良いか！ この水晶はな！ 100レベルまでステータスを見る事が出来る水晶なんだぞ？ てめえ！ この水晶に何か細工しやがったな!!」

「俺は何もしていないぞ？」

「あくまでしらを切るつもりなんだな！」

そう言うのとカウンターから少し離れ、2本の剣を持つてくる。

「水晶が使えねえ以上、実力を見せて貰おうか！ もし、お前が勝ったら、水晶弄つてねえつて事も信じてやるし、ギルドマスター特権でクラス制限を撤廃してやる！ どうだやるか!!」

「別に断る理由はないな」

「ギルドマスターのヴァルガス直々に相手!?!」

「あくあ、あの騎士のにーちゃん死んだな」

なんだか周りが妙に騒いでいる。

あのヴァルガスとかいう禿マッチョはそれなりに強いようだ。

「ギルドの裏に空き地がある！　そこで勝負だ！　ボコボコにしてやる！」  
「力量測るんじゃねえのかよ……」

俺は言われるままギルドマスターヴァルガスの後について行った。

## 第7話 俺、ギルドマスターと決闘する

裏にあるという空き地は結構な広さだった。一対一のデュエルならお誂え向きだろう。

「これよりギルド公認のデュエルを開始します！ 禁止事項は3つ！ ひとつ！ 相手を殺害する事！ ふたつ！ 範囲攻撃や、魔法スキルの使用！ みつつ！ 仲間による援護や乱入！ これらの行動を禁止とします！ 今回勝利条件は特に設定されていないので、相手を屈服させるか武器の破壊及び、自らの手から武器が離れた瞬間とします！」

ハキハキとしたウエンデイさんの声で決闘のルールが説明される。

「では、始め！」

「いくぞ！ 新入りーッ！ 瞬双雷斬!!」  
しゅんそうらいざん

「……ッ！」

始まるやいなや、ヴァルガスは戦士スキルで攻撃してきた。

凄まじいスピードで、雷を帯びた左右の横薙2連続の斬撃が、俺に迫る。

俺は上半身を反らし、それを難なく回避する。



少なくとも、あの村で出会った世紀末よりはずっと強いようだだな。

「おい、あいつマスターのスキルを避けやがったぞ……」

外野が何やら驚いているが、俺は努めて無視しヴァルガスの次の行動に注視する。

俺が本気を出せば、一瞬で間合いを詰めヴァルガスの持つている剣を握り潰せばそれで終いだらう。

俺には気になる事があった。

ヒーローのジョブには手加減というスキルがあり、どんな攻撃スキルで相手を攻撃しようがHP100残るといふものだ。

このスキルを起動させ、ヴァルガスを攻撃した場合どうなるのかな？ まさか死にやあせんだらう。いっちょやってみるか。

つーか、大したことねえな。ヴァルガスが今は放ったスキルはハガセンで戦士ジョブがレベル30程度で覚えるスキルだ。

「やつぱりな、この世界ハガセンと何か関係がありそうだ」

「ちよこまかと！ 避けやがって！」

ヴァルガスが剣を乱雑に振り、俺はそれを最低限の動作でもって避け続ける。

乱雑に剣を振っていたヴァルガスが動きを止め、後ろへとさがった。

「ごうしん剛身！ りゅうすい流水花！」

あれは戦士ジョブ初期のバフで攻撃力と素早さを上げるスキルか……何か、大技が来るっぽいな。

「これで最後だ新入りッ！阿修羅八連斬!!」あしゅらはちれんざん

俺はヴァルガスの発動させた攻撃スキルを見届けつつ、手加減を発動させ前屈みになる。

「なんだあ？ 諦めたのか？ だがもう、遅えぞ！」

「ガイドウ流剣術奥義 神羅しんら・弐にノ形のかた

「な——!? 新入りの姿が消えッ——」

バギン！ という音と共に、ヴァルガスの持っていた剣の刀身が縦に折れ、左腕が吹き飛び血飛沫をあげつつ、そのまま垂直に吹っ飛ぶ。

俺が放った技は剣を前屈みになりつつ敵の攻撃がヒットした瞬間、懐に一瞬で移動、死角から上方向に向かって袈裟斬りをかますというスキルである。カウンター技だが、予備動作が異常に短い為見てからの回避はほぼ不可能。ダメージソースとして優秀な技の1つだ。

「ぐわあああ！」

「——しよ、勝者ゲイン！」

「んな事言ってる場合か！ おい、ヴァルガス大丈夫か！ やりすぎた！ 今すぐ治し

てやるから！ エクストラヒール！」

俺はすぐさまうめき声を唸りながら倒れているヴァルガスの傷を癒やす。

「騎士がヒールだと……」

「最後のありやなんだよ……騎士のにーちゃんの姿が一瞬ブレたかと思うと、マスターが吹っ飛びやがった……」

「クソ！ 死ぬかと思っただぞ！ 手加減しろ！」

いや、手加減なら使ったつっの！

「お前やっぱ只もんじゃねーな……今すぐ俺の部屋に來い話がある」

## 第8話 俺、依頼を受ける

俺はギルドマスターのヴァルガスに催促され部屋の中へと入る。

「ここが、俺の部屋だ」とと入れ」

「ああ」

「で……改めてって所なんだがお前何者なんだ？　なんでこの街に来た？

お前がべらぼうに強えのは、実は闘う前からわかった。ひと目でわかったぜ。こりや、やべえのが来たな」

ニヤつきながら俺を、舐め回す様に見てくるヴァルガス。

「えつと……、俺は武者修行の為に山奥で暮らしてたんだが、全ての修行を終えたから人里に降りてきたんだ」

俺は、いつか誰かに聞かれると思ってネメシスと共に作った身の上話を話す。

「ほーう、そうなのか。ずっと気になってたんだが、お前の面《つら》見てみたいんだが  
良いか？」

「ん？　ああ、構わないよ」

「それフルプレートだろ？　外すの手伝ってやる」

「いや、大丈夫だ」

俺は後頭部の首の付け根辺りに、グツと両手の親指を押し込む。するとプシュー……と空気が漏れ出る様な音がし、小さな煙を上げると外格のヘッドが外れる。

「全く、お前を見てると退屈しねえな」

「そりやどうも」

「黒髪に黒目か珍しいな」

この世界の住人の髪や目は皆かなり、ハイカラな色をしている。

黒髪黒目は珍しいらしい。

「で？ 話つてのはもう終いなのか？」

「いや、これからが本題よ。俺、直々にお前に依頼を出す。

ここから西へ12キロ程行った森にいるある人物の様子を見てきて貰いてえんだ」

「どんな奴なんだ？」

「お前みてえにある日フラツつとこの街に現れた女だ。最初はこの街に暮らしてたんだが、20年位前に突然発狂してな。この街を出て深緑の森に引きこもっちゃったんだ。お前程ではねえと思うがなかなか強者だったぜ」

「その女のジョブは？」

「よく分からねえ……いつつも何かしらの護衛がその女の傍らにいてな、こつちの話も



## 第9話 俺、ホームで休む

ギルドを出ると既に外は暗くなっていた。

「まずは、ひと目のない所へ行くか」

俺は人気のない裏路地へ入る。

そこでふと思いつくことがあった。

「そーいや、インベントリって開けるのか？ ものは試しだな」

俺はハガセンのUIを思い浮かべる。

すると、目の前に半透明のインベントリが開いた。

「おおっ！ やったぞ！ これでギルドルームが使えるな」

俺はインベントリから緑色に輝く大きなエメラルドの様な宝石が付いた金の鍵を取り出し、何も無い空間へ向かってキーを回す。すると突如として白い扉の様なものが現れ、俺は中へと入っていく。

この金の鍵はギルドを設立すると強制的に手に入るアイテムであり、ルームキーやホームキーと呼称される必須アイテムのひとつである。

「おかえりなさいませ。ゲイン様」

メイドが俺に頭を垂れ挨拶してくる。

「あ、やっぱホームNPCも機能してるんだ」

このギルドにいるメイド達はNPCであり、一定のコミュニケーションしか取れない。瞳にも生気は感じられず、ただ黙々と自分に与えられた仕事をこなしている。

「それなりにメンバリーいたのになあ。皆ハガセンやつてるんだろなあ。俺腐つてもグルチャリリーダーだったから、大騒ぎになつてるのかなあ」

俺は少し黄昏る。最大で10人程の決して大きくないギルドではあったが、皆廃人と呼ばれる人種であり、一人で1000人近くのハガセンプレイヤーを相手取つても気後れしなかった。そんな仲間達がいたホームも今は俺一人となつてしまった。このホームも仲間との大切な思い出の1つであり、ある日無駄に素材が余りどうせならと無駄に豪華な内装にし皆でどんちゃん騒ぎしながら改造していた記憶が蘇る。

俺は螺旋階段を昇り、適当な部屋に入るとヤルダバオトⅧ式をキャストオフする。

「ネメシス、外格をオールキャストオフしてくれ」

「承知しました。オールキャストオフ開始」

バキヤツ！ という音と共に全外格が外れ、俺の目の前で再び組み上がっていく。

「ゲイン様、ギルドマスターの依頼のサモナーは元ハガセンプレイヤーである可能性が高いと思われませう」



組み上がったヤルダバオトⅧ式からネメシスの声が聞こえてくる。

高性能なAIを積んでいる外格はAIの完全制御により、自律して動いたり会話したりするのだ。

ちなみに今の俺の普段着もすっかりそのままだ。

上半身は白のチュニックに下半身は上質な革の長パン。靴も革でできた茶色の長靴を着用という実に地味な出で立ち。

普通の職業からしたら無課金ユーザーと思われるだろうがこれで良いのだ。眼の前に突っ立っている漆黒のパワードスーツこそ俺の一張羅なのだから。

「ああ、そうだな。俺以外にもやっぱいるんだな、この世界にハガセンプレイヤーが。おまけに人型をサモンしてるときてる。こりや、本気でいく必要ありそうだな」

そいつがどの程度ハガセンでやってきたかは知らんが、雑魚ではないのは確かだ。ハガセンの人型モンスターは皆ユニークと呼称され、強力なモンスターばかりだ。

「おまけに完璧に使役してる臭いな。その女のレベル自体も相当あると見ていいだろう。今日はもう遅い。明日になったらその森へ向かうぞ」

「承知しました。ゲイン様」

## 第10話 俺、森へ赴く

「んあゝあ。今何時だ？」

「早朝4時を過ぎた所です」

「よし、出る所を見られると面倒だ。とっとと行っちゃおう」

俺が布団から出て立ち上がると、部屋の隅で立っていたヤルダバオトⅧ式が俺の躰へ吸い付くように着装されていった。そのまま螺旋階段を降りて、ホームを出た俺はギルド前へと立つとホームの扉は露と消え去る。

「さて、西へ12キロだったか？ とっとと、ブースト使って行っちゃおうか。ネメシス、全ブースターのリミットを30%開放しろ」

「承知しました。ブーストアライズ、いつでもいけます」

「よっしゃー！ 飛ぶぞー！」

俺は思いつきり足に力を込め跳躍する。4メートル程のところまでブースターを起動させる

背中のメガブースターと脚部のミニナムブースターを起動させ、空中で静止する。

「ネメシス、一応マッピングを頼む」

「承知しました。マッピングを開始します」

凄まじいスピードで滑空し西へと進む。

およそ15分後……。

「この辺りかね？ ネメシス、ブースターの出力を落とせ。森へ入るぞ」

俺は巨大な森林地帯へ落ちていく。

木が外格に当たり、へし折れていくが無視し地表へと大昔やっていたパワードスーツ物のハリウッド映画ばりにカッコつけた着地する。

スーパーローラー着地、見事成功。一度でいいからやってみたかったんだよねこれ。

「ここが深縁の森だったか？ ネメシス、魔力探知してターゲットをサルベージしろ」

「北西へ5キロの地点にそれらしき反応をキャッチしました」

「よし、行くぞ」

歩く事1時間……。

「お！ ありや、同郷確定だな」

見ると鬱蒼とした森の中で、とても不釣り合いな格好をした女騎士が金と銀で裝飾されたド派手な大剣を地面へ刺し、仁王立ちしていた。

「やあやあ、こんにちは。今日は良い天気ですね」

「ん？ なんだ、貴様は？ この先へは我が主の命により、何人たりとも通す訳にはゆか

ぬ。即刻立ち去るが良い」

怪訝そうにしている女騎士の顔を見ながら、俺は右手を自分の顔の前辺りでピンツと伸ばし軽く上下する。

「残念ながらそうもいかないんだよね。一応仕事なんで」

「一歩でもそこから動いてみよ。後悔する事になるぞ」

「ふーん、で？ どう後悔させてくれるわけ？」

俺は軽く挑発し、女騎士に1歩近づく。

「貴様は！ 私は忠告した！ 敵対行動と見做す!!」

女騎士が剣を天に向けてと、白い光が女騎士を中心に集まり眩い光を放つ。

「我の名は戦乙女ヴァルクユリア！ 至高の御方であるイシス様をお護りする為、敵を撃滅する！」

「やっぱりな、戦乙女ヴァルクユリアだったか！」

「くらえ！ 下郎！ ブレイブスラッシュユ!!」

「防御を推薦します」

ネメシスが防御しろと言ってきているが、俺はその提案を無視する

「いや、このままでいい」

白銀色の斬撃が俺に迫る。

俺はヴァルキュリアの大剣を手で掴み受ける。ガギインツ！ という耳障りな音と共に火花がった。

「なツ……！ 私の渾身の一撃をただの人間が手で受け止めるだど!？」

あまりの衝撃なのか、たいそうな言葉使いが素に戻っている。

「化物め！ ならばこれでどうだ！」

ヴァルキュリアは背中から天使の翼を生やすと、空中へ舞い上がり距離を離す。

「咎人よ汝の罪を数えよ、咎人よ神の声を聴け、我こそ汝らを断罪せしめる者なり！ ラ

イトニング・セイグリッド・スピアスコール!!」

幾千幾万の針状の光の束が俺に亡きものにする為殺到し、俺はそのまま飲み込まれた。

「ハアハア、この技をくらって平気な……者などおるまい……」

眩い金色のレーザーの様な光が徐々に収まる。

「まさか……そんな馬鹿な！」

「うくん、もうちよい強いと良かったんだが、まだまだだな！」

然程強くないな。外格にも傷ひとつない。

とつとと諦めてくれると有り難いんだが。

「くツ……殺せ！ 主の命に従えぬモノに存在価値はない！」

ヴァルキュリアは戦意を喪失したのか、地面に両手と膝を付き項垂れる。

「いや、まさかこんな所で本家本元のくつころが聞けるとは思わなんだ」

「不潔ですわね……」

「だからね、俺はあんたの主人の様子を見に來ただけなんだって」

「しかし、主の命に背くわけには……」

「あたしがどうしたって？」

不意に後ろから女性の声が聞こえ、俺は振り向いた。

## 第11話 俺、同郷の人とお話する

「あんたがイシスさん？」

「そうよ。つてあんた……その格好まさか!? フルメタラー!？」

「お！ 正解！ 皆俺の事騎士扱いするんだよね。もう参っちゃってさ〜」

「はやく！ 家に来て！ ここじやダメ！」

イシスさんは俺がフルメタラーと知ると急に焦りだし、俺の手を掴むと走り出した。

「何だ？ 急にどうした？」

「良いから！ こつちに来て早く入って！」

ぱつと見何もないが、どうやら認識阻害系のスキルがとても広範囲渡ってかけられているのがわかる。

「はあ、とりあえずこれで安心ね。長かったわ。ようやく私以外のハガセンプレイヤーに出会えた」

「ああ、やつぱさそうなんだ。で？ なんでそんなに焦ってるわけ？」

「あいつに少しでも話を聞かせない為よ」

「あいつ？」

「神を名乗る球体よ。貴方もあいつから転生させて貰ったんでしょ？」  
「そうだけど？ あんたもそうなの？」

「ええそうよ。生前の私は体が弱くてね。満足に動ける体じゃなかったの。ハガセンの中だけが私の庭だったの。で、ある日医療ミスで私死んじやったんだけど、例のあいつがハガセンのデータを媒体にして、生き返らせてくれるって言ったのよ」

「俺の時とほぼ一緒だ……。どういう事なんだ？」

「あいつは私達を閉じ込めて、反応を楽しんでるのよ」

「なん……だつて？」

俺の思考は、停止寸前だった。

「私はこの事に20年前偶然気づいたの。私には当時、仲の良い友達が1人いたわ。私は彼女に異世界から転生してきたって伝えたの。そしたら、次の日どうなったと思う？」

「さあな、どうなったんだ？」

「この世から彼女の存在自体が、なくなってたわ」

「な……」

「良い？ 誰にもこの事言っちゃあダメよ」

「ヴァルガスはお前が急に発狂したと言っていたが？」



「あそこから離れる為に、わざと狂ったフリをしたのよ。いつか必ず私に飽きて、同じ様な存在に目を付けると思ってたわ」

「それが俺って事か……」

「ヴァルキュリアを彼処に立たせたのもわざとよ。元ハガセンプレイヤーなら、分からない筈なもの。それに……私のヴァルキュリアは弱くはないわ。ヴァルキュリアの攻撃に対応してくる人を、ずっと待つてたの！ 20年間ずっと耐えて待つてた！ ようやく会えた元ハガセンプレイヤーがあなたの様な規格外に強い人で、本当に良かった！」

相当嬉しいのか、イシスさんは俺の手を両手で掴んでいる。

「なんとなく事態は飲み込めた、結局どうしたいんだよ？」

「良い？ この世界に特殊ジョブを持つ住人は、今の所あたしとあなたの2人だけよ。というか、ここの住人は派生する為のジョブそのものを知らないの」

「——そういえば戦士や魔術師はいるが、ヒーローやロボットは一度も見なかった」

「でしょ？ 逆に言えば、特殊ジョブの人間⇨転生させられて来られた人って事よ」

「なるほど、で結局どうすんだ？ 保護でもするのか」

イシスさんは、衝撃の一言を口にす

「元ハガセンプレイヤーを集めて、あの自称神様を倒すのよ。あいつは、私の大切な親友

を殺したも同然。絶対許さないわ  
「はあ？」

俺の思考は、遂に停止した。

## 第12話 俺、イシスさんに自己紹介する

「とりあえずベローアに戻るわ。イシスさんあんたの事は見つからなかったって事で良いよな」

「ええ、お願いするわ。あ、そうだ何かあった時の為に、アドレス交換しときましょ」

「ああ、そうだな。その方がいいか。しかし、改めて見るとイシスさんすげえ格好だな」

イシスはSM嬢が着るボンテージの様な姿をしている

「しょ、しょうがないでしょ!? これが一番良い装備なの! 全ステータス5割アップするし、屈服させ安くなるスキルが付いてるの! あなただって、全身黒づくめではたから見ると完全に悪役じゃない!?」

「いや、ヒヒイロカネ合金の加工で絶対に黒くなっちゃうんだよ、格好いいから全然良いけど」

「ヒヒイロカネ!? あんな取れるかどうかもわからない超絶難攻不落の鬼クエストクリアしたの!」

「そりやそうよ、ヤルダバオトVIII式を完成させる為に、馬鹿みたいに通ったからな」

「1個だけじゃないの!」

「んなわけないやん、一々覚えてないけど2桁は必要だった筈」

「正しくはヒヒイロカネx20、ギガントサイバードラゴンの尾x7、デーモンデスピアーの羽x5、真・機械皇帝アンティークオリハルコンギアの魂x1以上です」

ネメシスが答える。

「全部馬鹿みたいに強いモンスターばかりじゃない!？」

「いや、初めて素材見た時は無理ゲー過ぎてゲロ吐くかと思ったYO！ H A H A H A I！」

「それをやり切る貴方が怖いわ。今の女の人の声がA I ってやつ？」

「イシス様、お初にお目にかかります。超高性能自律A I のネメシスと申します」

「あ、これはご丁寧に」

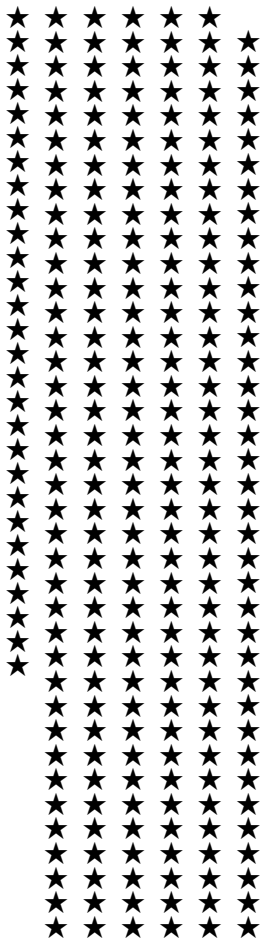
「さてと、自己紹介も終わったしそろそろ帰るわ」

「良い？ 無駄に目立つ様な事しちゃダメよ？ 下手したら勘付かれるわ」

「わかったわかった、じゃあな！」

俺はブースターを起動させ飛び立った

「絶対にわかってないわね、間違いないわ」



## 第13話 俺、勇者を発見する

ベローアへ戻ってきた俺はギルドへ入る。

何だか少し騒がしいが、気にせずウエンデイさんの所へ直行する。

「あのくヴァルガスの依頼、一応やって来ました」

「あー！ ゲインさん、お疲れ様です！ ギルドマスターなら自室に居ると思いますので、行ってみてください」

「アツハイ、わかりました」

2階のヴァルガスの部屋へと行く俺

「チーツス、失礼します」

「まともに喋れねえのか！ まあ、いい入れ」

「あんたにだけは言われたくないわ。それ」

「で、どうだった？ 様子は？」

「いや、それがてんで会わせてくれなくてな。まあ、死んではないっほいぞ」  
「お前さんでもダメだったか、うくん……」

ヴァルガスは頭を抱えている様だ。

少しくらい、顔を見せてやってもいいんじゃないだろうか？

まあ、俺には関係ないけど。

「ところで、あの少し騒がしいけど何かあったのか？」

「おう、この街に勇者が来たぜ」

「ほくん、勇者ねえ……ゆ……ゆ勇者アツ!？」

「うっせえな！ 近えんだから大声出すな！」

俺は扉を思いつきり開け、2階から身を乗り出し、1階にある人だけの方を見る。

「おいおい、マジか……」

そのうしろ姿はハガセンにいた勇者と全く同じだった。

これはマズイすこぶるマズイぞ……どうにかして手を打たなきゃ。

後ろからヴァルガスの声が聞こえてくる。

「今から東にある廃鉱山に行つて、そこに住み着いてる悪魔を退治しに行くんだとよ」

「それマジか！」

「お……おう」

「よし！ わかつた！」

俺は大急ぎで走り出しギルドを出ようとする。

「お、おい待て！ 報酬どうする気だ！」

「帰ったら受け取る！ 用事思い出したからまた後でな！」

ギルドを大急ぎで出た俺はベローアの出口に向かって全速力で突っ走る。

「ネメシス大急ぎで東の廃鉱山とやらに行くぞ！」

「承知しました、ゲイン様。既にマップピングは完了しております」

「よし！ ブースターを使って速攻で行くぞ！ 何としても勇者より先に着くんだ！」

俺は先程帰り際に交換したアドレスを開き、イシスさんと連絡をとる。

「何？ どうしたの？」

「勇者だ！ 何故かこの世界に勇者がいる！」

「そりゃそうよ、剣と魔法のファンタジーの世界なんだもん。勇者くらいいてもおかし

くないわ」

「違う！ ハガセンの勇者がこの世界にいるんだ！ さつきギルドにいたらしい！」

「はあ!!? 何それどういう事!?!」

「俺が知るか！ ここの勇者がハガセンの勇者と同一人物なら、後々恐ろしい事になる

ぞー！」

「そうね。確かにマズいわ。どうするの？ 殺す？」

「ゲームだったらそれで良かったが、ここはあくまで現実の世界だ！ どうなるかわか

らんー！」



「そうよね……じゃあ！ あんたまさかあれをやる気なの!?」  
「それしかないだろうが！ 先回りして廃鉱山の悪魔とかいうのぶっ倒して、勇者の経験値を奪うしかない！」



—— 会話から4分後。

「よし！ ここだな！ 一気に攻略するぞ！」



廃鉱山最下層にて……

「ん？ 何処ぞの馬鹿め来おったかフッフ、人間は久しく喰っておらん楽しみだ。どうやらなかなかの強者の様だな。そうでなくては、喰いがいがない」

—— 2分後……。

「良くぞここまで辿りけたな！ 人間よ我の名は——」

「うるせええええええ!!」

「ふべらッ!」

雑魚が何か喋ってたが一切無視し、鉄拳を顔面に叩き込むと雑魚の上半身が弾け飛んだ。

「いよし! ミッション完了! さあ! 悪魔は何処だ?」

俺は左右に首を振り悪魔を探す。しかし、それらしき者は見当たらずズブズブと音を立てながら、消えかけている雑魚モンスターが一体いるだけだった。

「急いでたからよく見えなかったが、まさかこいつがそうだったのか?」

雑魚モンスターの体が完全に溶けると、薄く青色の玉の様な物が残った。俺は、玉に鑑定スキルを使用してみる。すると、鑑定結果が表示される。「デカラビアの呪玉」と表示された。

「何とか間に合ったみたいだな! 後はドロップした呪玉を勇者に渡すだけ! はあく! 疲れた。お、丁度良いところに椅子があんじゃん! ふいふ……しかし異世界かあ。ネット小説で起きるようなことが現実にくうして我が身に起きるとはねえ……。現実が小説より奇なりつて奴かなあ。ふああ……」

俺は動き詰めだった為、少しウトウトしてしまった。

「ようやく辿り着いたぞ! 廃鉱山の悪魔め! いぎ、尋常に勝負!」

誰かの叫ぶ声がし、目を開けるとそこには俺に向かって剣を構える勇者がそこにあつ

た。

## 第14話 俺、VS勇者

しまったあッー！ ウトウトして、つい寝ちまつてる内に勇者来ちやったッー！

目の前には金髪に紅眼のまるで女の子の様な顔立ちの少年が、無駄に装飾された派手な剣を俺に向けている。

服装は比較的オーソドックスと言っている、薄い緑色のチュニツクに革のズボンを着用している様だ。同じく革製の小綺麗なマントが目に入った。よく手入れされている様に見える。

「さあ！ 僕と勝負だ！ 人々の為に！ 僕は貴様を倒す！」

ずり足でこれまた小綺麗な黒い色の革製ブーツを地面に擦りつける様にジリジリと距離を詰める勇者。

「待て！ 落ち着け！ 俺は悪魔じゃない！ そいつならもう俺が倒した！ ちよつと色々あつて疲れてて、寝ただけなんだ！」

「見え透いた嘘を！ その全身真っ黒な姿！ 何より椅子に座っているのが何よりの証拠！」

「いや、俺の話聞いてッー！」

「問答無用!」

訂正しようとしていた所で、勇者が飛びかかってきた。

飛び上がり唐竹割を俺にお見舞いするつもりらしい……らしいが、その攻撃速度は余りにも遅く、人差し指1つで余裕のガードが出来てしまう

うっわ! 弱ッ!

「チッ! やるな! 悪魔め!」

勇者は俺に対し剣を振り続けているが、そのどれもがただ単に振っているだけであり、今も人差し指で延々と受け止め続けている。

「ハアハア、こ…こうなったら、奥の手をつかうしかない」

マジか。もう力尽きちゃったか。

「くらえ! 必殺! ファイヤーブラスト!」

勇者は剣を収めると魔法を俺に放ってきたが、その様な魔法はない。

恐らく火の初級魔法スキルであるファイヤーボールと、同じく風の初級魔法スキルであるウインドブラスターの重ね技か。

しよっぱいなあ。

勢い良く飛び出した火の塊が俺に着弾する。

「どうだ!? 悪魔め! これでひとたまりもあるまい!」

「はあく、発想だけは良かったが、他はダメダメだな」

俺は椅子から立ち上がり、そのまま一瞬で勇者の眼前に迫ると額にデコピンをかました。

「ギャンツ！」

癩癩かんしゃくを起こした猫の様な声を勇者が上げると、そのまま白目を向いてぶつ倒れた。

「ギャンって何だよ、モ〇ルスーツかよ……」

「滑稽ですね」

恐らくこの世界では、俺しか理解できないツツコミを言うと、同時にずっと黙っていたネメシスが口を開いた。

「もく、何もしてないのにどつと疲れた。さてと、ベローアに帰るか」

俺は気絶している勇者を担ぎ上げると、そのまま廃鉱山を全速力で駆け上がる。

廃鉱山を出た所でネメシスが口を開く。

「ゲイン様、その粗大ゴミをどうするおつもりなのでしょう？ そのまま道端に廃棄する事を推薦します」

ネメシスは悪魔扱いされた事に相当怒っている様だ。

「そんな訳にはいかないっしょ。一応、勇者だからね？ お前ネメシスって名前なのに悪魔呼ばわりされるの嫌いなんだな」

「悪魔呼ばわりされて嬉しがる女性などいないと思うのですが?」

ネメシスの目のハイライトが消え、半目になっていく。

ヤバイ。踏まなくていい虎の尾を踏んでしまった。

「いや、違うんです。ネメシスさん落ちついて。君自身の事を侮辱した訳じゃないんです。君の様に有能かつ、可憐なAIはそうはいませんよ。君にはとつても感謝しているんです。俺1人じゃやっていけないから。君ありきのヤルダバオトⅧ式つて所あるから。他のAIじゃこうはいきませんよ。うん。いきませんとも」

「嬉しくありません」

そう言っている彼女の顔は紅潮しきつている。ニヤつくのをかみ殺そうとしているのか、なんとも言えない表情を見せる。伏し目がちに、チラチラと俺と地面を高速で交互に見ている。

「フ、フフ……仕方ありませんね。元々特に気にはしていません」

遂に我慢の限界を超えたのか、ネメシスは紅潮しニヤつきながらの気にしてない宣言が飛び出た。

本人はこれニヤついてないって体ていなんだろなあ。これで弄るとまた電気ビリビリ放ってくるから黙つとこ。さっきまでレイプ眼寸前だったのにこの変わりようよ。

根は素直なんだよ。優秀なのに感情表現下手つぴなのよなあ。そこが可愛くはある

んだけど。

煽ると不機嫌になるから言いたくても言えないのがちよつともどかしい。

これ以外に特にトラブルもなく、ペローアへと戻ってきた俺はギルドへ直行する。

「あ、ゲインさん！ おかえりなさい！ つて勇者様!? 何故、ゲインさんが勇者様を担いでいるんです?! 一体、魔鉱山で何が!？」

「うん。えつとその……色々ありまして、とりあえずベッドとかつてあります?」

「2階に空き部屋があります! こつちです!」

ウエンデイさんが2階の空き部屋へと案内してくれる。

「ありがとうございます。後は俺一人で大丈夫です」

俺は気絶している勇者をベッドへ寝かせる。

「うーん、こうやって至近距離で顔を見るとマジで女の子にしか見えん。まさか——」

「いえ、ゲイン様が彼にデコピンを当てた際、指に付着したDNAを検査済みです。彼は真正正銘男性です」

「マジか」

「マジです」

「何故こんな所にハガセンの勇者アーサーと瓜二つの勇者がいるんだ……。これもうわかんねえな」



た。  
どういふ事なのか、俺は勇者のまだあどけなさが残る寝顔を見ながらひとり考えてい

## 第15話 俺、勇者の師匠になる

「ん……んあ、こころは？」

どうやら、勇者が目覚めた様だ。

「おはようさん！ 頭大丈夫か？ いきなりぶっ倒れるから、ビビったぞ」

「おのれ！ 悪魔め！ 不意打ちを狙うとは卑怯な！」

勇者は飛び起きると剣を抜刀し、俺を斬りつけようとしてきた為、騒ぎ立てる勇者を羽交い締めにする。

「お前いい加減にしろよ!! 違うって何度も言ってるだろうが！ 殺せたらとつくに殺してるわ！」

「では、本当に彼処で寝ていただけ？」

「あ……ああ、そうだよ。ちよつとした用事があつたんだ」

勇者の顔色がみるみる青くなつていった。

「ごめんなさい！ 僕、あなたの事を散々、悪魔と貶したばかりか斬りつけよう……」  
「いや、全然なんともなかったし別にいいよ。わかってくれたなら」

そう俺が言うのと突然ベッドから飛び出し、そのまま俺に向かって土下座をする勇者。

「お願いします！ どうか、僕の旅に同行して頂けないでしょうか！ 僕はあなたのように強くならなくてははいけないんです！」

「は？ 俺が勇者に同行!？」

え、マジか。どうしたもんかなあ。ん？ 待てよ？ これって勇者をこつちへ引き込めるんじゃないか？ 勇者の反応を見るに何も知らない様だ。

素顔が見えないのを良いことに俺は漆黒の笑みを浮かべる。

あの真つ白ミラーボールめ、俺はお前の思った通りに動くと思つたらそうは問屋がよろさんぞ。見てろよ見てろよく、勇者を超絶強化して逆にけしかけてくれるわ。何ならこいつと共闘も良いかも知れんな。まさに俺は今ハガセン時代に於けるi fを体感している訳か——。フフフ……否が応でもテンション上がるな。神を屠らんとする奇跡のカーニバル開幕だ。

「仕方ないなあ！ じゃ、同行してあげましょう！ 君はまだ、弱いからね！ 俺が君を俺並みの強者にしてあげよう！」

勇者の顔はパーと明るくなる。

「よろしくお願いします！ お師匠様！」

「うむ、苦しゅうない。さ、じゃあ出るか」

「わかりました！」

弟子となった勇者と共に部屋を退出し、階段を降りギルドを彼と出ようと扉に手を掛けた所で、俺は肩を掴まれた。

「おい、待て！ まだお前にイシスの件の報酬渡してないだろうが！」

「ああ、忘れてた。んで、報酬って何くれるの？」

振り返るとヴァルガスが俺に黒いカードを手渡してくる。

「お前専用のギルドカードだ。黒い色はランク制限が一切ない証拠だ。なくすなよ？」

「そっか、色々ありがとうな。明日この街を発つ事にした」

「ふーん、どこ行くんだ？」

隣にいる勇者が答える。

「港町のクルードへ、お師匠様も僕の旅に同行して貰う事になりました！」

興味なさげにヴァルガスは頷いた。

「お前なら勇者の旅にもついていけるだろ。まあ、精々死なん事だな」

俺と勇者はギルドを出ると外はすっかり暗くなっていた。

勇者を見ると目をキラキラさせて俺を見ている。

「お師匠様！ やはりお師匠様は只者ではないのですね!? ランク制限解除のギルド

カードなど初めて見ました！」

「まあ、とりあえず明日の朝、ここで待ち合わせって事で。もう今日は、遅いからな」

俺は勇者と別れるとホームを起動させ、自室へ入りアドレスを使いイシスさん呼び出す。

「もしもし？ 勇者どうなったの？」

やはり勇者の事が気になってる様だ。

「ああ、その事なんだけど、俺勇者の旅に同行する事になった」

「——はあ!? 同行してどうすんのよ！ 何考えてんの!？」

半狂乱になっているイシスを鎮めるために、俺は勇者に同行する理由を説明する。

「落ち着けて。あの勇者はな、恐らく球体が俺達を倒す為にこの世界へ呼び出したか作り出した存在だ。あいつは何も知らなかった。味方に引き込んで育てれば、絶対に戦力になると思ったんだ」

「ほんとに上手くいくの?」

「お前、俺を誰だと思ってるんだ？ 廃人ぞ？ 我、廃人ぞ?」

ブツという音が聞こえ、通信を切られた。



宇宙空間の様な場所で、白い球体がボードの様な物を覗いていた

「ハハッ、まさか試しに送り出してどうなるかと思えば、勇者を弟子にするとはね。本当に面白い人間だなあ。この先どうなるか全く予想つかないよ。これだから、人間を観察

するのはやめられないね」

白い球体の不気味な笑い声が空間に響き続けた。

## 第16話 俺、勇者とお話する

翌朝、6時くらいにホームを出た俺は、待ち合わせのギルド前へ向う。

外は既に市場の人々が客を呼び込もうと張り切る声が聞こえる。

「よー！ おはようさん、随分早いな」

勇者がギルド前で俺を待っていた。

「お師匠様！ 今日からよろしくお願いします！」

彼は元気よく俺に挨拶を返してくる。

「港町のクルードへ行き、船に乗って魔法大国ルギームへ行きます。そこに次の悪魔の反応があるようなんです」

「悪魔の反応？ そんなものがわかるのか？ 今更で悪いんだけど、名前教えてくれる？」

「はい！ 僕のパッシブスキル？ つてスキルみたいです。僕の名前はアーサー・クレイドルって言います！ 改めてお師匠様！ よろしくお願いします！」

「アーサー……ねえ。それとパッシブスキルとスキルは別物なんだけど……。まあ、いいや」

やはり、思った通りハガセンの勇者と同名であった。

俺は、更に突っ込んだ質問を試してみる事にした。

「出身は？ どうやって勇者になった？」

「出身はこの大陸ではなく第3大陸の王都出身で、ある朝神様から啓示を受け勇者になりました！ 誠心誠意！ 人々を守る為、頑張りたいです！」

アーサーの自己PRを聞きながら俺は衝撃を受けた。

ハガセンの設定と違っていたのだ。

名前こそ同じだが第3大陸、王都、神からの啓示、この様な設定はなかった記憶がある。

俺は平静を装い最後の質問をする。

「そ……そうか、頑張ろうな……。これで最後の質問にするな？ お前地図とか一切持っていない様に見えるんだけど、どうして道知ってるの？」

アーサーは俺の質問にドヤ顔をしつつ口を開いた。

「神の啓示を受けた時に千里眼とテレパスのスキルを授かり、この全大陸の地理が頭の中へ入ってきました！ そのお陰です！」

俺はアーサーの答えに寒気を感じる。

やはりあの球体はアーサーを使い、俺を監視していたのだ。設定も恐らく作り変えた



か、挿げ替えられた記憶だろう。早急に何とかしなければならぬ。

「アーサー、差し支え無ければ鑑定スキル使ってお前のステータス見てもいいか？」

アーサーは俺の問いに即答えた。

「勿論です、どうぞ！」

俺は鑑定スキルを起動させると、アーサーのレベルやスキル諸々が脳裏に浮かぶ

俺はアーサーのスキルを覗いていくと、最後に見え覚えのない欄が最後にあり首を傾げる。

なんだ？ 一切閲覧出来ない欄が一つだけある。それに、この全大陸地理完全理解つてのも初めて見る。つーか、思った通り雑魚いなあ。何だこのステの低さは？ ハガセンの初期ステでもこんなものよりよっぽど高かったぞ。今の今まで良く死なずに生きてこれたな……。

首を傾げているとアーサーが不安な顔をし、俺を見上げていた。

「な、何か、僕のスキルにおかしな点でもあったんでしようか？」

「いや、大丈夫だ。しかし、まだまだだな。これから俺が強くなってやるからな。うーん、千里眼とテレパスだが、恐らくお前には使いこなせないだろうと思う。俺がもつと良いスキルをお前にやろう」

よし、我ながらナイスフォロー。疑いをかけることなくヤバメのスキルを消す方向へ

持っていったぞ。

アーサーは一瞬、困惑したみたいだが『もっと良いスキル』という俺の台詞が聞こえた事で二へラ顔になった。

何てわかりやすい奴なんだ。絶対嘘つかない、いやつけないタイプだな間違いない。

俺は一度立ち止まり、アーサーの額に手を当てるとスキル譲渡の為にギフトを起動させ、上書きを開始した。

まず『千里眼』を『限界突破』へ変更し、次に『テレパス』を『超感覚』に変更する。「よし、終わったぞ」

俺はアーサーの額から手を離し様子を見る。

「どうやら何ともないみたいだな」

「お師匠様！ きつと、つかいこなしてみせます！」

「よっしゃ！ じゃ、クルードへ向かうとしよう」

俺がアーサーと再び歩き出そうとしたその時、向こうから剣士風の女性が息を切り、こちらへ走ってくる。

「お願いします！ 助けて下さい！」

女性は金髪の髪を三つ編みにし、胸部と腰、を重点的に守る為の軽装甲冑を身に付けている。

顔からして、恐らくまだ10代そこそこの小娘といった感じだ。彼女はアーサーにすがりついている。

「どうしたんですか!? 一体何が!？」

「酒に酔った男に無理やりちよっかい出されて困ってるんです!」

「任せて下さい! 僕が退治してみせます!」

アーサーが気合いを入れてみると、再び向こうから身の丈2メートルを超す大男が走ってくるのが見えた。オーソドックスなフルプレートフルプレートの甲冑よろいに身を包み、大男の背中には身の丈と同じ位のデカさを誇る大剣が背負われている。

男は無言で大剣を掴むと、アーサーに向かって振り上げる。

「お、お前なんて怖くないぞ! お、お姉さん離して下さい! 危ないですよ!」

アーサーのレベルでは力負け不可避だな。しゃやない、助けてやるか。

俺はアーサーと大男の間に割って入ると、男が今しがた振りかぶった大剣の無骨な刃先を人差し指と親指で受け止める。

「何だてめえは? いきなり出てきてこんな鉄塊振り回そうってのか? あ?」

「ッ!」

「——う、嘘だろ!?! グイルノの熊殺しの大剣をたった2本の指で、草でも摘むかの様に受け止めるなんて——」

「あれ？ アンタ等知り合いなの？」

「クソツ！ 寄越せ！」

アーサーにすがりついていた女はアーサーの腰に付いていた剣を鞘《さや》ごと外すと、姿がかき消え大男の側に再び現れた。

「あーッ!!? お母様から頂いた剣がー!!?」

女の手にはアーサーが装備していた、無駄に装飾された派手な剣が握られている。

「ふん！ 私達が大盗賊団アルーシャ一家《いつか》とよく見抜いたね!」

「いや、何も言っただけ。あんたが勝手にバラしただけだし」

「見抜いた褒美としてこの剣は貰っていくよ!」

「いや、だからあんたが勝手に——」

「やれ！ グイルノ!!」

「ツ!!」

女と大男の足に白い魔法陣が現れ、2人の姿は消え去った。

「何だったんだ……? 今のは?」

「ほほ、僕の剣ーツ!!」

アーサーは目に涙を浮かべ、俺の肩を揺らす。

「あれはお母様から勇者になった記念にもらった剣なんですー! 取り返しに行きま

「しよー！」

「あれディメンションワープだろ？ どこに行くか完全ランダムなんだよなあ。今から追っても見当もつかんぞ？ それに俺はこの国に来たばっかで、地理も疎いし……」

「そ、そんなあ……」

「アーサーはその場に尻もちをついてしまった。」

「やべ、せつかく旅を開始したって所なのに、やつばやめますとか言われたら困る。代替案をだすか。」

「そ、そう気を落とすなって！ 俺が代わりに剣やるから！」

「で、でも……」

「お前の持ってた剣より100万倍強い剣なのになー。クルードへ着いたらあげても良いんだけどなあ〜」

「尻もちを付いていたアーサーが速攻で立ち上がった。」

「本当ですか!？」

「え？ お、おう……」

「いぎ、ゆかん！ クルードへ！」

「切り替えはや過ぎィ！ お、おいコラ！ 勝手に走り出すなー！」

「俺は走り出したアーサーに追従するのだった。」

## 第17話 俺、勇者の修行への前準備をする

アーサーと供に歩き続けていると潮の匂いがし、俺は一瞬立ち止まる。

「おツ、もうそろそろつて所か。アーサー、クルードへ入ったら一度飯でも喰って休憩しよう」

長い事歩きづめであった為、俺はそう提案した。

俺はステータスのお陰かは不明だが、空腹が全くと言っていいほど感じない様で、今も特に身体に不調は見られない。しかしアーサーはそうはいかない。今まで一人の様なものだったので休憩の必要性を俺は失念しかけていた。

「はい！ 実はお腹ペコペコだったんです」

アーサーがにっこり笑いながら語りかけてくる。

やはり、休憩を挟まなかったのは不味かったようで、俺は申し訳ない気持ちになった。「本当に悪かった。今までずっと一人で旅をしていたからな」

俺が非礼を詫びると同時に港町クルードへ到着する。

俺はすぐそばにいた筋骨隆々で、タンクトップが異様に似合う漁師に食事処が何処か尋ねる事にした。

「すいません、この町へ今来た所なんです、食事が取れる場所教えてくれませんか？」  
漁師はニカッと笑うと俺を見据える。

「おう、騎士の兄ちゃん。飯ならこの道をずっとまっすぐ行つた『鳥の宿り木』つて名前の宿屋がオススメだ」

「ありがとうございます」

俺は漁師に礼を言いその宿屋へと向かう。

「らっしやい！ お客さん、飯かい？ それとも泊まりかい？」

恰幅の良い女将さんがカウンター越しから、俺達に聞いてくる。

「2人分食事を頼みます」

「今日のオススメはダガーヘッドフィッシュの照り焼きだよ！ どうする？」

女将さんのオススメなら間違いないだろうと思ひ、俺は頷いた。

「あいよ！ 適当な所で、座って待ってておくれ」

俺とアーサーはカウンターの端の方へ座る。俺がこの後どうするか考えていると、ネメシスが聴力拡張をひとりで行い、周りの冒険者、漁師、旅人の話が俺の耳へと届く。  
「おい、知ってるか？ 例の海岸に出来たダンジョンあるだろ？ まだ、攻略した奴いないんだよ」

「マジか？ ならポイント稼ぐチャンスだな。」

「いや、かなりヤバいらしい。A級のモンスターが出るって噂がある」  
俺はそこで聴覚拡張を切る。

「おい、アーサー。お前の旅って期限みたいなものはあるのか？」  
俺の質問にニツコリしながらアーサーは答える。

「いえ、特にありませんが何か？」

俺はアーサーの肩に手を置き、キリツとした声で宣言する。

「いいか、アーサーお前は勇者だ。勇者なんだが正直弱い」

アーサーはしよぼんとする。

「だから、俺がお前を鍛えてやる。元々そのつもりだったんだろ？ 任せておけ！ 俺並みに強くしてやる」

俺がそう言うとしよぼりしていたアーサーは目をキラキラさせながらパーと明るくなった。

それと同時に飯が運ばれてきた為、会話を中断し飯を喰う事にする。

「ん、飯が来たな、先ずは腹ごしらえだ」

俺は飯を喰う為、外格のヘッドを外し膝の上に置く。外す際内部の圧縮された空気が外に排出される為、なかなか煩い排出音が食堂に響く。

照り焼きをほうばっていたアーサーの口が止まっていた。



「なんだ？ どうした？」

「い、いえ何でも」

アーサーは再びほおぼり始めた。

後ろも少し騒がしいが、努めて俺は無視した。

食事が終わり、再び俺はアーサーと会話を始める

「——でだな。この港町の海岸にダンジョンがあるらしいんだ、そこでお前を鍛えるつもりだ」

「いつの間にそんな情報を?! 流石、お師匠様! 必ず、ご期待に応えてみせます! あ

! でも僕剣が——」

俺はインベントリから一本の赤と青が入り混じった刀身に、鞘は女性の悲痛な叫びを体現する様に涙を流す、目玉の様なものが施されている剣とハチマキを取り出す。

「これがお前にやる魔剣だ。大事にしろよ。いいか、よく聞け? その魔剣の名前は「魔剣キクリヒメの慟哭《どうこく》」だ。それとハチマキは「友情と努力のハチマキ」っていうアイテムだ。ハチマキの方はお前に言ったところで、理解出来んだろうがパワーレベリングを可能にするアイテムだ。大事なのは魔剣の方だ。その魔剣の効果は物質を攻撃すればする程、お前の体力が回復する」

見ると俺の話聞いた、アーサーの剣を持つ手が震えていた。

「ま……ままままま魔剣!? この世にあるかどうかもわからないと言われてる、レレレ……レジェンダリー級のアイテム」

「落ち着け、魔剣とは言っても別に呪われてるとかそんなんじゃない。見た目は無駄に禍々しいけどな。特殊なスキルを持ったただの剣だ。話の続きはダンジョンでする。出るぞ」

「ひゃ、ひゃい！」

緊張の余り舌を噛んだアーサーを連れて、俺は店を出る事にした。

## 第18話 俺、アーサーにスキルを教える

海岸の外れにあるダンジョンの入り口へとやってきた。

俺は見覚えのある紫の石がフワフワと宙に浮いているのを目にし、思わず立ち止まる。

「ポータルか、ここがダンジョンで間違いないようだな」

ポータルとはダンジョンにのみ存在する物体であり、入り口と10階層毎に簡易的なセーブが可能になるものだ。

かなり暗く湿った洞窟の中には入り中程まで進んだ所で、俺はアーサーを呼び止める。

「アーサーこの辺で修行を開始するぞ。魔剣を構えろ」

「ハイ！ お師匠様、一体どの様な修行なのでしょうか？」

剣を構えるアーサーに、一瞬で近づくとノーモーションで、顔面に緩めの左フックを俺はかます。

「いぎぎッ!？」

俺のパンチをモロにくらったアーサーが斜め右に1メートル程吹き飛び、硬い地面に

躰を叩きつけられる。

「いいか、アーサーお前には俺並みに強くなって貰わなきゃならん。だから、一切の容赦はしない。お前の太刀筋には殺気が感じれないし動きもなっちゃいない。このまま旅を続けたら、間違いなくお前は途中で死ぬ」

アーサーがよろめきながら立つのを俺は静観しつつ続ける。

「この修行の第一目標は、お前の意識改革と俺の攻撃を避けれる様になって貰う事だ」  
立ち上がったアーサーの顔が絶望に染まる。

「そ、そんな……む、無理です！ お師匠様の攻撃を避けるなんて！」

「無理じゃない。お前にはな、俺がやった超感覚がある。それを使いこなし、俺の攻撃を掻い潜り俺に一太刀浴びせる事。それが今日の修行の目標だ。俺は武器や魔法、その他諸々の如何なるスキルも使用しない。この拳と脚で迎撃するのみだ。超感覚をお前の物にすれば、俺の攻撃を避ける事だって十分可能になる」

アーサーの腕に力が入るのが見えるが、しかし次の瞬間アーサーの足が崩れた。  
「ッ!!？」

超感覚を発動させた瞬間に力が抜けた為、驚くアーサーを俺はただ傍観する。

「な、なんで？」

アーサーは剣を支えにし、無理やり立ち上がる。

「剣を振ってみろ」

俺のアドバイス通り、震える足を我慢し剣を振りアーサーは驚愕する。魔剣を振った瞬間震えていた足が直り、顔の痛みも一瞬で消えたようだ。

混乱するアーサーに俺は口を開く。

「超感覚は他のスキルとは違う特徴があつてな、通常スキルを使うとMPが減るよな？

超感覚は使用するとMPではなくHPが減るんだよ。お前はさつき俺の左フックを食らつただろ？ HPが半減していた状態で超感覚を起動させた、だから足が動かなくなつたんだ。それを魔剣を振つた事で体力が回復した。俺の言いたい事がわかるか？」

アーサーが魔剣を見つめ、そして俺を見ながら剣を再び構える。

「理解したか？ さあ、来いアーサー！ 俺に一太刀浴びせてみせろ！」

「うわああああああ!!」

アーサーは雄叫びを上げつつ、俺に剣を向けてくる。俺はそれを、上体を逸らす事で回避し続けながら俺はアドバイスを続ける。

「いいか！ 超感覚は全ての感覚のリミッターを外す事ができる様になる。今はもう存在しないヒーローってジョブのスキルだ！ 感覚を研ぎ澄ませろ！ 聴力を強化し筋肉の音を聞け！ 視力を強化し、この暗い空間で俺の攻撃を視認してみせろ！ 脳みそのリミッターをも外してみせろ！ 全てのリミッターを外した時その時こそ、超感覚の

真価を發揮出来るようになる！」

アーサーの動きが段々と洗練されていくのがわかる。俺のアドバイスをしっかりと受け、攻撃を続け、遂にその時がやってきた。

俺はアーサーにアッパーカットを食らわせる為、屈み左腕に力を込めながら沈ませ、思いつき振りかぶる。瞬間、アーサーの姿が一瞬消えたかと思うと、俺の外格と魔剣の刃がぶつかり火花が散り、アーサーの血のように紅い眼《まなこ》に俺が写っているのがわかった。俺は構えを解き拍手を送った。

「よくやったな。今のが超感覚の本当の力だ、どうだった？」

呆けているアーサーに対し感想を聞いてみる。

「ほんの一瞬ですが……お師匠様の姿がとても遅く見えました。」

「その通りだ、超感覚の本当の力は感覚の限界を超えて強化させる事で、無我の境地へと強制的に到達させるんだ。結果、相手の動きが遅く見える様になる。超感覚を使いこなせる様になれば、お前に怖いものなどなくなるよ。」

あと、個別で強化する事も勿論可能だ。例えば、こういった暗く何も見えない洞窟内で視力を強化すれば見える様になったりな！色々できる様になるぞ！」

「ありがとうございます！ お師匠様！」

「うむ！ 苦しゅうない」

腕を組みつつ、うんうんと頷く俺。

「師弟の美しい友情を育んでいる途中で申し訳ないのですが、宜しいでしょうか？」  
「ん？　なんだネメシス？」

「認識阻害スキルを感知しました。ゲイン様とアーサー様を監視していた者がいるようです」

「ふーん。ま、別に良いんじゃないの？」

アーサーの口が金魚の様にパクパクしているのが目に入った。

「な、何故……お師匠様から女性の声が!?　お師匠様は女性だったんですか!？」

「んなわけないでしょ!?　えっと、あの……そう!　実は俺の甲冑には精霊が宿っているんだ!　騒がれると困るから、ずっと黙っているようにしてもらってたんだ!」

ホントは忘れてた。なんて、ネメシス絶対不機嫌になるから言えねえ!

アーサーの目がいつも以上にキラキラしている

「妖精が宿る甲冑!?　聞いたことがあります!　凄いです!　どうも、はじめまして、アーサーと言います。妖精さん!」

「妖精……まあ、悪魔呼ばわりさせるよりずっとマシですが……はじめましてアーサー様。ネメシスとお呼び下さい」

ネメシスは悪魔呼ばわりされた事をまだ気にしていたようだ。

「根に持つなあ」

「ゲイン様、何か仰いましたか？」

「ゲフンゲフン、い、いいえ何も」

アーサーは俺というか、ネメシスにキラキラした目を向け続けている、余程ネメシスが気に入ったと見える。

「よろしくお願いします！ ネメシスさん！ 妖精は生を受けて1000年経つと人間を誘惑し、鎧や武器にとり憑いてじわじわと人間をマナに分解していき、終いには本人に成り代わってしまうんですよね！ 子供の頃フェアリーテイルで読みました！」

「はあ？」

ヤバイ！ ネメシスの目が座った！ これはマジギレ寸前の証！

「お、落ち着いてネメシスちゃん！ ドウドウ！」

「私は馬ではございません！」

瞬間、体中に電流が迸《ほとばし》り俺はその場にぶっ倒れた。

「よ、よし、自己紹介も終わった事だし宿屋に一度戻って休憩しよう。俺、今丁度めっちゃ疲れてるから……死ぬほど……」

「ところでエイチピーとエムピーって何ですか？」

「あ、えっと、HPが体力でMPが魔力の事だよ……。覚えとけ。あゝ、ビリッと来た



……」

俺はよろめきながら立ち上がり、アーサーを連れてダンジョンの出入り口へと向かった。



一区切り付いた為、宿屋に戻る事にしダンジョンを後にするゲイン達。誰も居なくなったダンジョン内の空間が歪み一人の男が現れる。

「あの凄まじい強さ！ あの人達に頼めば、きつとリーダーの悲願が達成出来る！ 急いで戻らなきゃ！」

そう言う盗賊風の男の姿が、再び歪み消えるのだった。

## 第19話 俺、パーティーに誘われる

宿屋へ戻り女将さんオススメの魚料理に舌鼓を打つ、俺とアーサー。

このあとの技をアーサーに習得させるか、舌顎を人差し指と親指でさすりつつ考えていると、不意に後ろから肩を叩かれ、俺が振り向くとそこには見知らぬ剣士と盗賊の男達がいた。

「あの、ぶしっついで申し訳ないのですが、隣宜しいでしょうか？」

長い横1列のカウンター席に俺とアーサーは座っており、俺の左隣にアーサー右隣は空席となっている。特に断る理由も無い為俺は了承する事にした。

「どうぞ、全然構いませんよ」

剣士は俺の隣へと座り、盗賊の男は少し離れた柱に凭《もた》れ掛かっている。

「私の名はノイル。あそこの柱に立っているのは私のパーティー仲間であるイルゾールです」

柱の男を見るとクイツと軽く首を縦に振り挨拶して来た為、こちらも同じ様に返す。

俺がノイルへ視線を戻すと、申し訳なさそうにノイルは喋りだした。

「実は……その、貴方はとてもお強いですよ？ 例のダンジョンで、そちらのお弟子さ

んどの修行をイルゾールが拝見したようでして、是非うちのパーティに参加して貰えないかなあ……と」

「いやあ、恥ずかしいなあ」

何故か、アーサーが照れているが無視する。

「ダンジョンを出る少し前だが、誰かが俺達を監視していたのは気付いてた」

気付いたのはネメシスだけだ。

「そんな……今まで誰にも気付かれなかったのに……」

余程の衝撃なのか、盗賊は目見開き口をへの字に曲げ、凭れていた柱をズルズルと腰が落ちていき、そのまま尻もちを着いてしまった。

「で？ 本題は？」

「2階に別室があります。本題はそこで」

ノイルが立ち上がりその後をイルゾールがついて行った為、俺達も立ち上がり2階の別室へと向かう。

部屋へ入るとノイル、イルゾールの他にも3人いた。

大きな丸い机に女性2人に男性1人が椅子に座ったままの姿勢で俺の顔を見ている。

先ず目に入ったのは、翠色のフワリとしたショートカットの魔術師だ。青黒い中々年期の入ったローブを着込み、金色の宝珠が埋め込まれた杖を大事そうに持っている。

かたや、もう一人の女性はとても長い金髪ストレートの髪に、胸元が少し空いた真っ白なローブを着込んでいる。壁に立てかけたメイスが彼女の武器だろう。恐らくヒーラーだろうと思った。最後に右斜めに、座っている短めの頭髮に頬にデカイ傷がある体長2メートルはゆうに超える大男だ。後に同じくらいデカく頑丈そうな大盾がある。タンク職のシールドで間違いないだろう。

「どうぞ、座って下さい」

俺とアーサーは開いている席へと座る。

「どうも、ゲインと言います。こっちの連れはアーサーです」

俺は軽くアーサーを含め、自己紹介する。すると、大男が口を開いた

「おい、ノイルこいつ本当に大丈夫なのか？」

「イルゾールから聞いた話だと凄まじい強さらしい」

大男は眉間にシワを寄せ頭をガシガシと掻きながら、俺を睨みつける

「こいつの甲冑には一切傷が見当たらねえ。どんなに手練だろうが、装備に傷一つねえなんて有り得ねえ。俺は反対だね」

アーサーが口出ししようとした為、手で遮る。

「アンタの言う通りだ。だが、俺の装備はちよつと特別性でね、そんじよそこらの攻撃じゃ傷一つ付かないだよ」

「なんだとお！ この若造が！」

大男が身を乗り出し、俺につつかかろうと近づいて来た。もう数センチというところで、ガタリという音が聞こえそっちを見ると、魔術師の女の子が立ち上がっており、カタカタと体を震わせながら俺を見ている。

「やめて！ ガニー！ その人が、本気出したら、貴方いえ、ここにいる私達全員、一瞬であの世行きよ！ 私……相手のステータスを目で見る事でわかるスキルあるの知ってるでしょ!? この人のステータス何もわからないの！ 手練れとかそういう次元じゃないのよ……お願いだからやめて」

パーティメンバー全員が目には涙を浮かべている魔術師の女の子を見て静止している。「エ……エルメンテがそこまで言うなら……マジなんだろうな。元から殴る気なんてなかったさ。ちよつと、試したかっただけだ」

ガニーと呼ばれた大男は席へと戻る。それを見届けたノイルが口を開く。

「じゃ、じゃあ改めて自己紹介を。私はこのパーティ【永劫の探求者】リーダーノイル。そして、右から前衛並びに情報収集やサポート担当のイルゾール、中衛回復担当にニールピア、後衛担当のエルメンテ、そして最後に前衛の壁役ガニー以上5人パーティです」

「パーティメンバーの構成はわかった。で？ 俺達に何をさせたいんだ？ 俺達が仮にお前等のパーティに入るとバランスが崩れるんじゃないか？」

俺は素直な疑問をノイルへ投げかける。

実に模範的なパーティ構成だったからだ。俺達がこのパーティへ入ってしまったら前衛過多になってしまい、中後衛の仕事量が増え、結果的にパーティ全体の弱体化を招くのだ。

「流石、仰る通りです。しかし、今の私達では最下層のダンジョンの主、リヴァイアサンに勝つことが出来ないのです」

リヴァイアサンと聞き、俺は1つのアイテムを思い浮かべる

「エリクサーか」

俺がそうぼやくとノイルの顔付きが変わり、俺に縋り付いてきた。

「ご存知なのですか!? リヴァイアサンの鱗がエリクサーの材料なのを!? お願ひします! 私にはもう時間がないんです!! 妹をどうか!! どうかお願ひします!!」

「落ち着け。あんたの妹は、何か病に掛かっているのか?」

俺の質問に涙を拭い、ノイルはゆっくりと語りだした。

「はい、妹は7年ほど前、石化病を患ったのです。ありとあらゆる治療を試しましたが、一切に効かず途方に暮れていたある日、どんな病気も治るエリクサーという薬が存在しているのを知りました。私は血眼になって材料探し集め、遂にあと一つという所まで来ました。冒険者となったのは元々名声を高めんが為ですが、今は妹を助けるという目的

のみで動いています」

「その最後の材料がリヴァイアサンの鱗って訳か」

「はい。その通りです」

リヴァイアサンは巨大な蝮と蛇が合体した様な魔物であり、その巨大な体積活かしたリーチの長さや毒のブレスこそ脅威だが非常にわかりやすい弱点があった。

「リヴァイアサンは雷属性の技に滅法弱い。雷属性の技なら魔法だろうが攻撃スキルだろうが簡単に仕留められる筈だ」

ノイルの表情が暗くなる。

「私達のパーティに雷属性のスキルを持つ者は……いません」

「なるほど。色々わかったよ。アーサーどうする？」

アーサーはいつもみたく元気に答える。

「困っている人を見過ごすなど、出来るわけがありません！」

「つて、勇者様が言ってるから、従者の俺は従うよ」

「「「勇者!?!」」」」

声綺麗にハモリ、俺は苦笑する。

「悪いが、3時間だけくれ。アーサーに新しい技を覚えさせる」

「新しい技!?! やった! お師匠様! 今度はどんな技を教えて頂けるんですか?」

「「「従者なのに勇者のお師匠様!?!」」」」

「忙しい人達ですね」

ネメシスが小声でツツコミを入れる。

「とりあえず、今からダンジョンの1階層で技を伝授するから3時間経ったら来てくれ」

俺とアーサーは部屋を出て女将さんに挨拶し、再びダンジョンへと向かった。



## 第20話 俺、再びアーサーにスキルを教える

ダンジョン内へとやってきた俺とアーサーは足を止める。

「うっし、じゃあ今回アーサーには3つの技を会得して貰うからな」

「3つもですか？ 時間は大丈夫なのでしょうかね？」

予想よりも多かつたらしくアーサーは時間を心配しているようだ。

「大丈夫だよ、超感覚の様な特殊過ぎるスキルじゃなくてただの攻撃スキルだから」

「ハイ！ よろしくお願いします！」

俺は、アーサーの額に手を置くと、ギフトを発動させ2つの攻撃スキルを与える。

「まずは、エレクトリガーとエレクトリガー・バーストの2つを覚えて貰う。エレクトリガーは手に雷属性のエネルギーを纏って敵を攻撃する攻撃スキルだ。エレクトリガーは強弱によって痺れさせたり、束縛させたり、敵をそのまま倒す事が出来る汎用性に富んだ技だ。ヒーローと同じく、今はもう存在しないロボットというジョブの攻撃スキルだ。手の平に電撃を集めるイメージしろ」

アーサーが目をつぶり手を翳す。すると徐々にアーサーの手からビジツバリツという音とともに雷属性の塊が手の平に出来ていた。

「出来ました！ お師匠様！」

「よし、そのまま俺を殴ってみろ」

アーサーは手のひらに出来た塊をそのままに、握りこぶしを作り俺に殴り掛かる。

俺はアーサーのエレクトリガーをそのまま左手で受け止める。

「うん、まあ及第点だな。次はエレクトリガー・バーストだ。こいつは簡単だ。エレクトリガーを発動させ、相手を注視しつつ、地面にエレクトリガーを叩き付けるだけだ」

アーサーは言われた通りにエレクトリガーを発動させた。そして俺は少し距離をとる。

「さあ、地面にエレクトリガーを叩き付けてみる」

アーサーがエレクトリガーを地面に叩き付けると、凄まじいスピードで電流が蛇の様に俺に迫ると、俺の足元に到達した瞬間、地中からけたたましい音と共に雷の様なものが俺を包んだ。

「よし、成功だ。これがエレクトリガーの強みだ、遠距離と近距離を即座に使い分ける事が出来る遠距離時はバーストって付く。一応覚えとけ」

俺は身体に付いた埃を取る様な動作をし、ひと呼吸入れる。

「最後の技はイナズマ電迅キックだ。この技を発動させると自動で飛び上がり、空中で一瞬停止し、そのまま相手に向かって急降下飛び蹴りをかますというヒーローの攻撃ス

キルだ。イナズマ電迅という名は雷属性が付属している為だなんだが、属性毎に名前と性能が少し変わる面白い技だ。どうだ？」

アーサーはいつもの様に、目をキラキラさせている。

「是非！ 是非覚えたいです！」

「わかる。わかるぞ！ その気持ち。良いよな！」

俺は腕を組みながらうんうんと頷く。

「よし、じゃあ俺に向かってイナズマ電迅キックだ！」

「ハイ！」

アーサーが飛び上がり空中で、一瞬停止し左へ体を高速回転させるとアーサーの全身が青色に輝き、まるで一本の大きな青色の鎌（やじり）の様なものになり俺に迫る。俺は一切防御せずモロくらい受け止めるが勢いは止まらず、放電現象を起こしつつ今も尚、人間大の鎌となつて俺を貫かんとしていた。

「うおおおおおおりゃ！」

俺は、アーサーを思い切り上空へぶん投げる。すると勢いを失ったアーサーが元に戻り、そのまま落下してきたのをキャッチする。

おお、地味にレアなパターンを引いたな。高速回転式アローヘッドタイプのイナズマ電迅キックか。

このタイプはスピードと攻撃上昇値がかなり高くなるんだよな。  
幸先良いゾ〜これ。

「今のは素晴らしかったぞ。俺以外の人間が今の技をくらったら、間違いなく倒れてる所だ。今日の修行はおしまいだ。パーティが来るまでここで休憩しよう。」

「ハイ！ この技も使いこなしてみせます！ ところでお師匠様。あの、降ろして頂けると……」

「あ、すまん」

落下の際、受け止めるのにお姫様抱っこの様な形になってしまった為、それが恥ずかしかったのかアーサーの顔が若干赤くなっているのが目に入った。

俺はアーサーを降ろし、パーティが来るのを暗い洞窟内で待つ事にした。

## 第21話 俺、エルメンテのお願いを聞く

洞窟内に足音の様な反響音が聞こえてくる。音のする方を見ると、ロープを着た翠色の髪をした女の子が小走りで近づいてきた。

「よお、一人で来たのか？ 早かったな。名前はエルメンテだったか？」

俺は、肩で息しているエルメンテに労いの言葉をかける。

「うん……。ちよつと聞きたい事が……。あつたの」

さつき大声で叫んでいたとは思えないほど小声で喋っている、恐らくこちらが素なのだろう。

「聞きたい事って？」

「私は相手を見る事で、ステータスを知ったり、その人の職業を色で判断できるの……。あなたのステータスは何一つ……。わからなかったけど、色だけはわかったの。虹色に輝いていた。あんなキレイな色初めて……。見たの。貴方は何者……。なの？ 神様？」

素つ頓狂な事を言われ、俺は吹き出しそうになった。実に、御免被りたい気持ちになつた。何で俺が神様なのかと。しかし、気になる事を言っていた。彼女の言う、色で職業を判断できるスキルなどハガセンにはなかった。俺のジョブはフルメタラーだ。

確かになるのは面倒くさい特殊ジョブで、見方によってはレアとか言っても良いかもしれない。

だが、神様なんてものでは決してない。現に俺以外にもイシスさんが特殊ジョブのサモナーである。恐らくこの娘が言っている色とは、職業ではなくスキルの事だろうと俺は思った。俺は、ハガセンで習得したスキルは多岐に渡る為、それが色でわかる彼女には、虹色にみえたのだろう。

「いやいや、俺は神様なんかじゃないよ。ただのスキル習得ばっかやってた田舎者さ。俺、君みたいな魔術師じゃないけど魔法使えるよ」

「どんな魔法でも?」

彼女は俺の目を真っ直ぐ見て聞いてきた。

「え? お、おう……一応そのつもりだけ?」

「お願い……がある。私に伝説の魔法を……遙か昔、魔法大国ルギームに保管されていたとされるグリモア……という聖典に記されていたと言われる、究極魔法AEWを教えてください」

「へっへ」

俺は遂に吹き出してしまった。彼女のいうAEW（オール・エレメント・ウエポン）という魔法スキルは、魔術師レベル100程度で覚えられる、火水風土雷闇光の全7つの

属性を持つ各々の武器を召喚し、投擲またはそのまま武器として使用できるというちよつと変わった攻撃スキルで、見た目が大変派手で無駄に格好いい為、初心者はこちらで習得を目指す。

だが、この魔法で召喚した武器は剣や槍などの前衛職の武器である。AEWの最大の欠点は、召喚された武器を魔術師が使用・投擲するという事そのものなのだ。魔術師は当然、魔法による遠距離攻撃に特化させた後衛ジョブでありSTRの値は全ジョブの中で最も低い。その為、いざ使ってみれば役に立つのは、精々雑魚敵を近距離で倒したい時位の死にスキルであつた。

余りのクソさにブチ切れた魔術師達が抗議専用の超巨大ギルドを結成。一斉蜂起し、運営へSTR依存ではなくINTにしろと突撃したのだ。事態を重く見た、運営は代表者を選出し話し合いの場を急遽設ける事となり、AEWで召喚された武器達はSTRではなくINT依存へ修正され、晴れて魔術師達に近距離最強の攻撃スキルとなつて向かい入れられたのだつた。

「きゅ、究極魔法ねえ……。まあ、ある意味ではそうだったな」

俺は一応覚えたが、当時既に廃人真つ只中だった為優秀な武器を幾つも所持しており、俺にとっては修正さようがされまいが死にスキルだった思い出しかなかった。

「やつぱり、駄目……？」

実に懐かしいスキルの名前が出てきたので、遂遠い目をしてしまい駄目だと思われたようだ。

「いや、全然。むしろ魔術師なら覚えておいて損はない。今すぐ伝授しよう」

俺はエルメンテの額に手を置き、ギフトを起動させAEWをエルメンテへ伝授する。

「ありがとう……この恩は一生忘れない……」

「おう！ 気にすんな！」

俺がそう言うとエルメンテは笑顔になり、俺にハグしてきた。

そんなこんなで、3人で待つ事5分後。

永劫の探求者の面々が揃った為、俺達はダンジョン攻略へと繰り出すのだった。



## 第22話 アーサー、殺戮マシーンと化する

暗い洞窟内を永劫の探求者の面々をバックに俺とアーサーが先行し、29階層辺りまで来ている。

通常別のパーティやギルドと組んでダンジョン攻略する場合、レベルやジョブの差異がある為、なるべく人数の多いパーティを先行させるのだが、俺にその必要は皆無だしアーサーのレベリングやスキルの使い心地などを確認したい為、独断専行させて貰っている。

敵を倒すのは基本アーサーに任せようと思っっているの、俺はアーサーの少し後ろで歩いている。

「あの、聞きたいことがあるんだけどよろしいですか？」

後ろから呼ばれたので、俺がふり向くとパツキンストレートのニーピアと呼ばれていた女性が俺のすぐそばに来ていた。

「どうした？ 何か問題でもあったか？」

「何故、貴方達はカンテラも光源魔法もなしに先行できるのです？ 死にたいのですか？」

ダンジョンによっては松明などが初めから一定間隔で設置されている事もある。だが、そういう場合は長い年月が経った所謂、高レベルダンジョンのみだ。高レベルのダンジョンには罠や松明が自動的に設置され、通常モンスターが突然変異を起こした亜種やユニークモンスターがポップする様になる。

ハガセンでの高レベルダンジョンの概要には、ダンジョン内で死んだモンスターや冒険者達の魂や肉体を吸収し力と知識を蓄えた為に、通常では考えられない現象が起こると書かれている。

このダンジョンに光源はおろか罠など一切ない為、出来たばかりの若いダンジョンである事がわかる。

俺にはネメシスが気を利かせてくれた事もあり、暗視機能を自動的に起動させているから光源など必要ないし、アーサーにも超感覚がある為、同じく不要だった。

「俺とアーサーは長い事このダンジョンで訓練をやってたからな。目が慣れてるんだよ」

「そんなむちゃくちゃな！ それによろしいのですか？ お連れの方一人でどんどん先へ行ってしまっている様ですが？」

通常なら彼女の言う通りである。本来ならあり得ないことだろう。しかし、アーサーは俺との訓練という名のパワーレベリングにより既に40レベルは超えている筈だ。

それにもまして、「魔剣キクリヒメの慟哭」のパッシブスキルによる体力回復と超感覚を併用する事によって彼は今、一種の殺戮マシン化している。

今も凄まじいスピードを持ってポップしているゴブリンを駆逐している。仮に矢が当たろうが傷が増えようが怯みもせず、一切の躊躇なく剣を振るうアーサー。敵にとっては悪夢以外の何者でもないだろう。

「大丈夫大丈夫ヘーキヘーキ。な！ アーサー！」

俺はアーサーに呼びかける。すると殺戮行為を絶えず繰り返していたアーサーが動きを一瞬止め、こちらへいつものニコニコ笑顔で走りながら近づいて来る。全身をゴブリンの血で汚し、魔剣の青と赤の入り混じった刀身が鈍い光を放ちつつ、鞆に付いている目がいつもより血走って見える。それを縦に振りまわしながら。見る人によってはホラー映画のワンシーンに見えるだろうなと俺は思った。

「お師匠様！ 何でしょうか？」

「調子はどうだ？ 気になる所はあるか？」

アーサーはニコニコしながら答える。

「いえ、全く問題ありません！ このまま最下層まで先行するつもりです！」

「うん。良いぞ、その調子だ。どんどん敵を倒せ。倒せば倒すほど良いからな。剣を振り続けろ、そして、超感覚を発動し続けるんだ。で、何の話だっけ？ 俺達が何故カン

テラもなしに何故先行できるのかだったか」

俺はニーピアへ話をふる。見るとアーサーを見て目を白黒とさせていた。今アーサーの姿はゴブリンの血で体中血だらけでなのだ。それが気になったのだろうと俺は思いアーサーの汚れを落とす為、クリーンを起動させる。クリーンは汚れを落とす為だけのどのジョブも使える簡単な魔法様なものだ。すると、ニーピアは口を開いた。

「い……いえ、もう良いです。気をつけて下さいよー!」

「はい! わざわざ、ありがとうございます!」

アーサーは元気よくお礼を言うと、ニーピアは会釈しパーティへと戻っていった。

「このまま一気に最下層までイクゾー!」

俺は気合いを入れるとアーサーは再び殺戮マシンへと、戻り剣を振り回しダンジョンを駆けて行く、俺はそれを見ながら後ろに続くのだった。

## 第23話 俺、vsリヴァイアサン

「さてと、お目当てのリヴァイアサンがいる部屋の前まで来た訳だが、どうする？ ポータルで一度戻る事も出来るが？」

中心に赤い宝石の様な物が埋め込まれ、左右非対称に金色の稲妻の様な装飾が為された、3メートル程の高さがある扉を目の前に、俺は「永劫の探求者」のリーダーノイスに判断を任せる。

「い……行きます。ようやく妹を助け出せる。この時を私はずっと待つていたんです……。本当にありがとうございます！」

「礼を言うのは、まだ早いぞ。リヴァイアサンをぶっ飛ばしてからだ。今回ばかりは永劫の探求者の面々にも、働いてもらう。リヴァイアサンは俺とアーサーが処理するが、奴はランダムに水属性の雑魚モンスターをサモンしてきて、なかなかにつとおいしいだ。その処理を頼む」

「ハイ、任して下さい！ これでも10年以上やってきていますから！ コンピネーションの良さをお見せしますよ！」

「よっしゃー！ じゃあ、行くぜ！ ボス戦開始だ！」

俺は扉を開ける。眼前に巨大な蛸様な化物が鎮座していた。8本の足にはチェーンの様な物が巻かれ顔にそれぞれ繋がり、先端は吸盤などではなく蛇の顔が付いている。

「……………これがA級モンスターリヴァアサン……」

「落ち着け、ただのクソでかいタコみたいなもんだ」

俺が皮肉を言うと、同時にリヴァアサンは2本の足を俺に突き出してきた為、俺は防御体制を取るが、突き出された2本の足はガニーへと向かっていく。

「ウオークライ!! はッ! たかが蛇の噛み付きなんかじゃ俺の大盾には、一切傷はつかんぞー!」

「ッ! 各自散開ッ! ニーピアは防御バフを前衛と後衛に頼みます! イルゾールはリヴァアサンを混乱させる為に、認識阻害スキルを!」

「神よ! 我等に強靱なる守護の祝福を! ガーディナル・フィールド!」 「クラッシュ・ボム!」

ノイスが各々に指令をだし、皆アイコンタクトで動き出した。

「やるじゃねえの! アーサー! 俺達もやるぞ! エレクトリガー・バーストだ!」

「ハイ!」

俺とアーサーはほぼ同時に技を発動させる。

「エレクトリガー・バースト!」

2つの地を這う稲妻が、リヴァイアサンへと高速で向かっていき、雷鳴を轟かせながら地中で爆発膨張し、地中を抉りながら稲妻がリヴァイアサンの真下で炸裂する。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

リヴァイアサンは叫び声の様なものを上げると、全ての足をハチャメチャに振り回し、洞窟の外壁を破壊しつつ俺達に攻撃を仕掛けてくる。

「よし！ 良いぞ。効いてる効いてる。アーサー超感覚は発動させているな？ 当たるなよ？」

「勿論です！ お師匠様！ こんな攻撃お師匠様のパンチに比べたら、止まって見えませんよ！」

俺とアーサーはぐちゃぐちゃと、音を立てながら、向かってくる足をスイスイ避ける。「ウラァー！ どうだタコ助痛えだろ？」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA……AAAAAAAA!!」

避けるついでに蛸足にエレクトリガーを見舞うとゴボゴボと口からセメントの様な液体を吐き出し、悶え苦しんでいる。

奴の口から次々出ている液体は自らの顔に付着し、範囲が少しずつ広がっている。

リヴァイアサンが永劫の探求者へ向けていた足を引っ込めると、リヴァイアサンの両隣に魔法陣が現れる。

「リヴァイアサンは、今完全に俺達に気が向いてる！ 雑魚モンスターを頼むぞ！」  
「はい！ わかりました！」

魔法陣からありとあらゆる水属性モンスターが出現してくる。ガニーがウォークライを使い雑魚モンスターのヘイトを自分へと集中させ、ノイスやイルゾールが敵を倒す。エルメンテが後方から魔法で攻撃し、ニーピアが傷を癒す。

「アーサー！ もう一度エレクトリガー！ バーストを同時に放った後、同じ要領で、2人同時にイナズマ電迅キックを石化した顔面めがけてフィニッシュだ！ いくぞ！」

「エレクトリガー・バースト！」

再びエレクトリガー・バーストを2人同時に放ち地中からけたたましい雷鳴と共に稲妻でリヴァイアサンの体は叫び声を上げながら痙攣する。

「よし！ 今だ！」

俺とアーサーは天高く飛び上がる。俺は、身を一瞬かがめ飛び蹴りの体制に入り体中を電流が駆け巡り、放電現象が発生し足が電流と炎に包まれる。アーサーの方はというと、例の俺にかました時と同じ様に、左へ高速回転しそのまま放電現象を発生させると人間大の鎌の様な形となる。

「イナズマ電迅Wキック!!」

俺が、その場で思い付いた技名を叫びリヴァイアサンの石化した顔面めがけて、超高



速で接近そのまま顔面に風穴を開けつつ肉と内蔵を抉りながら、反対側へと飛び出し着地する。

「——フツ、決まった。自分の特性に足をすくわれるとは所詮はタコ助よ」

「イタタ……お尻ぶっちゃいました」

尻をさすりながら立ち上がるアーサーを尻目に見ていると、ズズーンというゆつくりと倒れ込む音が聞こえ、リヴァイアサンが絶命した事を確認し、蛇の頭へと移動、鱗を引き剥がしノイスへ見せる。

「こいつがリヴァイアサンの鱗だ」

「本当にありがとうございます！ この御恩は一生忘れません！」

ノイスは目に涙を浮かべ、俺に握手している。

「さあ、宿へ戻ろう。泣くのは妹助けてからにしろ。リーダーなんだからシャキツとしな」

「ハ、ハイ！ そうですよね！ このままでは妹に笑われてしまいます！」

皆で笑いながらポータルを起動させ、俺達は入り口へと戻り宿へと歩むのだった。

## 第24話 俺、宴会

「リヴアイアサン討伐を祝してカンパーイ!!」

もう何度目の乾杯コールだろうか、正直おぼえていない。アーサーはガニーとニーピアに挟まれ、ベロンベロンに酔っ払っている。どうやらあの二人は酒豪のようで、まるでジューズでも飲むかの様にグビグビ飲んでる。不運にも、そんな2人に挟まれ断るという事を知らないであろうアーサーは、早々にリタイアする事となった。

俺はというと、さっきから飲んでいるのだが酒による酔いも状態異常と判断されるらしく、耐性のせいで一切酔えないでいた。

「うーん、激しく味気ない。俺も酔いたい」

「あの、ちよつとすいません。ゲイン殿ちよつといいですか?」

俺が泣き言をボソツと呟いていると、ノイスに呼ばれた為彼に付いていく。外にはエルメンテとノイスが待っていた。

「何だ? 話って? エルメンテもどうした?」

「本当に感謝しています。あとは、エリクサーを作ってくれる、優秀な錬金術師を探すだけです。エルメンテなら知ってるのではと思ひまして」

「エリクサーぐらいなら作れるけど?」

一瞬の静寂がこの場を支配した。

「ええええええええええええええええ?!?!」

相当予想外だったのか、エルメンテまで一緒になって叫んでいる。

「失礼な、何だその反応は? さてはお前ら、俺が戦闘狂か何かだと思つてたな?」

「エリクサーの作り方は魔法大国の聖典にのみ記させていると聞きます! 本当なんですか!」

何処かで聞いた全く同じ話を、ノイスの口から聞くはめになった。少し気になった為、逆に聞いてみる事にする。

「おうよ。エルメンテも言つてたけど、その聖典つて何なんだ?」

エルメンテが俺を見ながら口を開く。

「——遙か1000年前、小村だったルギームに1人の老人現れり、その老人類まれな知識と力と精神を持つ。老人は大賢者となりて、この全世界にスキルの恩恵を成就される。その恩恵を一心に受し、ルギームは後に繁栄を極め、魔法大国ルギームとなる。ふう……」

エルメンテが悠長に喋り終わると、一息ついて元の口調に戻る。

「大賢者様が持っていた……全てのスキルが載っているとされる写本。それが聖典

……って言われている」

衝撃の事実をまとも叩きつけられ俺は、思考停止する。

「何……だと……？　間違いないくそいつは……だとしたら辻褄が合う。なるほどな、だからこの世界で他の奴らがスキルが使えるわけか。その大賢者様は今も生きてるのか？」

エルメンテは俺の質問にコクツ頷いた。

「会う必要があるな。その大賢者とやらに」

「たぶん、無理だと……思う。大賢者様は……いつからかルゲームにある……塔に閉じ籠る……ようになった。出てくるのは……大切な行事やお祭りの……時……だけ」

「丁度、次の目的地は魔法大国ルゲームだ。エルメンテ、お前が無理だと言っても俺が行けば開けてくれると思う。そんな気がする。たぶん」

ノイスとエルメンテは顔を見合わせる。

「魔法大国ルゲームへ行かれるのですか？　その騎士の姿で？」

「うん？　その通りだけど何か問題でも？」

「魔法大国ルゲーム裏の顔がある……魔法狂いの魔法狂いによる……魔法狂いの為の国……。その……姿で行ったらたぶん迫害を受ける……。そして、私の……大っ嫌いな家族がいる故郷でもある」

思いもよらぬ事を言われ、俺はこれまた驚愕する。

「何だそりゃ！ この格好の何が悪いんだ？」

「あの国は大賢者様の影響を最も色濃く受けた国なのです。その為魔法使いこそが最強だと、魔法使い以外のジョブは皆ゴミだと信じて疑わないらしいのです」

「く、狂ってやがる。なるほどな、魔法狂いの国ね」

「だから、あの国に入る時は必ずローブを羽織るのが常識となっています」

「ローブだって？ 俺の外格にローブなんて……いや、一体だけ居たか。でも、あいつかあゝ」

思わず独り言を愚痴ってしまい、ハッとする俺。

「ローブ持っていないのですか？」

「ゲフンゲフン、いやいやあるよ。ありますとも！ ところでエリクサーだがどうする？ 今すぐ作りに掛かろうか？」

俺は無理やり話題を変更する。

「今すぐ!?! いや、しかし、設備はどうするのです？」

「まあまあ、いいからいいから。俺を信じろって。燐を貸してくれ」

「あ、はい……どうぞ」

俺は燐を受け取り、インベントリからルームキーを取り出すとその場で回す。何もな

い空間に扉が現れ、俺はノブに手を掛ける。

「悪いけど、この中は俺しか入れないんだ。ちよつとそのまま待つててくれ」

「——ゲイン殿……貴方は一体？」

俺はドアを押し中へと入つていく。一瞬目の前が光ると既にそこはギルドルームのエントランスだった。

「さて、う〜んどの辺りだったかな？」

俺はインベントリを開き目当ての物を探していると、ずつと沈黙していたネメシスが口を開いた。

「一言宜しいでしょうか？ 何故、あの者にそこまでするのですか？ それにわざわざ、エリクサーなど差し上げなくともゲイン様にはエクストラヒールがあります。あれならばすぐに元に戻せる筈です」

「うんとなあ、まず1つ目アーサーのジョブ勇者の調査の為、どうするか考えてた所に、あいつ等が接触してきた。しかも第一声はお強いですよねだぞ？ 間違ひなくあのダンジョンを攻略中かもしくは、攻略するつもりだったんだらう。アーサーの勇者のジョブも解明出来たし、その恩返しだな。そして、2つ目お前はエクストラヒールをすれば元に戻ると言った。その通りだ。だけどなエクストラヒールにもたった1つだけ治せない状態異常がある」

ネメシスの真剣な顔が脳裏に浮かぶ。

「あの者の妹は既に亡くなっている？」

「恐らくな。あの様子じゃ、ずっと大陸中を駆けずり回ってたに違いない。勿論、様子を  
見に戻ったりもしていないだろう」

「ですが、エリクサーでは死者を蘇らせなおかつ、状態異常を回復などできません。それ  
が可能なのは上位のハイエリクサーだけ。——まさか！」

「そのまさかだ。ノイスにハイエリクサーを渡す」

ネメシスのいつも鋭い表情が更に鋭くなる。

「本気ですか？ ハイエリクサーはゲイン様でも、そこまで所持していなかった筈です」  
「良いじゃないか。一応、世話になったし宿屋の飯も奢って貰ったんだから。これはそ  
のお返しでもあるんだよ」

ネメシスが諦めた様に頭をゆっくりと左右に降っている。

「もう何も言いません。ゲイン様がどうしても言うのなら、それに従います」

「お！ ツンデレか？ 可愛い奴め。」

カシャンという音と共に目の前が真っ暗になった。

「あのすいません。目にシャッターあるなんて知らなかったんだけど？ ネメシスさ  
ん、前が見えませんか。機嫌直して頂けませんか？ 冗談です冗談」

またカシヤンと音がし、視界が元に戻った。

「ふう、焦った。あ！　　そういうや次の目的地で、ネメシスお前とヤルダバオトⅧ式とは一巨お別れだ」

「心得ております。アルテミスとウルガイスⅥ式ですね」

「そ、そうだ。アルテミスだ。あのアルテミスだ」

ウルガイスⅥ式とは俺が所持している外格の一体で唯一ローブっぽいものを羽織っている。ノースリーブで鋼鉄の腕がまる出しなのでローブと言っているのかいささか疑問だが、が、しかし問題はそこではない、ウルガイスⅥ式に搭載されている超高性能AIアルテミスに問題があるのだ。アルテミスの人格は褐色スキンヘッドで、頬にハートマークのタトウが彫っており、グラサンを掛けたオネエ系なのだ。無駄に渋い声で話す。しかも、ヤルダバオトⅧ式よりも2段階階程レアリティが下がるので、全てのステータスが下がり、ヤルダバオトⅧ式のパッシブスキルも全て使えなくなる。

フルメタラーの強みは強力な外格に身を包む事で、各ステータスアップと外格毎に効果は違うが、パッシブスキルを得られる事だろう。フルメタラーは完全に外格に依存する為、強みであると同時に弱点でもあるのだ。唯一の救いはお喋りな点を除いて、ネメシスと同じくAIとしては優秀で、パッシブスキルも中々使えるという事だろう。ウルガイスⅥ式のパッシブスキルはMP無限と魔法物理耐性のみだが、ほぼカンストになる



のと、相手を束縛もしくはそのまま絞め殺す事が可能なスレイプニルと、味方に攻防バフを常時与える事ができる機械兵の思いやりの4つのだ。

「じゃ、ハイエリクサー見つけて、とっとと渡すかね」

俺はインベントリのソート機能を使い、ハイエリクサーを取り出すとギルドルームを後にする。

「はい、お待たせ。これがハ……ゲフンゲフン、エリクサーだ」

俺は扉を出てすぐにノイスにハイエリクサーを手渡す。

「これで……ようやく妹を救える。本当にありがとうございます！ よしー」

ノイスは皆と所へと戻ると、大きな声を張り上げ宣言する。

「皆聞いてくれ！ かねてからの計画通り僕は今日！ 今ここで永劫の探求者の解散を宣言する。長い間、僕のがままに付き合ってくれて本当に感謝している！」

「そうか、そういやそうだったな！ お疲れさん！ ノイスー」

「長かったですね。妹さんといつか一緒に飲みたいですね」

「俺は、どうしようかな。地元に戻って畑でも耕すかな」

「私……もどうしよう……まだ……決めてない」

「どういう事だ？ 説明しろ」

置いてきぼりを喰った為、俺はノイスに説明を求める。

「はい、妹を助けられるその時になったら、解散しようとか皆と決めていたんですよ。もう我々はエルメンテとイルゾールを除き、とうに冒険者の適応年齢を過ぎているんですよ」

「そういえばイルゾールとエルメンテは酒飲んでなかったな。お前ら未成年だったのか」

「さあ、ゲイン殿も一緒に飲みましょう」

そうして、永劫の探求者の面々とどんちゃん騒ぎをしながら夜は更けていった。

## 第25話 俺、アーサーとエルメンテをギルドメンバーへ招待する

朝になり俺は、ギルドルームから出で背伸びをする。

「今日もいい天気だ〜！ さて、アーサー居るかな〜？」

宿屋待ち合わせ場所の宿屋の方を見ると、座り込んでいるアーサーの姿が目に入った。

「うわ、だいぶ辛そうだな。大丈夫か？」

「頭が痛すぎて死にそうです……」

俺は、すぐさまエクストラヒールをアーサーにかけてやる。

「ありがとうございます！ 昨日、本当に辛くって死ぬかと思いました」

「わかるよ、お前どんどん飲まされてたもんな」

「もう暫くお酒は飲みたくないです……」

「どうやらアーサーはお酒がトラウマになってしまったようだ。」

「最後に、女将さんに挨拶していくか」

俺とアーサーは宿屋へ入り、カウンターへと向う。

「女将さん飯大変美味しかったです。俺達そろそろ次の街に行きます」

「そうかい。私はずっとこの街に居るからね。また来るんだよ！ 港はここから左へ真つ直ぐ行けばすぐだよ」

「お世話になりました。じゃあー！」

俺とアーサーは港へと歩き出し、暫くすると船場が見えてくる。よく見ると船場の入り口に見覚えのある女の子が立っていた。

「エルメンテ、何やってんだこんな所で」

「私も……付いていく。ルギームは私の……故郷。だからきつと……役に立つ」

「俺は有り難いけど、アーサーどうする？」

「仲間が増えるのですね!! 勿論、大歓迎です！」

アーサーはエルメンテの手を取りブンブンと握手している。

「そーいや、永劫の探求者の面々はどうしたんだ？」

「皆故郷へ帰った……みたい。少なくとも、ノイスとイルゾール…はそうだと思う。ニーピアとガニーはわから……ない」

聞いた所で汽笛が鳴り響く。

「お、どうやら出港の時間みたいだな。船に乗ろう」

手早く手続きを済ませ、船の甲板へと俺たちは向う。

「ふう、暫くはのんびり出来るな」

俺は海をボーッと眺めていると後ろに気配を感じ、振り向くとエルメンテが立っていた。

「聞きたい……事がある。昨日……入って行った……扉の中はどういう空間に……なっているの？」

「ギルドルームの事か？ ありや、俺ん家だよ。俺はホームって呼んでるけどな」

言った途端、エルメンテの目が輝き出した。

「是非！ 是非！ 中を見てみたい！」

「お、お前そんなキャラだったつけ？ う……う……う……う……いいっちゃ良いんだけどちょっとなあ」

ギルドメンバーは設立者合わせて30名のみ登録出来き、登録は許可制で例外はない。今俺のギルドメンバーはハガセン時代のメンバーで全て埋まっている。消してしまおうと前世の繋がりが完全に消えてしまう為、躊躇したのだ。

「ダメ？」

エルメンテは首をかしげながら俺を見据える。

「——良いよ、分かった」

俺はルームキーに付いているエメラルドの様な宝石を2回押す。すると、全ギルドメ

ンバーの情報を削除しますか？ y/nの表示が目の前に表示され、俺はyを押し新たにエルメンテとアーサーの名前を入力する。

「よし、これで何時でも何処でも入れるぞ」

「アーサー……呼んでくるね……」

暫くするとズダダダ！ と音がし、アーサーが走りながら近づいてきた。

「ぼ……僕も……ハア……お師匠様の家見てみたいです！ ハアハア……」

「お、おう。もうお前らの登録は済ませたし、何時でも行けるんだが」

「今すぐ行きたい（です）！」

「アツハイ。じゃけん、人気がないとこ行きましようね」

俺達は船の中へと入り、適当な空いてる個室を見つける。

「よし、ここで良いか」

俺は客室らしき入り口に立つと、ルームキーをインベントリから取り出し、空間へ向かってキーを回す。すると、白い大きな扉が現れ、俺はドアを押す。眩い光に一瞬包まれると、そこは既に俺のギルドのエントランスだった。

「ツうわあ、凄く綺麗なお部屋ですね！」

「言つとくけどエントランスだからな。俺の部屋とかじゃないから」

アーサーのポケを尻目に見つつツツコミを入れ、今度はエルメンテの方を見ると上へ

と登る螺旋階段の横へ設置してある純金で出来た女神像をジツと見つめていた。どうやら、女神像の手にはまった銀の指輪を見ているようだ。大小の紫やオレンジ色の宝石が散りばめられている。俺はエルメンテの横へ立つと、女神像から指輪を抜き取り、エルメンテへ渡す。

「なんだ？ この指輪が気になるのか？ ほれ。欲しいならやるよ、それにこいつはお前の持つてる杖の上位互換みたいなもんだし、お前なら扱えるだろ」

「い、良いの!? こんな凄いものを!？」

「パッシブスキルはまあまああってところだな。消費MP半減70%と自動レジスト確率50%と物防アップ+3500だったつけ？ そいつはマジックミスリルって特殊鉱物で錬成しなきゃならん。中々の技物だぞ？ 杖より魔力伝達率が比べ物にならない位には上だ。おまけに杖みたいに邪魔にならないのが強みだな。名前は「魔導女神の指輪」だ」

「で……伝説……や、お伽話で出て……くる魔導神器の名前とい……一緒プクプク……」

そう言うのとエルメンテは白目を向き口から、泡を吹いてビターン！ と仰向けにぶっ倒れた。

「フアツ!? エルメンテ!? 大丈夫か!! エクストラヒール! ん!? 何故治らん! おい! エルメンテ!」

「恐らく、ただ単にショックで気絶しただけのようです。エクストラヒールが不発したところは初めて見ました。興味深いですね」

「ネメシス無駄に冷静な実況は良いから！ ああもう！ 仕方ねえな！」

俺はエルメンテをお姫様抱っこし、螺旋階段を駆け上がり、すぐその空き部屋に入るとエルメンテをベッドに寝かせて部屋を出る。

「さてと、そろそろ外格をウルガイスⅥ式に変えるか。チェインジツ！！ ウルガイスⅥ式ツッ！」

「では、ゲイン様、またお会い出来る日を楽しみに待っています」

俺が声を張り上げると、ヤルダバオトⅧ式の全外格がバキヤ！ という音と共に、一斉に外れ俺の目の前で再び形造ると、俺に対し深々と礼をし露と消え去っていく。それを見届けた瞬間身体に軽い衝撃が奔ると、既に俺はウルガイスⅥ式を身に付けていた。ネズミ色のローブの様な物を羽織り、ノースリーブで腕は鋼鉄の腕まる出のだが、ローブは顔から足まで伸びている。顔面には青色の4つのモノアイが妖しく光る。

「よう、アルテミス。暫くの間世話になる」

「ヤダアン、ゲイン様。マジ久々よね!! 嬉しいわあ！ 暫くなんて水臭い！ ずっつとでも、良いのよ？」

「い、いや……良い……遠慮します。はい」



下へと降りていくとアーサーがジュースをメイドから受け取っていた。

「あ、お師匠さまって、誰ですか!?! あなたは!?!」

「俺だよ。ゲインだ。次の目的地、魔法大国ルギームはローブ羽織ってないと門前払いらしいぞ。ローブ渡しとくから、着ておけ」

俺はインベントリから、適当なローブを取り出し、アーサーへ放り投げる。

「はい! わかりました」

「ヤダアン、なに!?! この可愛い坊や! すっごい好みなんですけど!」

ああ、やつぱりこうなるのか。

こいつの性能もVIの中じゃ群を抜いて優秀なんだけどなあ。

絶対こうなると思ってたわー。絶対ロツクオンすると踏んでたわー。

「えっと、新しいよ……妖精のアルテミスだ。仲良くしてやってくれ」

「新しい妖精さん!?! 凄いです! よろしくお願いしますアルテミスさん!」

「妖精……ヒツツ良いわねえ。こちらもお願ひするわね! 何ならもつと深い中になっても良いのよ?」

「頼むから余計な心配ごと増やさんでくれ……」

お前の身体は俺なんだからな!

2階の扉が開き、再起したエルメンテが降りてきた。俺を見るなりツカツカと早歩き

で近づいてくる。

「それが、ゲインの……ロープ？」

「お、おう。そうだが、ダメか？ これしかないんだが」

「正直、かなり……微妙……かも」

「んま！ 失礼ね！ 私のキューティクル& a m p ;ダイナミックな外格が微妙だなんて！」

俺から別人（オネエ系で野太いダンディなおっさん）の声が出たため、フリーズするエルメンテ。

「え……えっと、エルメンテ言うの忘れてたけどさ。俺の甲冑特別製で妖精が宿ってるんだ。だから、俺から別人の声が聞こえるけど気にしないでくれ」

「格好いい！ 私にも妖精宿る？」

アーサーとエルメンテは、どうやらお伽話やら伝説やらが大変お好みの様だった。

ええ……食い付くんだ。これは予想外。

「ちよ……ちよつと無理じゃないかなあ。ま、まあ、仲良くしてくれ」

「フフフ、私を格好いいだなんて、いいセンスしてるわよあなた。女同士仲良くしましょ。わたしの名はアルテミス。よろしくね」

「よろ……しく、エルメンテ。女……の子同士??？」

俺は無理やり話題を変えるため声を上げる。

「もう、そろそろルギームへ着くんじやないか？ 一度ルームを出よう。また何時でも来れるんだから！ さあ出るぞ！」

俺は有無を言わずルームから出る為ドアを開ける。一瞬その場が光ると、入る時と同じ船の客室に戻っていた。小窓を覗くと、青や赤や緑にきらびやかに発光する都市。そしてその中で一際目立つ、とても大きな塔の様な建物が目に入った。

「あれが、例の塔か」

「うん、そ……う。私の故郷……」

エルメンテは腕をグツと握り拳を作る。薬指にはまった【魔導女神の指輪】がきらきらと輝いているのが見える。

船が港へ付いたのか、一瞬揺れを感じた。

「よし、どうやら停泊した様だな。エルメンテお前が頼りだ。すっかりな」

「エルで……いいよ。ゲイン」

「わかったよ、エル。さあ、行くぞ」

俺達は船を降り魔法大国ルギームへと歩を進める。

## 第26話 俺、魔法大国ルギームの入国審査を受ける

魔法大国ルギームの入り口であろう大門には長蛇の列が出来ていた。入る為には簡単な審査が必要なのか、レッサーゴーレムが直立しており、魔法スキルが撃てない者、撃てもレッサーゴーレムに傷が付けられない者はルギームに入居者入国出来ない様だ。

今も魔法が撃てなかった為にローブを羽織ったパーティが門番に追い出されてしまった。不服だったのか抗議している様だ。

「アルテミス、あいつがどんな抗議しているのか知りたい。聴力を拡張してくれ」  
「わかったわ。ちよつと待って頂戴」

すぐさま、抗議している男と門番の声が耳に届く。

「クソ！ 何だつてんだ！ 良いじゃねえか！ たかが魔法が使えないだけで、何で入国出来ねえんだよ！」

「……を何処だと思ってる？ 魔法大国ルギームだぞ？ レッサーゴーレムにすら傷を付けられぬ愚か者を通すわけなからうが。とつと消え失せろ。まだまだ入国審査は続くのだ。貴様等の様なゴミが我が国に入る事は、大賢者様の顔に泥を塗る事に等しい。それに貴様は魔術師ではなからうが！ 屑めが」

「とんでもねえな、先頭のパーティが審査に落ちたみたいだが、門番にボロクソに言われてるぞ。審査は魔法スキルでレッサーゴーレムを傷つけるか破壊すればいいみたいだな。魔法が使えなければ即門前払いだよ」

こんな人権侵害も甚だしい国が何故存続できているのか。俺は疑問に思った為、エルの方を見ると察してくれたのか、目が合い、エルが口を開く。

「ルギームにある……商店には、大賢者様がお広めになった、ありと……あらゆるスキル……のスクロール、その写しが売られてるの。だから、強力なスキルを求めて……ここには絶えず人が来る……の。ルギームでは、魔法こそ、命の次に大切……だから」

「強力なスキル覚えられるのが、ここしかないから横暴な態度でも許されるのか？ とことん狂ってやがるな」

アーサーが俺達の会話を聞き、顔面蒼白になっている。アーサーは魔法が使えるがどれも初期のものである為、このままでは置いてきぼりを食う事が自分で行っているのだろう。ダラダラと冷や汗を流していた。

「ど……ど……ど……どうしましょうお師匠様！ 僕レッサーゴーレムに傷を付けられる程威力のある魔法なんて一切持っていません！」

俺には既に考えがあつた為それを話そうとしたところ、ニヤニヤしながらアルテミスがアーサーへ語りかける。

「仕方がないわあ、アーサーちゃんはお留守番ねえ」

みるみる、アーサーに目に涙が溜まっていく。

「やっぱりシヨタつて最高ねえ。食べちゃいたい」

「あのさあ……俺の身体で気色悪い事言うのやめろつて！ それにアーサーが可哀そう  
だろー！ 大丈夫だ！ アーサー俺に任せろ。いい考えがある」

「ヤダアンもう！ ちよつと、意地悪しただけじゃない！ ごめんなさいネ？ 機嫌直  
してアーサーちゃん」

アーサーは目をこすり、いつもの様に元気良く答える。

「はい！ 大丈夫です。アルテミスさん！ お師匠、考えというのは？」

「俺とお前が初対面した時に、俺にぶちかました魔法があるだろ？ 最悪それでいけ。

絶対一緒に門潜らせてやるから」

「ファイヤーブラストの事ですか？ い……いや、しかしあれは……」

俺はアーサーの肩に手を置き、目線を合わせる。

「師匠を信じろ。任せておけ」

「ハイ！」

そうこうしているうちにドンドン列は消化されていき、遂に俺達の順番となった。

入ろうとした瞬間、俺達は門番であろう深々とローブを羽織る魔術師に呼び止められ

る。

「魔法大国ルギームへ何か用か？　ここ最近、我が魔法大国ルギームに職業を偽り、不法に入国する輩が多いのだ。入国したければ簡単な審査を受けよ」

門番は舐め回す様に俺達3人をジロジロと見ると、俺の目の前で止まる。

「何だ？　貴様のその姿は？　貴様騎士ではないのか？」

「は？　俺のどこが騎士なんだ？　どこからどう見ても魔術師だろう？　それとも何か？　お前は人を見た目で判断するのか？」

「鋼鉄に身を包む魔術師がいて溜まるか！　よし、そこまで言うならまず貴様からだ！　今からレッサーゴーレムを出す！　1人ずつ魔法のみで傷を付けるか、もしくは破壊してみせよ！　出来たら入国する事を許可する！　使用するのは攻撃魔法のみだ！

その他の動作をした瞬間に審査は不合格！　パーティ全員だ！　では、始め！」

——さて、どうすつかな。レッサーゴーレムとか人間の形したただの土塊なんだよなあ。折角だし派手にいききたいな。

見た目のインパクト重視ってんならアレでいっか。レッサーゴーレム破壊すればいいだけなんだし。

俺は的であるレッサーゴーレムに手をかざし、詠唱を開始する。

「……偉大なる風の精霊ウィンダムよ。眼前の敵を排除せしめんがため、その力を我が

手中へ集め、解き放て！ ウィンダム・ボム！」

小さな風の塊が俺の手から離れていき、レッサーゴーレムと接触すると、内部に圧縮されていた幾千万ものかまいたちがレッサーゴーレムを飲み込む。暫くして、納まるとゴーレムは跡形もなくなり、立っていた場所には、緑色の美しい手のひらサイズの妖精が浮いていた。

背中に付いた4枚の羽はうつすらと虹色に輝いていて、パタパタと動かし、俺に近づき、顔にキスをする。とクスクス笑いながら、妖精は消えていった。

「い……今のは？」

「で、どうなんだ？ 破壊したぞ？ 俺は合格か？ 次は誰で行くんだ？」

「3人共い……行つていい。行つていいからさっきのあれは何なのだ！ 教えてくれ！」

俺に突つかかってきた魔術師が半狂乱になりながら、俺に請うてくる。

「お前等の敬愛する大賢者様に、教えて貰えばいいんじゃないか？」

「なッ……」

俺は皆に見えない様に門番の胸ぐらを掴み、顔を近づける。

「おい？ 良いか、よく聞け？ 大賢者様だろうが何だろうが知らんが、人を見た目で判断するのだけはやめといった方が良いぞ？ あと、魔法が使えないからって門前払いする



のもやめろ。お前等のそういう態度こそ、敬愛する大賢者様の顔に泥を塗ってるって事に気づけ。このバカチン」

俺は胸ぐらを掴んでいた手を緩めると、門番はへたり込んでしまった。

「じゃ、通らせてもらおうぞ？ 他の門番達にも言っとけよ！」

こうしてようやく、俺達は魔法大国ルギームへと入国したのだった。

余談だが、この後少しだけ入国審査が緩くなったらしい。

## 第27話 俺、喫茶店で休憩する

ルギームの中は人混みで溢れていた。魔法大国という名は伊達ではないらしい。意外や意外ご多分に洩れず酒場、武器屋、アクセサリーショップなどが立ち並んでいた。道行く人々も流石に魔術師が圧倒的に多いが、その他のジョブの者や獣人の姿を見る事ができる。

「なんだ、中は思っていたより普通なんだな。もっところ荒んでるのかと」

「一定の魔法……さえ使えれば……ルギームには入れるし、魔法という概念そのものに……敬意を払……つてるから、魔法を行使する……人に対しては……とても良い街だ……と思う」

「ふーん、魔術師にとつては、かなり住みやすい国ってこつたか。あれ？ そういや、アーサーどこ行つた？」

周りの人混みのせいで、どうやらアーサーと逸れてしまった様だ。俺は同じ過ちを犯さぬよう、エルの手を握りアーサーを見つける為大声を出す。

「アーサー！ 何処だ!？」

「お師匠様、助けて下さいい〜」

アーサーの助けを耳にし、俺は人をかき分けながら声のした方へと歩を進める。アーサーは屋台の主人にキヤツチされていた。

「いきなり呼び止められて、ちよつと見ただけなのに買え買えつて言うですく。僕お金なんて1ローゼスも持ってないのにく」

「ハア、焦つて損したぞ。アーサー」

「何だ。本当にスカンピンだったのかい？ 困るな冷やかしは。じゃあ、そつちの……魔術師？ 騎士？ まあ、どつちでも良いや。あんちゃんどうだい？ 大賢者様の、聖典に記されてた速身そくしんつてスキルを写したスクロールだ。ここでしか手に入らない限定ものだよ」

俺は主人からスクロールを受け取る。

「で？ これをどうすれば覚えられるんだ？」

「あんちゃん、もしかして田舎者かい？ 良いか、文字が書いてあるだろ？ それを指でなぞれば良いだけさ。」

「ふーん、わかった。1枚幾らだ？」

「あんちゃん達、一応魔術師みたいだからまけてあげるよ。2000ローゼスね」

俺は主人に2000ローゼス渡す。

「まいどあり！」

俺は主人の声を無視しアーサーの手を掴み、屋台が見えなくなった所で頭の中に靄もやがかかった様な感覚を覚える。

こんなゴミが2000ローゼスだと？ おまけに『魔術師だからまけとく』的な事言ってたな。魔術師じゃなかったら余計にボラれるとこだったのか？ 速身は剣士がレベル10程度で覚えられる素早さを上げるだけのバフだぞ？

「エルちよつと聞きたいんだが、これがこの国じゃ普通なのか？」

エルは俺の質問にコクツと頷く。

「ハハツ、ソツスカ」

あまりの酷さに頭を抱えなくなった。

前世の感覚で例えるならコンビニで買える100円のガムを当たり付だからと、2000円で買わされる様なものだからだ。

「ちよつと休憩しようか。何故か凄く疲れた」

「えつと……もうちよつと先に行くとか喫茶店……あるから……そこに」

俺2人とはぐれないよう手を掴む。暫く歩きエルが知っているという喫茶店の前へとやってきた。見た目は大きめのログハウスの様なデザインをしていおり、看板に「リーメルの喫茶店」と書かれていた。

「へえ、綺麗な喫茶店だな」

「私の……友達が経営してるの」

俺は喫茶店の扉の前に立つと、アーサーとエルの手を離しヘッドの真ん中を押す。すると、ヘッドがふたつに割れ、首の後ろ辺りに収納され顔がさらけ出された。

「エル、お前が扉押してくれ」

「う、う……ん、わかった」

エルが扉を押すとカランカランと小気味よい音になる。

「いらつしやいま……エル!? エルなの!? 久しぶりー! いつルギームに?」

「うん、リーメル。今……戻ってきたとこ」

「そう! 立ち話もなんだから空いてる席に座って!」

リーメルは茶髪のポニーテールに、黒いエプロンが似合う女の子だ。性格は、エルと正反対の元気っ娘の様な印象を受ける。俺達は、リーメルの後について行き、薦められた椅子へ着席する。

「一応、喫茶店だからさ。何か頼んでよ」

「じゃ、コーヒー3つ貰おうか。俺はブラックね」

「僕はミルク頼んでも良いですか?」

「私はミルクと……砂糖お願い」

「オツケー! ちよつと、待っててね」

リーメルが早歩きでカウンターへ戻っていき、プレートにコーヒーカップを3つにミルクの入った小瓶と、砂糖の入った小瓶を乗せ器用に早歩きでこちらへ近づき、サツとプレートを机に置いた。この時一切音はなっていない。プロの仕事である。

「ハイ！ おまちどー！ でさあ、やっぱあれに参加する為に戻ってきたの？」

「あ……れ？」

「ヤダ。忘れちゃったの？ 魔術大会よ。あと2週間ちよつとではじまるわよ？ だから戻ってきたんでしょ？」

「魔術大会？ そんなものがあるのか？」

「やっぱりあなたこの国の人間じゃなかったのね。そんな目立つ格好、私が忘れるわけがないもの。エルがお世話になってるみたいだから、お礼に教えてあげるわ。5年に1度、この国で大賢者様の次に強い魔術師達を決めるお祭があるの。」

それが魔術大会よ。2人1組みのチームで行われるわ。1番になれば、何でも1つだけ願いが叶えられるの。参加条件はただひとつ、大会期間3週間以内にこの国にいる事。この国の入り口凄い人だったでしょ？ 全員、魔術大会に参加する為来るのよね。元々人の出入り激しい国なんだけど、この時期はその倍以上人が来るからもうこつちとしてはウハウハよ」

「お前、仕事に戻らなくていいのか？」

「良いのよ。あたし店長兼オーナーだもん」

「そうか。教えてくれてありがとう。ん？ ちよつと待った。大会で優勝できたら、本当に何でも願いを叶えてくれるのか？」

「ええ、規則らしいから。相当に無理難題でなければイケるんじゃないかしら？」

「じゃあ、俺大賢者様とやらに会いたいんだけど、それも叶えて貰えるんだよな？」

俺がこう切り出すとコーヒーを飲んでいたエルが思いつきりブーッ！ つと吹き出し、騒がしかった周りが一瞬で静かになった。

「ばー！ 馬鹿ッ！ なんてこと言うの!? 冗談でもそんな事言っちゃダメよ！」

どうやら虎の尾を踏んづけてしまったらしく、この場にいる全員が俺を見ていた。

「ゲフンゲフン、じよ、冗談です冗談。なあに、ちよつとその……なんだ……腕試しをしたくつてね？」

俺は周りの皆に聞こえるようにわざと大きめの声で喋る。すると、何事もなかったかのようにまた皆喋り始めた。いや、何人かは俺の方をチラチラ見ながらヒソヒソ話をしてる。

やべー。大賢者つてのはこの国のピラミッドの頂点だったのか。今度から気をつけよう。確か爺だとエルは言っていたな。きっと美人の魔女達を側においてハーレムライフを謳歌してるに違いない。

そろそろ出るか。これ以上俺にさつきからずっと注がれ続けている視線に耐えられない自信がない。

「ゆ、有益な情報ありがとう。そろそろお暇するよ」

「そう、わかったわ。エル的事お願いね」

俺達は料金を払いリーメルの喫茶店を出た。



## 第28話 俺、宝物庫へ行く

エルの友人、リーメルからあと2週間程で魔術大会がある事と、1位になれば何でも願いが叶うという情報を手に入れ、俺はホームへと戻り作戦をたてる事にした。

「うーん、なるほど。だから門番というか、門にいた奴等皆ピリピリしてたのか」

「ごめ……ん、ゲインずつと……離れ……てたから、忘……れてた。怒って……る？」

エルが俺に頭を下げる。俺はアームの外格を解除し、素手が露わになったの確認すると、エルの頭を少し乱暴にガシガシとなでる。

「何言ってるんだ。お前のおかげで大賢者へ近づくこれ以上ない方法が見つかったんじゃないか。俺はお前に感謝こそすれ、怒るなんてとんでもない」

俺はエルの頭から手を離すと、鋼鉄の手へと戻る。

「魔術大会はお前と一緒に出るつもりだからよろしくな」

「うん！」

「お師匠様、僕はどうすれば？」

エントランスの隣にある、バーでジュースを飲んでいたアーサーが戻ってきていた。

俺はアーサーの肩に両手を置く。

「お前も知ってるだろうが、大会まであと2週間ちよつとしかないんだ。流石の俺もちよつと時間が足りない。悪いがアーサー、今回ばかりはお前はお留守番だ。客として観戦してくれ」

目に見えてシヨボーンとするアーサー。

「そうですね。僕ほぼ使える魔法なんて持ってませんから頑張つて下さい！ 応援しています」

「すまないな。その代わり新しい装備をやるから許してくれ」

「新しい装備!! 今度は何を頂けるですか!?!」

「そうだなあ、エルには指輪あげたし、お前には腕輪なんてどうだ？ ちよつくら、宝物庫行つて取つてくるよ」

俺は、エントランスの隅にある真つ黒な扉を開く。すると地下へと続く長い階段が現れた。光源はなく、暗闇が一切を支配している。俺が階段に足を踏み入れるとアルテミスが氣を利かしてくれたのか、ひとりでに暗視モードへと切り替わり、硬い煉瓦で出来たかのような壁を左手でさすりながらゆつくりと降りる。暫く降りていると2つ目の黒い扉の前に俺は立つ。すると、どこからともなく声が聞こえてくる。

「この宝物庫の前に立つ者は誰ぞ?」

「ゲインだ。宝物庫を開けてもらいたい」

「……あの、すみませんゲイン様、一応規則ですので合言葉言ってもらってもよろしいでしょうか？」

「ハア……わかった」

「ゲインの飯は？」

「クソ不味い」

俺が合言葉を言うと扉が、ゆっくりと開いた。

「お久しぶりです、ゲイン様。今日はどの様なご用件で？」

「ターゲット久しぶり。今日は【七星界王の腕輪】ひちせいかいおうを取りにきた」

「少々お待ちください。今取ってまいります」

この宝物庫は俺のギルメンが『せっかく、絢爛豪華なギルドルームなのに、宝物庫なのっておかしくね?』という謎のこだわりにより、勝手に作られたものだ。作っちゃったのなら利用しない手はないと皆インベントリに放置していたアイテム、武器、装備を片っ端からこの宝物庫へぶち込んだのだ。今でも膨大な数のアイテムがこの中で眠っている。また別のギルメンが『いちいち自分で探して取り出すの面倒だから、管用のアドバイザー入れといた』と言ってこれまた勝手に設置されたのが、ターゲットである。2足歩行で歩き、眼鏡を掛け、無駄に長い白髪の顎鬚を三つ編みにしているのがチャームポイント……らしい。

「こちらでございませす。どうぞ、お受け取り下さい」  
「ありがとうございます、タートル」

俺がタートルから受け取ったアイテムは、金色で出来た大きめの腕輪に7つの勾玉が嵌っているアクセサリーだ。

「うん、確かに。でも、良いんだろうか？ 幾ら俺がギルドリーダーだからと言って、仲間達が集めた装備を勝手に取り出してしまつて」

「何を仰る。道具や装備は使われてこそです。何があつたかは存じませんが、きつところの装備をお預けになったデコトラ野朗様も使つてくれと、言つたことでしょう」

「あ、これデコトラ野朗さんのなんだ。確かに、あの人なら良いよ良いよ使つてくれて言ひそう」

「他にご用件は？」

「いや、もうない。ありがとうございます。また来るよ」

「左様でございませすか。では——」

そうタートルが言うと、宝物庫の扉はゆっくりと閉まつていき完全に閉じたのを確認すると、俺はエントランスへと戻つていく。

「ふう、待たせたなアーサー。これがお前にやる【七星界王の腕輪】だ。全属性の耐性を90%アップと物理防御50%アップのスキルが付いてる」

「お師匠様！ ありがとうございます！ 大切にします！」

アーサーの件が一段落付いた為エルを呼ぶ。

「エルにアーサーもちよつと一緒に来てくれ」

「何……？ ゲイン？」

「何でしょうか？ お師匠様？」

「今から地下のコロッセオでエル、お前に新しい魔法スキルを覚えて貰うぞ。アーサーも参考になると思うから、見に来てい」

「コロッセオ！」

シンクロした2人に苦笑しつつ、俺はコロッセオへと続く螺旋階段を降りて行く。

「お師匠様、待って下さい」

「私……も、おいて……かないで！」

## 第29話 俺、コロッセオへ向かう

旋階段を降りた俺は土ぼこりを若干あげる地面の感触を足で確かめ、前を見据える。目の前には超巨大なコロッセオが夕陽に照らされ、その存在感をこれでもかと主張している。

何故かひぐらしの鳴き声が聞こえるが、これはコロッセオを作ったギルメンのセンスによるものである。これを作ったギルメンはたいそう夕日とひぐらしの鳴き声が好きだったらしく、コロッセオを作った時も、『この2つは俺の嫁！ 絶対にかかせない！』

『どうだ？ 最高に風流だろ？』と、コロッセオが出来た時にドヤ顔をしながら、俺に感想を求めてきたのを覚えている。和洋折衷は俺も嫌いではない。いや、寧ろ好きなのだ。だがこれはやり過ぎなのではないかと正直、今でも思う。中世のローマに実在しそうな超巨大コロッセオと日本のセミひぐらしが夕陽に照らされ共存しているのだ。

ひぐらしの鳴き声を耳にしつつ、道なりに歩を進め、コロッセオの内部へと入っていく。すると、上へと昇る為の階段があるのだが俺が階段の手すりに手を置くと、土ぼこりを上げながら自動的に上がっていく。そう、エスカレーターになっていくのだ。ただしエスカレーターの外見はコロッセオと同じく土塊で出来ている。これは宝物庫に

タワーを設置したグルメンが『階段昇るの面倒だから、エスカレーター付けといた』と、またまた勝手に設置したものだ。

グルメン達との思い出を記憶から呼び覚ましてしているとエスカレーターの動きが止った為、俺は我に返り、再び歩を進める。目の前には幾千幾万の観客席があり、筒抜けのオレンジ色の空にコロッセオの中心は全長10kmはあるだろうか？ポツカリと巨大な空間が空いている。俺は天高く跳躍し、コロッセオの中心へ着地する。

「相変わらず、凄いセンスのコロッセオだなあ。俺には到底真似できん」  
暫く突っ立って待っていると、アーサーとエルの声が聞こえてきた。

「凄いです！ 階段が勝手に動いてますよ！」

「こ……怖い」

「あつという間に頂上に着いちゃいましたね。エルさん！」

「幻……術？」

2人の姿が見えた為、俺は大声を出す。

「おーい！ 2人共大丈夫かー？ とりあえず1番下まで降りて来てくれー！ ゆっくりで良いからなー！ 1番下の観客席へ着いたらそのままジャンプしてこっちまで来てくれー！」

俺の声が届いたのか、アーサーが手を振りながら下りてくるのが目に入った。エル

もとてもゆつくりだが下りてくる。

「よく来たな。おふたりさん、どうだ？ このコロッセオは？」

「とてつもなく巨大で格好いいですね！ 名前は知りませんが、あのモンスターもとても鳴き声が綺麗で好きです」

「そうか、気に入ったか。エルはどうだ？」

「階段が……ひとりでに動いて……こわかった。あれ……幻術スキル？ それと……建物……中になん……で……太陽があるの？」

至極、当然の疑問を投げかけられ、俺はどう説明したものか困ってしまった。ギルドホームの中はギルドメンバーが好きないように弄る事が可能なのだ。作る空間やアンティークによっては、持ってた素材や金が溶けるかの如く大量に消費される。天候は勿論、気象さえも金さえ払えば自由に変更可能である。コロッセオの値段は2京メイタリ才程だったか。これを作ったグルメンの恐ろしい所は、これ全てを私財で賄った事だ。仮に俺は出来ても到底やろうと思わないだろう。

「う……うくと、エルそれはだな。何て言ったらいいのか。ここは空間丸ごと、俺の元々の仲間が勝手に作ったものなんだ。だから、俺には説明出来ないんだよ」

「太陽を……作るなん……で、まる……で神様みたい」

「お師匠のお仲間はどこにいらっしやるのですか？」



「どこにいるかあ……どこにいるかは知ってる。知ってるが、もう2度と会う事はないんじゃないかなあ。……たぶん」

俺はギルドメンバー達の顔を思い浮かべ遠い目をする。

「すいません！ お師匠様！ ぼ……僕知らなくて！」

アーサーが勘違いしたのか、俺に頭を下げる。

「良いんだ。アーサー気にするな。さあ、揃ったし修行するぞ！ アーサーは、離れて見ていてくれ」

「ハイ！ わかりました！」

アーサーが距離を取るのを確認し、俺は何もない空間に手を翳《かざ》す。夕陽を背にしながらひぐらしの鳴き声を聞きつつ、俺はエルに教える魔法スキルの詠唱を開始した。

## 第30話 俺、魔法を教える& a m p・俺、エルの過去を見る

「愚かしき者共に、見えぬ楔を打ち込み地に伏せ果てる。グラビティ・スタンプ」

俺はエルに教える魔法スキルをコロッセオの適当な所へ詠唱する。すると、1メートル程離れた地面が、突然陥没し2メートル大の穴が出来上がるが逆再生の様に直ぐに更地へと戻る。

「凄い……」

「驚いたか？ どんな強力なスキルを放つてぶっ壊そうが、瞬時に元に戻るからな。幾らでもぶっ放せるぞ。これともう一つ魔法を教える。あ、そうだ。もう一つの魔法だが、せつかくだからアーサーにも覚えて貰おうかね」

「うん。わか……った」

「僕にも新しい魔法を教えて頂けるんですか!? やったあ!」

俺は前準備の為にエルにアイテムを渡す。

「エル、修行を始める前にこいつを渡しとくな」

俺は、インベントリから「友情と努力の鉢巻」を取り出しエルへ手渡す。

「こいつを持つとけ。アーサーにも同じものを持たせてある」

「これな……に？」

「付けているだけで、強くなれる凄いアイテムだ」

「どうすれば……いい……の？」

「どこでも自分の好きなように付けろ。アーサーみたく、頭に括りつけるのが普通だな。嫌なら持つてるだけでも良いぞ」

「ん……わかった」

エルは鉢巻を左手に巻きつける。

「良し！ じゃ、とつととやるか！ アーサー、エルの隣に並んでくれ」

俺はエルとアーサーの額に手を当て、ギフトを起動させエルにグラビティ・スタンプを。そして、エルとアーサーにエアリアル・ダイブを伝授する。

「エル、俺に向かってグラビティ・スタンプをMP半分——じゃなくて、ちよつち疲れる程度になるまで放ち続けてみようか」

「え……いいの？」

「おうよ、思いつきりかませ」

エルは、眼を閉じ呼吸を整えると、俺に向かって、手を翳し詠唱を開始する。

「愚かしき者共に、見えぬ楔を打ち込み地に伏せ果てる。グラビティ・スタンプ！」

周囲の重力が乱れ、俺を押し潰そうとするが一切動かずその場に立ち尽くす。

「何だ？ そんなものか？ お前この国の出身なんだろ？ そんなんじや蟻も殺せないぞ？ もつと本気を出せ。良いか、エル。お前には詠唱をキャンセルした状態で俺程とはいかなくとも、それなりの威力を発揮するまでになつてもらうからな」

「クツ……！ 愚かしき者共に、見えぬ楔を打ち込み地に伏せ果てろ。グラビティ・スタンプ！」

「だめだ。全くだめだ。お前の本気はその程度なのか？ もつと殺意を込めろ。お前冒険者なんだろ？ なら命の危機に何度もあつてる筈だ。そんなんで良く今まで生きてこれたな」

俺はエルを延々と煽りながら、グラビティ・スタンプを唱え続けさせた。

2時間後……。

「最初よりはマシになった。だが、まだまだ足りないな」

「ハア……ハア……グ……グラビ……」

俺はインベントリからハイエーテルを取り出し、エルの方に放り投げる

「飲め。MPが尽きようとしている。飲んだら少し休憩だ。エル、何故本気を出さない？」  
「だって……ゲインあいつらと違って優しいから……」

優しい？ 何の事だ？ そういえば出発する前家族がどうか言つてたか。折角

やる気になっていっているのに不安材料があつては後にトラブる可能性があるか。あれをやるか。少し残酷な気もするが。

俺はエルの頭に手を乗せ魔法スキルを発動させる。

「少し頭の中を、お前の記憶を辿らせてもらうぞ。サイコメトリー」

「え？」

数々のエルの姿が俺の頭の中へと流れこんでくる。



——私の名はエルメンテ。エルメンテ・ド・シュビエル。

私はシュビエル家に仕えるメイドが生んだ娘としてこの世に生を受けた。

父も母も、私をとても可愛がつてくれた。私は幸せだった。私には2人の姉がいた。アイーナとイクルナだ。アイーナは金色の髪にストレートロングヘアーが似合っている。イクルナも同じく金色の髪をしているが左右の髪が縦にロールしている。この2人にとって私は只の邪魔者ようで愛する父を取られるとも思ったのか、ある日を堺に親のいないとこで、毎日のように虐待を受けるようになった。罵詈雑言は当たり前。魔法の杖を折られたり、引つ叩かれたり。その位何とも思わなかった。何をされようが無反応を貫いた。いつか飽きが来てやめてくれるだろう、そう思った。そう思っていたある日……母が倒れた。どんなに薬を飲ませても、治る事はなかった。母はどんどん衰弱

していき、遂に亡くなってしまった。

魔法学校にいる時は何故か、接触してこなかった。トイレに籠もり考え事をしていたある日、姉達が偶然入ってきて、私は真実を知る事になる。

「フツ、あの女の母親ようやく死んだわね」

「ええ、長かったですわねお姉様。食事何とか毒を仕込み、体調を崩してからも薬と偽って毒を少しずつ飲ませていったんですもの」

私は気が狂いそうになった。思わず叫びそうになった。あの2人が母を毒殺したのだ。絶対に許さない。いつか必ず復讐してやる。私は胸に誓った。

だから、勉強し続けた。早くこの牢獄から抜け出す為に。人との繋がりが希薄になった弊害か、はたまた心的外傷が原因か、いつしか私は大きな声の出し方を忘れていた。だが、些細なことだと気にならなかつた。図書館に籠って勉強していたある日、私にユニークスキルが発現していた。相手を注視する事でステータスや、使える魔法、弱点までもわかるというスキルだ。

私は、このスキルを使い、ありとあらゆる授業で高得点を出し続けて、魔術学校を主席で卒業した。私は特例が認められ、最速で研究者へとなるか冒険者へなる事が認められた。私は冒険者へなる道を選んだ。この国に、いや、姉達の近くに居たくなかつた。一刻も早く抜け出したかった。冒険者として実力と、経験を積み、なんとしても復讐を

成就させる。その為に。

俺はサイコメトリー解除する。

「お前良いとこのお嬢さんだったのか。2人の姉に虐待を受け続け、母親を毒殺されその復讐の為に、今まで生きてきたと?」

「う……ん、あの2人は絶対に許さない」

「くだらん。たかがそんな事か。良いか? よく聞け。俺は邪魔する者あらば蹴散らすつもりでいる。そうしなければこちらが殺られるからだ。魔術大会には、恐らくお前の姉も出場するだろう。その時に復讐でも何でも好きにすりゃいい。俺はあくまで大賢者に会う為に魔術大会へ出場する。その為には、お前にスキルを覚えて貰わなきゃならんのだ。最初に言ったな? 殺意を込めろと。今のままじゃ、復讐どころか逆に殺されるぞ。もう一度言う。俺にその姉達に向ける殺意を込めて、グラビティ・スタンプを放て」

「……愚かしき者共に、見えぬ楔を打ち込み地に伏せ果てろ。グラビティ・スタンプ!!」俺の立っている地面が、音を立てて徐々にひび割れていき、1メートル程の凹みが出来た。

「よし。合格だ。今の感覚忘れるなよ? 最終的には詠唱を省略した状態でこれ位の威

力が出せる様になってもらうからな」

「今から1週間これとAEW。そして、お前の覚えてる魔法スキルを全て俺に叩き込み続ける。良いな」

「うん。わかった」



### 第31話 俺、エルとの修行の最終調整する

エルの修行を開始し、1週間が経った。

彼女にはこの1週間で元々覚えている全ての魔法スキルを【無詠唱】で、それなりの威力が出せる様になってもらおう事が俺の目的だった。

今では【無詠唱】で俺の動きを止めようとグラビティ・スタンプを連発し、隙あらば様々な攻撃魔法で俺を襲ってくる。

魔法スキルの詠唱スタイルには3つの段階が存在する。威力が最も高いが隙を晒す為、仲間に掩護して貰う必要がある。【完全詠唱】詠唱を破棄し、魔法スキルの名称のみで発動する。雑魚戦やPVPなどではこちらが主流である。【半詠唱】そして一切詠唱しない為、魔法スキルの発動スピードは早い為、威力が弱い【無詠唱】の3つである。無詠唱はこの3つの中でぶつちぎりの不人気なのだが、事グラビティ・スタンプに限り、話が変わってくる。

これにはグラビティ・スタンプの元々の性能が関係してくる。グラビティ・スタンプの攻撃魔法としての性能は、距離を設定した後1メートルから3メートル円柱状の範囲内へ入った者を超加圧された重力による束縛兼攻撃であるが、グラビティ・スタンプの

発生には予備動作の様な物がなく、即座に効果が発揮される。強力な魔術師が無詠唱でグラビティ・スタンプを連発すると、敵は何も出来なくなってしまう、一方的にボコボコにされる。この状況はハガセンでは、俗に「グラハメ」と呼ばれ恐れられていた。

閑話休題。

俺はエルの攻撃を避け続けている。

前後左右からグラビティ・スタンプで動きを封じられ、ありとあらゆる攻撃魔法が俺に向かつてくる。グラビティ・スタンプの発生が早すぎる為、見てから避けるのは非常に困難なのだ。今のエルはさながら固定砲台である。

「相変わらず、この戦法はエグいぜ。でも、まだまだだな。ずっと遠距離攻撃を続けるつもりか？」

「……AEW!」

エルはAEWを発動させる。どうやら、俺の煽りに反応した様だ。エルの周りに7つの武器が浮いている。

俺とエルには、4メートル程の距離がありエルは少しずつ、だが確実に俺に近づく。

「……ッ!!」

俺の前後左右に今までに無いような位強力な重力がのしかかる。

「AEWを発動させてどうするんだ？ まさか俺の動きを封じ、接近戦を挑む気か？」

魔術師のお前が？ H A H A H A！ ちゃんちゃらおか——え？」

エルを煽った瞬間、俺は信じられないモノを目にし、一瞬思考が止まる。

グラビティ・スタンプは発生させると紫色の円柱状のエフェクトが付くのだが、それが空中に現れたのだ。おまけにそのエフェクトを見るにエルは自分自身に向かってグラビティ・スタンプを空中で発動。A E Wで召喚した大鎌を構えると、そのまま重力に引つ張られ、俺に向かってとてつもないスピードで加速。いや、落下してきたのだ。

「な、何だそりやあああああ!!? クツ、クソ！避けられねえ！」

「えああああああ!!」

エル大鎌がウルガイSVI式とぶつかり、火花を散らした。

「ウツソだろ、お前。何だよありや？ どうやったんだ？」

「何か……やったら……出来た。私、合格？」

「合格どころか、俺の完敗だぜ。あく、ぶったまげた。あの発想は俺にはないわ。つていうか、やったら出来たって……」

「えっ……へん！」

ドヤ顔しながら、恐らくほぼ無いであろう胸を張るエル

「よし、じゃ次だな。アーサーもこっちこいや」

「ハイ！ お師匠様！」

「揃ったな。じゃあ、お前たちに教える2つめのスキルはリアル・ダイブっていう飛行スキルだ。こいつは、覚えとくと色々便利だからな。移動は勿論、回避にも使える優れもんだ。おまけにMP消費量も然程多くないのが良いところだな」

「飛行スキル!?!」

「何で驚いてんの。ぶっちゃけエルのグラビティ・スタンプ使ったアレのほうがこっちのより、ずっとびつくりなんだが。あと1週間はひたすら飛行訓練して貰うからそのつもりでな。あとエル、さっきの空中でグラビティ・スタンプ出す方法教えて」

「ハイ！訓練頑張ります！」

「さっき、いっぱい……意地悪な事言……われたからヤ……ダ」

ニヤつきながら俺の頼みを拒否するエル。

「お姉さん許して!」

そんなこんなであつという間に時が過ぎ、俺達は遂に大会当日を迎えるのである。

## 第32話 魔術大会予選開始

大会当日の朝になり、俺達は朝食をとるためリーメルの喫茶店へ来ている。店内を見渡すと客席はほぼ冒険者で埋まっていた。カウンター方へ歩いていき、リーメルに挨拶する。

「よう、おはようさん。全員大会参加者か？ 流石に多いな」

「当たり前でしょ？ この時期にルギームにいるってことはそういう事よ」

「ほくん。ま、どうでもええわ。それより朝食いつもの3人前ね」

「わかったわ。空いてる席へどうぞ」

俺はカウンターから離れ、丁度いい空席を見つけるとアーサーとエルを呼ぶ。

「アーサー！ エル！ こっち丁度空いてるぞ！ 早く座れ！ 席がなくなっちゃうぞ！」

「ハイ！ お師匠様！ ありがとうございます！」

「ありがとう」

「さて、大会の規模やばそうだな。ここにいる全員敵とはな。そうだ、エルお前この街の出身なんだから大会のルールとか頭に入ってるだろ？」

「予選は……バトルロワイヤル……形式で行われる。大会開始前にワッペン……みたいなのが貰えるんだけど、それをより多く手に入れた者が予選を通過……できるの。ワッペンはチームの証にもなつてて、チームの片割れがワッペン……ペンを奪われたら……チームは強制的に失格になる。だった……筈」

「ふーん、参加者めちやくちや多いもんな。そりやそうなるか。ワッペンは何処で貰えるんだ？」

「冒険……者ギルドで一緒に水……晶に触るの。それ……で同じ色のワッペンが貰える」

「え？ 今から？ それだいつ時間掛かるんじや？」

「一緒に触れ……るだけだから、すぐ終わる」

エルからあらかた情報を聞いたところで、リーメルが朝食を運んできた。

「ハイ、おまちどー。あんたホントに優勝するつもりでいるの？」

「当たり前だろ？ この国にいる奴等なんぞ、俺からみれば雑兵の集まりよ」

「大した自信家ね。流石、タブーを思いつきり口に出す事あるわ」

「ゲ……インの強さは……本物。私も強力な魔法を幾つか教えてもらった」

「冗談でしょ？」

リーメルはエルの顔を見て、驚愕の表情を浮かべる。

「ただだけお前、俺の事ビッグマウスだと思ってたんだ。流石にちよつとシヨックだぞ」  
「いや、頭のおかしい狂人だと思ってた。ごめん」

「余計ひどいやんけ！」

そんなこんなで朝食を終え、俺達はリーメルの喫茶店を出ようとしたところリーメルに呼び止められる。

「ちよつと待つて、いい？ エルに何かあつたら許さないわよ？ 私も一応魔術師の端くれ。もし、怪我でもさせたら貴方を呪い殺すわ」

「怖いなあ。大丈夫だつて安心しろよ。怪我なんて一切させねえから」

俺はリーメルの喫茶店を出るとエルの後について行き、ルゲームの冒険者ギルドへ向かう。暫く歩き冒険者ギルドへ着くと凄い人だかりが出来ていたが、エルの言う通りあつという間に消化され、俺達の番がやってきた。

「ご多分に漏れずルゲームの受付嬢も中々の美人さんだ。ウェーブが掛かったピンク髪ショートカットに、大きめの眼鏡がよく似合っている。」

「ようこそ、ルゲームの冒険者ギルドへ。どうなさいました？」

「魔術大会へ参加したのですが」

「それでしたら、卓上にございます水晶を一緒に参加する人と、同時に触れば登録完了です」

俺は、エルと同時に水晶へ触る。すると、水晶が紫に光りワツペンの様なものがロボの胸の辺りに張り付いていた。

「おめでとうございます。無事登録完了したようですね。他に何か御用はございますか？」

「えつと、予選はバトルロワイヤルって聞いたんですけど、戦闘はどんな場所で行われるんですか？」

「予選のバトルフィールドはこの国そのものです。一般人には一切攻撃が効きませんので、ご安心下さい。その為のワツペンでもあります」

「へえ、わかりました。ありがとうございます」

「私の名はシェイと申します。何かあたからお呼びください。ではご武運を」

俺達は受付嬢のシェイさんに、軽く会釈しギルドを出る。すると頭の中に声が響く。

《遂にやってまいりましたー！ 5年に一度の祭典魔術大会！ 私は実況解説のバレインと申しませう！ さあ！ 準備は良いですかー!? 間もなく予選が始まりませう！ 予選はバトルロワイヤルです！ 参加者はランダムに選出され、この街全体で闘って頂きます！ ワツペンを奪われたらその時点で失格となります！ 殺して奪うもよし！ 半殺しにして奪うもよし！ 痛い目を見たくなければサレンダーも可能ですー！ 尚、死んでしまった場合は完全に自己責任となります！ ご注意下さい！



では、第197回魔術大会！ 開始ーッ!!﴿﴾

何かとんでもなく無責任な台詞が聞こえ、エルに聞こうと思つた途端足元に魔法陣が現れ、俺とエルは離ればなれになってしまうのだった。

## 第33話 予選 sideエル

魔法陣が収まると、隣にいた筈のゲインの姿がなくなっていた。

「どうやら散り散りになってしまったようだ。ゲインなら心配せずとも大丈夫だろう。問題は私自身だ。目的を達成する為に、なんとしても勝たなければいけない。」

辺りを見回すとここは市場のようだ。果物やお肉を売っている屋台が並んでおり、屋台の主人や一般人は道の端で観戦している。声は聞こえないが、私に手を振ってくれている人達が何人か確認できる。壁や建築物を見ると膜の様なものがうっすらと張り付いている様に見える。この膜が被害を未然に防ぐ為の魔障防壁みたいだ。

私が10年位前にお試して魔術大会に出場した時は、安全対策などなかった為、少し新鮮な気分になった。対戦相手の姿は見えない。『いないのか?』そう思った矢先、後ろから不気味な笑い声が複数聞こえた。

「ヒヒツ、おやおやあ? どうやら、僕は大変運が良いらしい。こんなところで、学友でライバルのエルメンテさんに逢えるなんて」

私は声のした方へ振り向くと、数人の男達が立っていた。誰だったか? なんとなく見覚えがある様な気がしなくてもない。私の名を呼んだ男は黄色い目に少しくすんだ

ブラウンの髪色で、片方の前髪が異様に伸びた優男だ。優男の後ろには取り巻きであるう、筋骨隆々の男達が虚ろな眼をしながら突っ立っている。優男はニヤつきながら、指でクルクルとその伸びた髪を弄り倒している。魔術学校で一緒になった人だろうか？

私は当時、図書館に引きこもっていたので学友など作った記憶はない。だが、相手は私の事を知ってる様だ。一応聞いてみる事にした。

「ごめん。誰だ……っけ？」

「ぼ、僕を忘れたと？ 魔術学校のランキングで順位を争ったこの僕！ テイメリントを忘れたと言うのか！ 君のせいで万年2位だった。ライバルのこの僕を!」

「ライ……バル？ 私に……ライバルなん……ていない」

私がそう言うのと口をテイメリントは口を耳に届くのではないか？ という程歪め馬鹿笑いしだした。

「ヒヒツ……ヒヒヒヒアハヒヒヒ！ 殺す殺す殺す殺す！ 絶対に殺す！ 僕をコケにした奴は全員死刑だ！ 杖も持っていないお前などすぐにあの世行きだ！ やれ！

お前達！ エルメンテを殺せ！」

テイメリントが言い放つと、後ろに控えていた4人が一斉に私に襲いかかってきた。

4人ともどうやら剣士の様だ。剣士達の斬撃が私に迫るが、ゲインと比べると凄まじくすつとろい攻撃だ。私は無詠唱でエアリアル・ダイブを詠唱し2メートル程距離をと

る。よく見ると剣士達の動きがおかしい事に気づく。統率が全く取れておらず、剣を引きずりながら近づいてくる。

「な、何!? 何故杖もなしに魔法が使える!? それにその魔法はなんだ!」

「精神操作……系の魔法で操ってい……る?」

「この僕が話かけているんだぞ!! 質問に答えろ!」

「グラビティ・スタンプ」

私は喚き散らしているティメリントを無視し、迫ってきている剣士達に向かってグラビティ・スタンプを放つ。すると、剣士達は一瞬で顔面を地面に叩きつけられ、そのまま動かなくなつた。

「そんな馬鹿な! 4人を一斉に!? しかもたった一撃で!」

私はゆつくりと歩きながら、ティメリントとの距離を詰める。

「ひいひい! た、助けて! じ、実はあの剣士達に脅されてたんだ!」

「嘘……だね。あの剣士達は何ら……かの精神操作系の魔法を受けてた!」

「さささ、流石、エルメンテ様! おみそれしました! ど、どうでしょう? い、今からでも僕とチームを組まないか? 貴女の強力無比な魔法と僕の精神魔法があれば――」

その言葉を聞き、私の中で怒りの炎が燃えがった。瞬間的に無詠唱でAEWを発動さ

せ、炎の剣を掴み左腕を斬り落す。

「ぎやあああああ?!?! 僕の、僕の左腕がああああああ!!」

ティメリントは叫びを上げながら、地面をのたうち回る。斬りつけた傷口が焼け焦げているからだ。その為の出血はないが、地獄の様な激痛に襲われている様だ。

「あの剣士……達の分と、あ……あなたのワツペンを渡して。さも……と本当に殺す」  
「……だずげで、ごろぎさないで」

上から下から液体を漏らしながら命乞いをするティメリント。

「ハア……、ワツペン！ 早く！」

「びいゝゝ!!」

ティメリントは右のポツケから5つのワツペンを落とし、私がそれを拾うと情けない叫び声を上げながら、切り落とした左手を持って逃げていった。

「何……だったんだろ……あれ」

私は、5つのワツペンを拾い集めローブの中へしまおうと、ゲインを探す為歩きだした。

# 第34話 予選 sideゲイン & amp ; ちよつとだけエル

「ワツペンを寄越せーい！」

俺は逃げ惑う参加者達を追い詰めながら、せっせとワツペンの回収作業をしていた。今、49枚目の獲物を壁に追い詰めたところだ。

「ば、化けモンだ！ どんなに魔法撃ち込んでも傷ひとつ付かねえどころか、怯みもしないでー！」

「化けモンとは失礼な奴だな。俺は大会で優勝する為の下地を作ってるだけだ」

「こんな化けモンがいるなら、最初から参加しなかった！ クツソ！ 苦労してルギムに入国したつてのに！」

「はい、お疲れ」

俺は男の下顎にデコピンをかますと、男は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

「ま、5年後また挑戦するんだな」

俺は男からワツペンを頂戴する。

「アルテミス、現在残っている冒険者の分布を作ってくれ」

「わかったわ。ちょっと待ってくれるかしら」

10分程経ち、冒険者達の分布が完成した。赤い斑点がそこかしこに表示される。

「まだこんなにいるのかよ、はあく面倒くせえマジで。＼あいつら＼に頼むとするか」

俺は右の太ももの辺りを叩く。すると、太ももがパツクリと割れ中からホルダーが出てくる。中には、色とりどりの小さな歯車が入っている。俺はホルダーの口を開けると、紫と青の歯車を取り出し近くへ放り投げる。

「マシン・ギア蒼穹そうきゆう& amp; マシン・ギア紫炎龍じいんりゆうウェイクアップ」

俺がそう言うのと歯車が次々と分裂しだし、あつという間に人型ロボットへと変態した。

マシン・ギアはロボットののみが使う事が出来る最小6メートルから最大90メートル程の即席お供ロボットであり、簡単な命令を下す事で、何かを集めたり戦闘のサポートをさせるにはお誂え向きののだ。蒼穹はバイクへ、紫炎龍は戦闘機へ変形する事が出来る。乗ることも勿論可能である。紫炎龍は紫のカラーリング蒼穹は青いカラーリングのマシン・ギアであり、この2機は機動力に優れているのが特徴だ。

「マスタートーン命令を」

「……」

「2つある。俺のローブに付いているワツペンが見えるか？ これと同じ者をしてる奴

等がそこら中にいる。お前等2機で俺の元にとってこい。爆発物とレーザー系の武器の使用を禁ずる。抵抗されたら物理で殴れ。半殺しまでなら許可する。あと、一般人に手を出すなよ。んで、もう一つの命令だが、俺と同じ色をしたワツペンを持つエルメンテって名前の少女がこの街の何処かにいる。見つけたら俺の元へ運べ。以上だ」

「任務了解。状況開始」

「……」

そう言つて紫炎龍と蒼穹は戦闘機とバイクに変型し、俺の元から去つていった。

ちなみに喋つてた方が紫炎龍で、無口な方が蒼穹である。変形する時に蒼穹には何か景気のいい掛け声みたいなの欲しいなと常々思つているが、現実是非情である。

「はあくあ。楽ちんでいいわあ」

3時間後……。

「良いねえ良いねえ、紫炎龍！ グツジヨブ！」

「引き続き行いますか？」

「いや、一時待機しろ」

「了解しました」

紫炎龍の働きにより、350個程集まっていた。

「蒼穹が来てないな。どこでまで行つてるんだ？」





私は未だにゲインを見つけれないでいた。ふと私は気付く、周りが静か過ぎ事に。これはどういう事だろう？ さつきまで参加者の声が聞こえていたのに、一切何の音も聞こえないのだ。私は用心の為にAEWを発動させたまま歩く事にした。

「……AEW」

暫く歩いていると横の道から爆発音様なものが聞こえ、私は大鎌を構えながら音のした方へ恐る恐る近づく。見ると、見たこともない青い鉄の固まりが尻尾の穴から煙を出しながらゆっくりと移動していた。私はその見慣れぬモンスターに向かって大鎌を振り上げると、急にぐるりと回りこちらを向き喋りだした。

「対象者ヲ発見。第一任務ヲ破棄。第二任務遂行へ移行。エルメンテ様デスネ。マスタノ使イノモノデス。私ノ名ハ蒼穹。乗ツテ下サイ」

「マ……スター？ ゲイ……ンの事？ 乗れってどこ……に？」

「跨ガツテクダサイ。ソシテ、黒イ取ツ手ヲシツカリ掴ンデ下サイ」

私は蒼穹というこの鉄で出来た何かの言う通りに跨いで黒い棒の様なものを掴むと、私の体を眩い青い光が囲む。目を開けると丸い変な被り物をしていた。いつの間にか

服装も変わっている。

「スキヤン開始。エルメンテサマ専用ノ、ライダースーツヘルメットヲ作成完了。姿勢ヲ低クシテ下サイ」

「(´・`)(´・`)(´・`)?」

「ハイ。デハ、シートベルトヲ付ケサセテ頂キマス。」

私の身体に黒い帯の様なものゝ巻き付き、蒼穹は動き出した。凄まじいスピードで。

「ぎゃあああああああ!!!」

## 第35話 予選終了

しばらく紫炎龍と共に突っ立って待つていると、土煙を立てながら蒼穹がこちらへ近づいてくるのが見えた。どうやらエルの回収に成功したようだ。シートベルトでガツチリと席に固定されたエルが見える。

「お疲れエル、無事でなによりだ。蒼穹もご苦労さん」

「……」

蒼穹がシートベルトを緩める。エルが席から飛び降りヘルメットを脱ぎ捨てたかと思うと、おもいつきりリバースした。

「うええええええええええ」

「乗り物苦手なタイプだったか」

「恐らく蒼穹のスピードに、エルメンテ様の三半規管が耐えられなかったものと推測します」

「申し訳ゴザイマセン」

「ま、まあ仕方ないな。2機共ご苦労だった戻っていいぞ」

俺がそう言うと2機は小さな歯車に戻り、俺は歯車をホルダーへと戻す。ちなみに歯

車に戻った時点で、エルのヘルメットとライダースーツは消滅している。

俺はクリーンを起動させエルの口元とローブ、それにぶちまけた吐瀉物を綺麗にする。

「いやあ、災難だったな。蒼穹に悪気はないんだ許してやってくれ」

エルは俺を睨むとズンズンと近づき、俺の両腕をガツ！と掴んできた。

「悪かった！ ゆっくりでいいとか焦らなくていい節を伝えるの忘れてたんだ！ お姉さん許して！」

「さつき……のすごく楽しか……ったからもう一回乗らして！」

「ええ……」

どうやら蒼穹はエルの新しい扉を開いてしまったようだった。

「いや流石に、それはちよつと」

「残念」

「また乗らせてやるからそうしよげるな」

「約束……してね」

「おう、いいぞ」

「や——」

「あら？ やっぱりその下品な髪の色、エルじゃない」

不意に声をかけられ、俺は声のした方へ向く。すると、エルよりもだいぶ背が高く、金色に輝く髪にロングのストレートがよく似合う胸の大きな女性が立っていた。

俺はこの人が最初誰だかわからなかった。しかしエルの目を見開いた顔を見て思い出した、俺がサイコメトリーで見た女の子、その片割れであると。

エルと比較しても全然似てない。ああ、母親が違うんだったか。スタイルも全く違う。別にどうと言う事ではないが、エルの低身長っぷりからどうしても比較してしまうな。

「アイーナお姉様……」

「貴女がこの街に戻っていたなんて知らなかったわ。こんな所で何をやっているの？まさか魔術大会に参加しているの？ 優勝出来ると——いえ、私達に勝てるだけでも？」

やめときなさい、貴女じゃ無理よ」

「……」

まずい。今のエルは完全にアイーナに吞まれてしまっている。

「やりもせず何故そんな事がわかるんだ？ それに今お前は一人だぞ？ ここでお前を倒すことだって出来る」

「貴方は？」

「俺はエルの仲間兼師匠だ」

アイーナは俺をジロジロと見始めた

「センスのかけらもない姿ね。貴方騎士なの？ 魔術師なの？ こんな変なのに師事してる時点でエル、貴女の底が見えるわね」

「黙って聞いてりゃ好き放題言いやがってこの雌が！ いいかよく聞け？ ゲイン様とエルちゃんがいればお前なんぞ一瞬であの世行きだぞ」

「なんて下品な。それに残念だけどこで私を攻撃したって無駄よ？ ワツペンの効果で私は一般人と同じ扱いになってるの。私を倒したければ決勝まで来ることね。大会二連覇中の私達姉妹の恐ろしさ思い知らせてあげるわ。そろそろお昼だから予選終わるわね、精々頑張りなさい」

そう言つてアイーナは去つていった。

「ふくん、エルの姉たちが前回の優勝者なんだな——つて、アルテミス急に喋るなよビビったぞ」

「だつてえん！ あの雌なんかうざいんだもくん！ それにあたしの事センスないつて言つたのよ？ このハイパー・ウルトラ・デラックス・ギャラクティカ・アルティメット・プリティ&ダイナミックな外格をよ！」

「そ、そうだね。エル大丈夫か？」

「うん。少し……びっくりしただけ」

エルの心配をした次の瞬間、頭のなかに声が響いた。

《タイムアップ!! 12時丁度現時刻をもつて、予選を終了とさせていただきまーす!! なお、集計は冒険者ギルドにて行われまーす! 出来るだけお早めにお越しくだ

さーい!》

「だってよ。アーサー探してリーメルの喫茶店で昼飯食いにいこう」

「うん」

こうして俺達の予選は終わりを告げたのだった。

## 第36話 俺、二つ名を付けられる

アーサーはすぐに見つかった。リーメルの喫茶店へ行くところ人カウンターでコーヒーを飲んでいたので。アーサーの姿を俺は確認し隣の席へと座り、エルも俺の隣の席へ着席する。

「あー！ お師匠様！ エルさん！ お疲れ様です！」

「おう、お疲れさん。あー！ 店員さんコーヒー頂戴、ブラックね」

「お……つかれ。私……もコーヒー、ミルクと砂糖お願い」

「畏まりました。少々、お待ちください」

男性店員は奥に消えていき、入れ違いでリーメルがこちらへ近づいてきた。

「見てたわよく。あんたやり過ぎよ？ 逃げ惑う参加者にドロップキックかまして、倒

れたところを馬のりになって無理やりワッペンむしり取るなんて」

「だって、そっちの方が手っ取り早いじゃん？」

「一般人も見てるのよ？ あんた子供達になんて呼ばれてるか知ってる？」

「えー！ 二つ名みたいなもんがあるのか？ 聞かして聞かして」

「……その名も『妖怪ワッペンむしり』よ」



「ブ……フオ！」

「の、喉がー！ 水！ 水下さい！」

リーメルが俺の二つ名を言った途端、エルが吹き出し肩を震わせながら笑いはじめ、アーサーは熱々のコーヒーが器官に入ったのか悲惨な事になっている。

「——納得いかーん！ なんだその身も蓋もない変なあだ名は！」

「貴方の傍若無人っぷりを見ていた子供たちが付けた二つ名よ。良かったわね貴方子供に大人気よ。ところで話変わるんだけど、どの位のワツペン手に入れたの？」

「私は5つく……らい」

「凄いいじゃない！ 上出来よ！ あんたは？」

「399枚」

後ろからカシャーンという音が聞こえた。どうやら客がフォークを落とした様だつた。

「ごめん、耳が腐つたみたい。もう一度言ってもらえる？」

俺はわざとゆっくり大きめの声で、リーメルに向かって喋る。

「さんびやくきゆうじゆうきゆうまい」

俺はワツペンの入った大きめの袋をカウンター置く。

「集め過ぎよ！ あんた馬鹿じゃないの!？」

「何か問題でも?」

「問題ってあん——」

リーメルが何か言おうとした瞬間、何か引きずられる様な音が聞こえ、俺は後ろに振り向く。見ると喫茶店にいた冒険者風の男女全員が席を立っていた。

冒険者風の男がリーメルに近づくとこう言った。

「コーヒー美味しかったよ……ありがとう。変なローブの兄ちゃん、俺の分まで頑張ってくれ」

「あ……ああ、ありがとう」

俺がそういうと、次々と冒険者達が立ち上がり店を出ていった。皆一直線に冒険者ギルドへと向かっていった様だった。

「そんな……稼ぎ時なのに」

「何だ今のは?」

「あんたねえ! ほんとにわかんないの!? 諦めたのよ! 彼等は! ギルドにワツペンを返しに行ったの!」

「ふーん、大会参加者が減ったわけか。どうなるんだ?」

「あたしが知るわけないでしょ!?!」

「まあ、良いじゃん。コーヒーおかわり」

コーヒーのおかわりを要求しようとしたその時、突然頭の中に声が響いた。

《選手のお呼び出しです！ チームパープルえー、紫のワツペンを付けているゲイン様とエル様は至急冒険者ギルドへおいでくださいー！》

「なんかギルドから呼び出しくらったんだけど？」

「当たり前よ、明らかにやり過ぎだもん。まあ、精々叱られてくるのね。もしかしたら、失格もあり得るかも」

「まじですかあ？ やばいやん、とりあえず金払っとくわ」

「まいど。ほんと馬鹿なんだから」

「あ！ 僕も一緒に行きます！」

俺達は料金を払いリーメルの喫茶店を出る

「失……格？」

「いや、まだわからんぞ。とにかくギルドへ行こう」

俺達3人は足早に冒険者ギルドへと向かうのだった。

## 第37話 俺、ルギームのギルド長とお話する

俺達はギルドの前まで来ていた。

「鬼と出るか蛇と出るか。入るぞ」

「うん」

俺はギルドのドアノブを回し、中へと入っていく。まだ休憩時間のためか、ギルド内は閑散としていた。しかし冒険者がいない訳ではない。俺とエルを見ると目を反らし、パーティ内で俺達に対する噂話でもしているのか、ヒソヒソとなにやら会話をしている様だった。俺はシェイという名の見知った顔の受付嬢の前まで歩いていく。

「おや？ おはようございます。お噂はかねがね。大変頑張っておられるようですね」

シェイさんはかなり無表情な女性だ。怒ってるのか、笑ってるのか、悲しんでいるのか、表情で窺い知る事ができない。

「その噂つての聞いてみても？」

「勿論でございます。どんなに攻撃しようが罫をはろうが一切を無視し、ワツペンをむしり取っていく事から付いた二つ名は妖怪ワツペンむしり。エル様の二つ名は——」

「ちよっと待って。エルにも二つ名があるんですか？」

「左様にございます。エル様に付けられた二つ名は『死角なき魔術師』ですね」

「なんでエルはそんな格好いい二つ名で、俺は妖怪ワッペンむしりなんだ……」

シェイさんが左手をゆっくり伸ばす。

「左をご覧下さい。雑貨屋が見えますでしょうか？」

「え？ うん、子供達がお菓子に群がってんな」

「では、その雑貨屋の隣をご覧下さい。何が見えますか？」

「何だありや？ 映画でもやってたのか？」

雑貨屋の隣は大きなホールの様になっていて、巨大なスクリーンの様なものが見える。

「映画ではございません。あのスクリーンで大会参加者の戦闘を見る事が出来るのです。参加者のワッペンの色をスクリーン横にある水晶に念れば、ワッペンと同じ色のチームの戦闘を見る事が可能なのです」

「ま、まさか……それじゃあ——」

「チームパープルの戦闘は大人子供垣根なく大人気の様でした。ゲイン様が鋼鉄のゴレムを2体召喚した時は、流石の私も驚きました。ゲイン様に戦闘は子供に。エル様の戦闘は大人に人気がございましたね」

俺の二つ名がどうやって広まったのか、嫌でも理解出来てしまった俺は脱力した。

「ソツスカ、コウエイデス。ホンダイニウツツテモラツテイイスカ？」

「そうですね。ギルド長が呼びです。こちらから奥へとお進み下さい。私が案内させて頂きます」

シエイさんがカウンター横へと移動し、小さな扉をロックを解除するとカウンター内へ入れる様になる。見るとカウンターの奥は、長い廊下へと繋がってる様だ。幾つもの扉が左右均等に配置されているのがわかる。

「付いてきて下さい」

俺とエルはシエイさんの後続き、カウンターの中へ入り長い廊下を歩く。そして最も奥にある扉へとたどり着く。

「こちらがギルド長の部屋となっております。では」

俺達を残してシエイさんはカウンターへと戻っていくのだった。

俺はドアに手を掛けるとゆっくりノブを回しドアを開ける。

「失礼します。チームパープルのゲインですが呼び出しの件で来ました」

バサバサと何かが落ちる音がした。目の前は本がこれでもかというくらい、そこら中に積んである。そんな本だらけの室内から女性の声が響き渡る。

「ごめんなさい。今ちよつと手が話せないの。そこで待つてて？」

言う通りに待つ事3分後、埃にまみれながら紫のローブにとんがり帽子を付けた青い

髪の魔術師が姿を表した。

「ゲホゲホッ!! どうもこんにちは。ルギームのギルド長やってるキシルムよ。妖怪ワツペンむしりさんに、死角なき魔術師さんのお二人ね?」

「あ、ああ。できればその二つ名やめてくれ」

「せっかく子供達が付けてくれた二つ名よ? 光栄に思いなさいな。楽しんでる証拠よ」

「話つてのは何だ? 俺達は失格か?」

「失格なんてとんでもない! 私は長い事ここでギルド長やってるけど、こんなに皆が楽しんで大会を見物してると感じたのは久々だわ。私も大笑いさせて貰ったし。貴方がどンドン参加者のワツペンを強奪していくから、もうほぼ参加者居なくなっちゃったの。大会継続出来ないくらいにね。エルさんも凄いわ! AEWを完璧に使いこなすなんて!」

リーメルの言う通りやり過ぎだった様だ。

俺は素直に謝ることにした。

「申し訳ない。やり過ぎたようで」

「諦めるのも手のひとつよ。どうせ5年後また出れば良いだけの話だし。で、貴方達に今後についてなんだけど、次で決勝に挑んで貰うわ。チームブルー極東の国の出身者み

たいね。どうやってか知らないけど貴方の魔の手から逃れつつ、ワツペンを集め続けた  
猛者チームよ」

「へえ、いや待て。俺の魔の手からって何だ」

「決勝戦は2日後ルギームにある闘技場で行うわ。勝った方が大会連覇中の『ジエミニ  
スターライト』に挑戦権が与えられる。もし、これにも勝つ事が出来たら、何でもひと  
っだけ願いが叶えられるわ。頑張ってね」

「あ、そう。わかったよ」

「話はこれで全部よ。何か聞きたい事ある？」

「長い事ギルド長やってるっていう割には若く見えるんだが、あんた歳幾つなんだ？」

ギルド長の見た目はどう見ても20代後半のお姉さんにしか見えない。不自然な点  
と云えば、歳の割に少し化粧が濃い位だろうか？

「フフツ、乙女の秘密よ」

「あつ……もういいわかった」

「そう、じゃゆつくり出ていってね。本が崩れるかもしれないから」

俺達はゆつくりギルド長の部屋から退室した。



## 第38話 決勝戦開始

ギルド長と会話してから2日がたった。今日は闘技場で決勝戦が行われる日だ。俺達にはすっかりお馴染みとなった、リーメルの喫茶店で朝食を摂ろうとカウンターに座っていた。

「あ、リーメルいつもの頂戴」

「いつものって何よ？ 私も一応は魔術師だけど、サイコメトリーなんて高度なスキル持っていないんだからね？ 具体的に言ってる」

「浪漫のわからん奴だな」

「あのねえ……ここは喫茶店でバーじゃないのよ？」

「冗談だよ。パンケーキとコーヒ。エルとアーサーの分も頼む」

「ええ、わかったわ。貴方はブラック、アーサーはミルクで、エルは砂糖とミルクね」

「んだよ、わかってんじゃん」

俺が文句を言うと、一瞬舌をピロツと出してリーメルはカウンター奥へ足早に消えていった。

「エルちよつと聞きたいんだが、決勝は何時から始まるんだ？」

「お昼前……位に闘技場へ行……けば大丈夫」

「ふーん、じゃ朝飯喰つたらそのまま行こう。道案内頼むぞ」

「うん」

暫くして朝食が来た為、朝食を摂りちやつちやと料金を払い店を出る。

「じゃ、行くか。アーサーは応援よろしく！」

「勿論です！ お師匠様！ 頑張つて下さい！」

俺達はアーサーと別れ、闘技場を目指し歩き始めた。

エルの後ろに付いて歩き、10分程度過ぎた頃それらしき建築物の前に俺は立っていた。見ると然程大きくないが立派な闘技場だ。俺はホームのコロッセオを思い浮かべる。比較対象がキチ○イ地味ている為に、どうしてもしよぼく見えてしまう。

「こつち……が入り口」

俺は引き続きエルに付いて行き、闘技場内へと歩を進める。内部は人でごった返していた。

「うわあ、すげえ人だからが出来てんな」

「あ！ 妖怪ワツペンむしりだ！」

俺の声に反応したのか、2人の子供達が俺の元にやってきた。

「兄ちゃん！ 応援してるからさ、頑張つてね！」

「妖怪ワツペンむしり！ 俺にあのゴーレムくれよ！」

「ゴーレム？ マシン・ギアの事か？ ありや、俺しか扱えないからダメだ。応援ありがとうな」

俺は両手のガントレットを解除し、子供達の頭をガシガシとくちやくちやに撫でる。撫で終わると再びガントレットを装着する。

「すつげえ！ 兄ちゃんのガントレットがひとりでに消えてまた現れた！」

「妖怪ワツペンむしり頑張つてね！」

子供達は俺を激励すると、嵐のように走り去っていった。

「元気だなあ〜」

「ゲイン手続き……済ませた。選手の入り口あっち……だつて」

「すまん、ありがとう」

俺はエルが指差した方向へと歩いていき、選手控え室へと入る。中は狭く椅子と小さなテーブルがあるだけだ。俺は椅子に座り呼ばれるのを待つ。そうして待つ事10分後、闘技場の職員に呼ばれそのまま付いていく。

「闘技場にはどうやって上がるんだ？」

「こちらの昇降機で上がって頂くだけで結構です」

職員が横のレバーを押し上げると、足元に魔法陣が現れ、身体が上へと上がっていき

俺達は闘技場のバトルフィールドへ駆り出された。相手側はまだ来ていない様だ。と思つた瞬間、聞き覚えのある声<sup>こゝろ</sup>が闘技場全体に響く。

「さあ、やってまいりました！ 決勝戦！ 今回の決勝出場者である、チームパープルのゲイン選手はなんと前代未聞の399枚のワツペンを集めた猛者中の猛者でありまーす！ そのおかげで、第一予選が終わつたと思つたらまさかの決勝！ 私も長い事実況をやらせて頂いておりますが、いきなり決勝戦は流石に初めての事でありまーす！ 実況は引き続き、私バレインが務めさせて頂きまーす！ そしてそして！ 解説を担当して頂くは大賢者様です！」

俺は会場を見渡し、大賢者を探すが人が多すぎて見つける事が出来ない。しかし、そんな事は想定内だった。俺は簡単な敬礼をすると、すぐにやめもう一度敬礼する。これはハガセンにおいて所謂<sup>いわゆる</sup>「ナメプ」のサインであり、非常に嫌われる行動の一種だ。ハガセンプレイヤーでこの事を知らないのは初心者だけである。効果はすぐに現れた。闘技場の最上上の閲覧席に白いローブを着た人が徐ろ<sup>おもむ</sup>に立ち上がったからだ。

「見つけたぞ。大賢者様だ。アルテミス、あの白いローブを着た奴の顔を確認したい。視認能力の倍率を上げてくれ」

「了解よ」

白いローブの人間の驚いている顔を見て俺は確信する。まず、あまりにも整っている

顔立ちだ。中性的過ぎて男なのか女なのかわからない。そして手に持っている虹色に輝く女神が象られた杖、あれは「ゴッドオブスタッフ」という杖であり、魔術師に於ける最強装備の1つだからだ。あの杖のスキルはリザレクションという死者を蘇らせる効果を持つ。ハガセンでは基本的に死者を救う方法はないに等しいが、2つだけ方法がある。まず1つ目は超希少アイテムであるハイエリクサーを使う事。そして2つ目がゴッドオブスタッフに付属されているスキルであるリザレクションを発動させる事である。

「お、相当狼狽えてんな。それにあの無駄に派手な杖はゴッドオブスタッフだ。間違いない。あのイケメン美女大賢者様はハガセンプレイヤーだ」

「大賢者様が……何?」

「いや、何でもない。」

俺がエルの質問をはぐらかすと、向かいから2人の人間が現れた。俺はその格好に見覚えがあった。一体は白と黒もう一体は赤1色の忍装束に身を包んでいたからだ。

「おいおい、マジか。ありや侍のアナザージョブ忍者じゃねーか。しかも片割れは零影か? あいつもハガセンプレイヤーなのか? 不味いな、本気を出さざるを得ないかもしれん。アナザージョブはいないと思っていたが、それでもないらしいな。全くなんなんだこの世界は」

「強い……の?」

「少なくとも白と黒の奴はヤバイな。エルが挑んだら……たぶん一瞬であの世行きだ。お前は赤いのを頼む。」

「白いの……私のユニークスキル……効かない。赤いの……はわかる」

「そういや、そんなスキルあったな。便利で良いな」

俺が呑気な会話を展開していると実況が喋り出した。

「さあ! 両者も揃い踏み! ではあ、第197回魔術大会決勝戦! 開始ーッ!!」

## 第39話 俺、vs零影

試合開始の合図と同時に、俺は瞬歩を使い零影の後ろへ瞬時に移動し、零影の首をネックブリーカーの様な体勢で掴む。

「試合中で悪いが、どうしてもあんたに聞きたいことがある！」

「ホホッ！ 面白い。聞いてやらんでもないぞ」

「あんた！ ハガセンプレイヤーか！」

「面妖な。お主が何を言っておるのかさっぱりじゃ」

「何ッ!? じゃ、じゃああんたは!? どうやって零影に!? いや、どうやって忍者になっ

た!?!」

俺の予想と反し、目の前の忍者はハガセンプレイヤーではなかった。という事はこの世界にアナザージョブを教える人物もしくは、何かがあるとそう思った刹那、零影の首が180度回転し俺を睨み付ける。

「誠、見事なり。俺の後を獲った。それは賞賛に値する。俺に勝てたら教えてやろう」

「な——」

俺は動転し、束縛を緩めてしまう。すると、見る見るうちに零影の姿形は水と化し、地

面へ吸い込まれていった。

「本体は一体何処だ!？」

俺が本体を探していると、突然地中から零影の手飛び出し、足を掴まれ見動き取れなくなる。

「クツソ！ 地中か!」

「残念。上じゃよ」

俺が上を見上げると、ありとあらゆる暗器が俺の目の前に迫っていた。俺はガード体勢に入り、全て受けきる。

「ほお、儂の暗器を全て受けて傷一つ付かぬとは。しかし、これはどうじゃ？ 擬態爆破の術!」

俺の足元に散らばった全ての暗器が紅く発光し、大爆発を起こした。その影響を俺は諸に受け空中へ投げ出されると、零影が急降下し俺にピツタリとくつつ付き、胴体を背後から抱きかかえて拘束し、逆さまに落下して俺は脳天を地面に叩きつられた。

「ふう、しんどいわ。儂の必殺飯綱落としじゃ。擬態爆破の術で全身をズタボロにし、首の骨と脳天を一拳に破壊したのじゃ。もう生きておるまい。儂のか——」

「あゝ、いってえ。この世界に来て初めてのダメージだわ。びっくりした」

俺は首をさすりながら、おもむ徐ろに立ち上がる。



「何故ツ!? お主何者じゃ!? この技を食らうてきている者など、おる筈がない!」

「何者つて、ただの勇者の従者だけど? いや、俺さあ忍者つてどうもスキル構成が好きじゃなくつて、全部スキル習得し終わつてないんだよね。飯綱落としてっていうの?」

めつちや格好いいじゃん! 最後まで習得しときや良かったな」

「化物が! 良かろう! 俺の最大最強の術を持つて貴様を葬つてくれる!」

零影が俺から距離を取ると、人の形をした紙ペらを取り出し空中へ放ると大声で叫びました。

「いでよ! 餓者<sup>がしゃどくろ</sup>餓體!」

紙ペらが禍々しい紫の炎で包まれ、上半身だけの巨大な骸骨が姿を現す。

「餓者餓體! 奴を叩き潰せ!」

20メートル程あるだろうか? 巨大な骸骨が腕を振りかぶり俺を殴りつけてきた。流石、零影の切り札だ。凄まじいスピードでラッシュを仕掛けてくる。

「ええい! うつとおしい!」

俺は餓者餓體の左手を砕こうと殴りつけた——筈だった。鉄拳を見舞った瞬間、俺の右手が空を切った。見ると餓者餓體の左手が透けていたのだ。

「驚いたか! 俺の餓者餓體は幽体と実体を自由に切り替えて攻撃できるのじゃ! こ

のまま御主を一方的になぶり殺してくれるわ！」

「幽体と実体を切り替え出来る？ ふーん、あっそう」

「な、何じゃその反応は？」

「ちよつと爺さん悪いんだけどさ。実験に付き合ってもらおうぞ」

「実験……じゃと？」

俺は背中中のブーストを起動させ3メートル程上空へ飛び上がる。インベントリから黒い瘴気の様なものを纏った弓を取り出す。

「さあ、【魔弓屍鬼<sup>まきゆうしき</sup>】のあれがどう出るか」

魔弓屍鬼を引き、自動的に緑色の毒々しい矢が生成された事を確認すると、餓者髑髏に向かって放つ。

「愚かな！ 霊体になってしまえば弓矢なんぞ——何!? どういう事だ!？」

矢が霊体状態の餓者髑髏に命中し醜悪なグルルへと姿を変え、もがき苦しみ始た。

「儂の餓者髑髏に一体何をした!？」

「魔弓屍鬼つてネタ武器があつてさ。こいつは魔弓の癖に大したパッシブスキル持っていないんだよね。こいつにはある設定があるんだけどさ。その設定つてのが矢で射つた者を問答無用で屍鬼にするって感じなんだけど、どうやらこの世界じゃ設定がそのまま生きてるみたいだな。魔剣は魔剣で魔弓は魔弓つて事か」

「あれはもう、俺の餓者髑髏ではないのか」

「どうする?」

「餓者髑髏を呼び出した時点で、もう魔力はすっからかんじゃ」

「じゃ、あれぶつ倒せば俺の勝ちで良いな?」

「好きにせい」

俺は全ブーストを起動させ30メートル程上空へ上がる。そして再びインベントリを開き今度は肉切り包丁の様な大剣を取り出す。

「おおほうちようちらせつ【大包丁 羅刹】でぶつた切つてやるぜ!」

大包丁 羅刹は形こそ肉切り包丁だが、その刃渡りは全長10メートルを越える。超巨大な大太刀である。俺はそのまま急降下し、もがき苦しむグールと骸骨の中間のモンスターとなった餓者髑髏を真つ二つに斬り伏せた。

「おし、倒したぞ? どうよ爺さん」

「全く誠面白い男よ。アヤメ! 俺等の負けじゃ! 戦闘行動をやめい!」

「そんな! じつちゃん! 私まだ負けてない!」

見ると、赤い忍装束を着た少女が上空に逃げたエルを倒そうと暗器を延々と投げ続けている。

「何だありゃ?」

「元々この大会に参加した理由は、あの小童の訓練の為よ」  
「ふうん」

「やめいと云うとるのがわからんのか！」

零影が放った鎖鎌の鎖が、アヤメと名乗った女の子をグルグル巻きにする。

「はあ、改めて云う。チームブルーは決勝戦を放棄する」

《おおーっと！ チームブルー突然の試合放棄です。これにより決勝戦勝利したのはチームパープル!! チームパープルにはエキシビジョンマッチとしてチームジエミニスターライトへ挑戦して頂きまーす!!》

会場全体から歓声が聞こえる。大賢者を見ると目を閉じながら拍手しているのが見えた。

「ふう、一時はどうなる事かと思っただが、勝って良かった」

「私、何もしてない……」

かくして、決勝戦は俺達チームパープルの勝利で幕を閉じたのである。

## 第40話 俺、忍者のルーツを知る

試合終了が実況から宣言され、闘技場にそのまま突っ立っていると足元に魔法陣が現れ、気づくと俺達は控室へと戻っていた。

「わざわざ自分の足で戻らなくて良いのか。なかなか有能じゃないか。でも、こんな所でボヤボヤしている暇じゃない」

至急、俺は零影の元へ行かなくてはならない。その為俺は控室の扉のノブに手をかけドアを引くと、待つてましたとばかりに人が雪崩のように入ってきた。

「妖怪ワツペンむしり!! エキシビジョンマッチ出場おめでとう!!」

「お、わざわざありが——うおッ!? 何だ!? あんた達は?」

「あんなのせいで無一文になっちゃった! 金返せ!」

「あ! なんかね、後ろのおじさん達は勝敗でお金を賭けてたんだって!」

俺は応援してくれた少年から出たあまりにも理不尽な言葉に憤慨する。

「なんだそりゃ! 自業自得もいとこだろうが! お前ら逆恨みも甚だしいぞ!」

「何だど!? こんちくしょう! ぶっ殺すぞ!」

「ああん? 出来るもんならやってみろオラア!」

場の空気が殺伐とし、一触即発の事態へなったその時、壁の中から見覚えのある手が生えてきたかと思えば、そこからゆっくり零影が這い出てきたのである。

「全く騒がしいのお。これお主いつまで待たせる気じゃ？ 儂になんぞ聞きたいことがあつたんじやないのか？ 幾ら待てども来やせんからこつちからでむいてやったぞ。ん？ なんじゃ？ その鳩が豆鉄砲を食ったような顔は？」

「お前どつから入つてんだよ！」

「何処つて見りやわかるじやろ。壁の中を移動してきたんじやが？」

「おじいさん……ゲインを止めて」

「はあ、仕方ないの。とつととこつちや来い！」

零影の右腕が俺の首を掴むと、そのまま俺とエルを壁の中へ引きずり込んだ。壁の中（？）は真つ暗でどうなっているのかさっぱりわからない。体感で4秒程経った頃、急に周りが明るくなつたと思えば俺達はいつの間にか零影達の控室にいた。あまりのこと  
にポーつとしていると、零影が喋り出した為俺は我に返る。

「さてと漸く話が出来るわい。で、儂がどうやって忍の者になつたかじやつたな」

「その前に聞きたい。さつきのあるやなんだ？」

「お主達をこゝまで運んだ術か？ あれは影移かげいのじゆつノ術きわみ・極きわみという影においては影に潜み移

動し、火においては火に潜み移動する。土においては土に、水においては水に、といつ

た感じにの現象と半同化しつつ移動する技、これが俺の編み出した忍術よ」

「生み出した……技……ね」

正直、あまり驚きはしなかった。この可能性も0ではないと考えていたからだ。やはり、この世界はゲームなどではなく現実なのだと言はれる。俺はこの時再び強く自覚した。

「話遮って悪かったな爺さん。本題に入ってくれ」

「うむ、我が里全域に伝うておる、ある人物についての伝記に忍の者となる方法が書かれておる。俺の故郷キョウゴクにとある青年がいたとされる。その青年はたいそう体が弱かったらしく、何かとすぐに怪我したり病気になるたり散々だったらしい。ある日のこと青年がいつもの様に病気になる、一ヶ月床につきずつと夢を見ておったらしい。巨大な魂の塊が人名を叫びながら、自分の中へ入つていくそんな奇つ怪な夢を。そしてある日、目覚めると今までがウソのように元気になる、そればかりか多種多様な忍びの術を会得していたそうじゃ。青年はこの奇妙な出来事と会得していた術全てを書き記した後、元の名を捨てその魂の叫びを自らの名とし初代零影となつたのじゃ。初代零影が残した伝記を読み解き、解説していく過程そのものこそ、忍者となる方法そのものじゃ。伝記を書き記した著者の名は——」

「不知火・散華《しらぬい さんげ》」

「お主!! 何故、初代零影の名を知つておる!!」

「ああ、知っているとも。昨日の事のように思い出せる」

シラヌイ・サンゲとはハガセンにおけるNPCの一体である。師事することで忍者系統のスキルを習得できる。中でもサンゲは最後まで師事する事で、MPの消費が半減する有能。パツブスキル「食い溜め」を習得することが出来る唯一の存在であるため忍者スキーや有能スキルが目当てのプレイヤーはこぞつてサンゲの元へ通うのだ。

あと、最後まで師事した特典として白と黒が特徴的なカラーリングの忍装束が手に入る……らしい。

「教えてくれ！ シラヌイは今も生きてるのか!?!」

「何を馬鹿な！ 初代零影が生きておったのは数千年も昔のことよ！」

「そう……か、クソ！ 大賢者に聞かなきゃならんことが増えた」

「お主は一体……何を考えておるのだ?」

「さあね、俺が聞きたい位だよ」

「おつとそうじや、我らは初代零影が遭遇したあの現象を御魂返《みたまがえ》りと読んでおる。俺も御魂返りにより零影となった身よ。先代の零影が死ぬとどうやら勝手に選出されるらしい。記憶もパツチリ受け継いでおる。おまけにたまに頭の中に声が響きおるわい」

俺は零影の台詞に目が点になった。



「そんな重要な情報をサラツと言うな！　じゃあ、爺さんが死ぬとまたどっかの誰かさんが御魂返りで零影になるっていうのか？　おまけに頭ん中にシラヌイがいんのかよ？」

「伝記にはそう書いてあったぞ。まあ忍の者は我らキヨウゴク出身者しかおらんからの探すのは容易じゃて」

「じゃあ……もし剣士や魔術師の類が御魂返りにあつたら……」

「仮に探し当てるとするならかなりキツイじゃろうて」

「……」

「で、他に聞きたいことはあるかの？」

「いや、もう十分だ。色々ありがとな爺さん」

「いやいや、儂も久々に骨のある奴と戦えて楽しかったぞ。お主どうだ？　忍の者にならぬか？　お主ならきつと良い忍の者になれるぞ？　それとアヤメを嫁にどうじゃ？」

急に話を振られてアヤメと呼ばれたくのいちは驚いたようだ。ちなみにこのアヤメというくのいちはかなり背が小さい、小柄なエルよりもちいさいのでまだ子供なんじゃないかと思う。

「ちよ!!?　じっちゃん!!?　藪《やぶ》から棒に何いつてんの!!?」

「い、いや遠慮しとくよ。聞くこと聞いたしお暇させてもらうよ。じゃあな爺さん」

「うむ、そうか。もし第三大陸の極東に来ることがあつたら、我が故郷へ来るが良い。丁重にもてなしてやるぞ」

「ああ、覚えとくよ」

余談ではあるが、俺達が控室を出たあと待ち合わせ場所を決めていなかつたせいで、アーサーを探す為に闘技場内を駆けずり回る羽目になるのだつた。

## 第41話 俺、エルの実家にお邪魔する

「うおおおおおおあああああ!!」

「フツ……やるじゃないゲイン様。私これでも結構本気なのよッ?」

決勝戦から3日程経ったが、あれから連絡らしい連絡が一向に来ない為、俺は時間を  
持て余していた。暇になり過ぎた俺は自室で外格を脱ぎ捨てアルテミスを相手に組み  
手を始めたのだが、何故か知らないうちに組手がアームレスリングへと切り替わり、机  
に両者の腕を置き人間と外格の根性を——いや、漢と漢の価値を賭けた熱い闘いへと発  
展していた。自室に置いてある机に肘を乗せ、俺はアルテミスと向かい合うと、この鋼  
鉄の強度を悠々と超える鼠色のガントレットを握り潰すのではないかというくらいに  
握り込み、グンツと力を入れアルテミスの手の甲をテーブルへ着かせようよと思いつ切  
り力を入れる。しかしそれはアルテミスも同じだ。どちらも着かず離れずの持久戦へ  
ともつれ込んだ。

「ゲイン様、確かに貴方は強いわ。頗《すご》ぶるね。でも、貴方と私達じゃ決定的に違  
う所があるわ。外格の私に勝てるわけないだろ!」

「馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前! なんだアルテミス? 俺をかまかけようつてのか?」

残念だがその手にはツ乗らんぞツ!!」

「卑怯な! 無詠唱で超感覚を使ったわね!! 上等じゃねえか!! 人が優しくしてりやつけあがりやがって!!」

「おまえはツ! ひとじゃツ! ねえだろうがツ!」

「うおおおおおおお!!」

この鬨に雌雄を決する為、互いに最大の力を振り絞ったその時、不意にドアが開かれた。ドアの方を見ながら力を振り絞っていた俺はエルと目が合い一瞬力を弱めてしまった。

「チャーンズ!!」

アルテミスが俺の手の甲をテーブルに叩きつける音が部屋に広がる。そこで俺は初めて自分が負けた事に気付いたのだった。

「クツソ! 負けたー!」

「イエーイ! アイムウイナー! ハイパー・エクセレント・ダイナマイト・ミラクル・アルテミスちゃんの勝ちよー! エルちゃんありがとうー!」

「え……? う、う……ん。どうい……たしま……して?」

エルは何故自分がお礼言われているのかさっぱりだようだ。

「どうしたんだエル? 俺なにかようか?」

「うん。——って右腕！」

エルが目を見開きながら俺の右腕をゆび指している。俺は自分の右腕を見ると完全にへし折れていた。肉と皮膚を突き破って白い骨が露出し、血が滴っている。

「うっわ！ 完全に折れとる！ アルテミスお前本気だし過ぎい！」

「いや！ ごめんなさい！ ゲイン様大丈夫？」

「エクストラヒールがあるからこんななん何でもねえよ」

俺は即座にエクストラヒールを発動させる。すると、逆再生ビデオの様に折れた腕が元に戻る。

「はい、完治。で、エルどうしたんだ？ わざわざ俺の部屋にきて」

「実家に……行こうと思……う。これを返したいの」

エルの手には大きめの黄色い宝珠が埋め込まれた杖が握られている。

「その杖見覚えがある。お前この街の出身だもんな。当然といえば当然か。仲間として親父さんに挨拶しておきたいな。俺もついて行くぞ。よし、どうせやる事もないし今すぐ行こう」

俺は自室から出てアーサーがいるであろうバーへと向かう。

「アーサー出かけるぞ」

「はい！ 何処へ向かうのですか？」

「エルの実家だ。杖を返したいんだと」

「エルさんの実家ですか!? 楽しみです」

「エルは相当なお嬢様みたいだからな。俺も楽しみだよ」

俺達3人はホームを出ると、エルの先導に従い歩き出す。市場を抜け暫く道なりに歩きた大きな広場に出た。ここがどうやらこの街の中心のようだ。商人や謎の宣教師、乞食も居れば冒険者もいる。この広場には3つの道があり、その中で唯一門番らしき兵士が立っている道をエルは進む。他の道とは違いしつかりと舗装された道を進むこと10分程経った頃、エルは大きな黒い門の前で立ち止まり、門に備え付けてある丸い取っ手を掴み門を叩く。すると取っ手の隣にある除き穴が横に開き、男性と思われる目が俺達を睨みつける。

「誰だ? ここがシユビエル家だと知って門を叩いたのか?」

「私、エルだよ。久しぶりネルロさん」

「翠色に輝く髪にその声——まさか! エルメンテお嬢様!? すぐ開けます! 少々お待ちください!」

ネルロと呼ばれた門番が驚くと門はゆっくりと開いた。

「さあさあ! エルメンテお嬢様もお仲間もお入りください!」

「じゃ、お言葉に甘えて」

「お邪魔しますー！」

ネルロを見ると中々の美丈夫だ。髪は赤毛に短髪手足の筋肉がバランス良く出来上がっている。何故か裁ちばさみを持っているが、優秀な門番なのだろうと俺は思った。

「ネルロさん、相変わらず庭イジリやってるんだね」

「そりやあそうですよ。庭師ですからね」

「えー！ 門番じゃないの!？」

「ああ。よく間違えられるんですよ。まいますねえ。ハツハツハ！ では皆さんごゆっくりどうぞー！」

そう言うとネルロさんは庭いじりに戻っていった。

「あの風格で、庭師なのか……」

「うん。屋敷は……こつち」

「どうでも良いけど、お前家族の前だと声元に戻るのな」

「皆は……私が大きな声……出せないって知らないの……心配させるといけないから無理矢理……出してやる」

「ふーん」

再びエルが先導し、屋敷の敷地内を歩く。屋敷自体は遠目に確認する事ができるがやはりかなり大きな事がわかる。敷地も大変大きく屋敷に辿り着くにはそれなりに歩か

なくてはならないようだ。

「いや、しかしかなりデカい家だな。親父さんは何をやってる人なんだ？」

「よく知……らないけど、商人……やってるって昔聞いた。私すぐに学園の図書館に引きこもったし……その後はそのまま卒業して冒険者になったから家には……帰ってないの」

「商人ね。かなり儲かっているみたいだな」

世間話を交えつつ喋っているうちに玄関前まで着いた為、エルはドアを押し屋敷内へと入った瞬間、幾人もの声が響き渡る。

「「「お帰りなさいませ。エルメンテお嬢様」」」

左右一列に並んだメイドさんや執事さん達による、一糸乱れぬお帰りなさいコールの迫力に俺は一瞬たじろぐ。

「おお！ 本当にエルメンテ！ よく帰って来てくれた！」

真ん中に立っていた茶色い服を着た若干腹の出ているおじさんがエルに抱きつく。きつと彼がエルの親父さんなのだろう。

「お父様お久しぶりです。今日はこれをお返しに来ました」

「これは……そうか。あいつの杖を持ち出したのはエルメンテだったのか。さあ立ち話もなんだ、お仲間のお二人も是非今日は泊まっていって下さい。まずは夕食をどうぞ」



「勿論、ご馳走になります。な、アーサー」

「はいー!」

そしてその晩飯をご馳走になって暫く客間でのんびりしていると、執事が俺の所へやってきた。

「なんすか?」

「ご主人様が貴方様をお呼びです」

「はいはい、行きますよ」

執事の後について行くと、道の途中に大きな2つのドレスを着た女性の肖像画が目に入った。一方はロングの金髪で泣きぼくろが似合うの女性。もう一方は翠色の前髪が若干カールしたショートカットの優しそうな笑顔の女性だ。

翠色の女性がエルのおふくろさんか……。そっくりだなあ。

執事はとある扉の前で止まった。

「こちらが旦那様の書斎となっております。——では」

そう言うのと執事はゆっくりとこの場から去っていった。

俺はドアノブを回し中へ入っていく。

「どうも。呼ばれて来ました。ゲインですが」

「よく来てくださいました。折り入ってお願いがあるのです!」

「お願い？」

「エルメンテを止めて頂きたい！ 私にとつてはエルもアイーナもイクルナも宝物なのです！ あの3人が傷付け合うなど我慢できないのです！」

「そりやあ親父さんにとつてはそうでしょうが……エルは復讐の為に今まで生きてきたようなもんだ。今更やめろと言ったところ……」

「そんな……復讐？ 何故そんな……アイーナ達とエルメンテの間に何かあったのですか？」

「な——あんた何も知らないのか？」

俺がそう言った瞬間、頭の中に例の声が響きく。

《さあーッ長らくお待ちせいたしました！ エキシビジョンマッチの準備が遂に整ったようです。試合開始は明日の8時丁度となりまーす！ ではでは！ 明日を楽しみにまつておりまーす！》

「試合開始は明日の8時丁度か。まあ、親父さん任せときなよ。何も知らんのなら、知らない方がいい事もあるだろうからな」

「え？ よ、よろしくお願いします」

俺は親父さんの書斎から出て客間に戻り、備え付けられた無駄に豪華なキングサイズベッドに入りながら明日の作戦を練るのであった。

## 第42話 俺、朝食をご馳走になる

「遂に今日はエルの姉達との試合か。上手くいくと良いんだがな。ファ〜」

俺は独り言を言いながらあくびをし、首を左右に振り骨の音を鳴らし眠気から覚醒する。ベッドから起き上がると、部屋のドアが開きメイドさんが入ってきた。

「おはようございます。ゲイン様、食事の準備が整っております。お連れしますのでこちらへどうぞ」

メイドさんに催促され、部屋を出て長く白い廊下をメイドさんの後について行き食堂へと向かう。長い廊下を突っ切り左に大きな扉が見える。メイドさんがそのドアの横で立ち止まり、俺に対し深々とお辞儀をする。

「こちらが食堂となっております。お入りください。もうエルメンテ様とアーサー様は席にお着きとなっております」

「どうも、ありがとうございます」

俺が礼を言うとメイドさんは去っていった。

扉を開けると縦長のテーブルにエルやアーサーが着席していた。俺はアーサーの隣に着席する。すると、エルの親父さんが俺に話かけてきた。

「ゲイン殿おはようございます。よくお眠りになっていたようですね」

「いや、待たせたみたいではありません。ずっと作戦を考えていたものですから」

「よろしいですよ。今日はエキシビジョンマッチ……ですからね」

親父さんの元気はないようだった。まあ、それはそうだろう。最愛の娘と闘う相手と朝食を摂るのだ。気が気でないだろう。

「大丈夫です。俺に任せておいて下さい。傷付けないとは言いませんが殺しはしません。エルの姉貴達ですからね。ちゃんと作戦も昨日夜通しで考えました」

「そ、それは良かった！ さあ、食事をしましょう！」

エルの親父さんが指を鳴らすと幾人かのメイドさんが料理を運んできた。パンにコーンスープ、それに溶けかけのバターが乗った肉にコップのような容器に入ったゆでたまごだ。パンを手にとってみると、ちゃんと現代のパンのように柔らかくいい匂いがした。パンを千切り肉と一緒に食べてみるが牛肉だろうか？ フォークで肉を突き刺すが、肉もちゃんと柔らかく少し獣臭いが中々美味しい。

「料理か……」

俺は誰にも聞こえない位小さな声でボソツと嘆く。俺は昔から料理が頗《すこぶ》る下手くそだ。レシピ通りに作っても、何故かとんでもなく辛かったり味がなかったりする。いつしか俺は料理を作ることを自分から避けるようになった。ある日ギルメント

オフ会を開く事になり、居酒屋に集まったのだが、酔った勢いでギルメンにこの話をした所何故か大ウケし、何か作ってくれという話になり後日、俺の家にて皆に俺の料理をご馳走する羽目《はめ》になった。

今でも鮮明に思い出せる。皆の為に作った料理は炒飯だ。勿論、ちゃんとレシピ通りに作った。しかし俺の炒飯は……味がしなかった。それ以降俺の作った料理はマジでクソまずいという認識がギルド内での常識となった。

意味不明かつ不名誉な記憶だがとにかくそういう事だ。

ハガセンには料理という技能がある。これは主に戦闘の補助に使用され、バフを永続的に上昇させたり状態異常の予防なんかに使われる。廃人の俺が一番最初にコンプした技能が料理だった。ハガセンの料理や調味料は多種多様だが、作り方は簡単だ。インベントリを開いたら料理のタブをタップし作りたい料理の材料を複数選択しクツキングクリエイトと言えいいだけ。それだけでハンバーガーから満漢全席まで、素材さえ尽きなれば好きなだけ作ることができる。ハガセンの中であれば俺でさえ料理人になる事が出来るのだ。尚、ロボットだけは作るとは可能だが、摂取する事が出来ないというデメリットが存在する。

### 閑話休題

俺はコーンスープを飲む為にスプーンを手にしスープを掬《すく》い口に運ぶ。

「ん？」

「ゲイン殿どうなさいました？」

「いや、少し味が薄い様な気がして」

「では、作り直すように言いましょう」

「いや、大丈夫です」

インベントリを起動させ料理のタブをタップし材料を取り出す。

「クッキンググリエイト」

クッキンググリエイトを起動させると、選択した材料がくるくると回転し光を放つ。光が収まるとコーンスープが入った皿の横に小さな小瓶が1つ置かれていた。

「おー！ 成功した。やったぜ」

俺が作ったのは黒胡椒。ただの香辛料である。コーンスープに2回程ふりかけて再びスープを啜《すす》る。

「うん！ おいしい！ やっぱ俺のクッキンググリエイトを……最高やな！」

自画自賛すると同時にカチャン！ と何かの落下音が聞こえ、そっちの方を見ると親父さんが目を見開きながら俺をガン見していた。

「い、今のは？ それは一体……」

「ハッ!？」

やってしまった。丹精込めて作ってくれた料理を勝手に潰してしまったのだ。きつと怒っているに違いない。

「すいません！ 許してください！ 何でもしますから！」

「その小瓶を買い取らせて下さい！ お願いします！」

「は？」

エルの親父さんは俺の元に小走りで近づいてきて俺の手をグツと握る。

「え？ 買い取るってこれを？」

「はい！ 失礼なのは重々承知です！ ですが、どうかお願いします！」

「作ろうと思えばいくらでも作れるんでタダで差し上げますよ。なんなら100個程作って置いていきましようか？」

「本当ですか!? 是非！ 是非お願いします！」

凄いい食い付きぶりだなく。

後々わかった事だが、この世界ローゼスでは香辛料や調味料は発展途上にあるらしくとても貴重な物らしい。

そんなこんなで朝食を終え、寝間着から各々服を着替えて俺達は闘技場へ向かうのだった。

## 第43話 俺、VSジエミニスターライト

闘技場へ付いた俺達は受付前へ歩を進める。

闘技場の受付嬢は金髪のエルフの男性だった。長い耳に幾つもイヤリングをしてい  
る。

「ようこそ！ チームパープルの皆さん！ こちらから奥に行けばすぐに試合が開始さ  
れます！ 頑張ってください！」

「あ、ありが……とう」

エルフは俺を無視し、エルにだけ握手をすると左手を広げる。

「こちらから入って奥の昇降機へ乗って下さい。では、ご武運を」

「んじゃ、アーサーは応援よろしく」

「ハイ！ 精一杯応援します！」

俺達はアーサーと別れ、奥の昇降機へと乗る。

「あのエルフ、ロリコンだな……。間違いない」

「ん？ 何か……言った？」

「いや、別に」



闘技場の昇降機がゆっくりと上昇し、バトルフィールドへ駆り出され、遂に俺達はジェミニスターライトの2人と対峙する。一方は薄ピンクのドレスアーマーを着込み、もう一方は水色のドレスアーマーを着込んでいる。上半身の甲冑は薔薇の装飾が入っており、胸の形がクッキリとわかる。スカートの部分に鋼鉄の板の様なものが張り付いているように見えるが、舞踏会にあの姿で出ても違和感を感じないだろう。まさに、良いとこのお嬢様といった感じだ。

よく見ると2人とも全く同じ顔立ちに輝かしい金髪、決定的に違うのは、片割れである水色が似付かわしくない紫色の眼帯を左目にしている事だろうか？

薄ピンクはロングストレートが風に揺れているのがわかる。水色の方はロングなのは一緒だがサイドがマカロニの様な特徴的な髪型をしている。ちなみに双方共胸の自己主張がかなり激しい。双方の甲冑は恐らく特注品だろう。特にマカロニの方は控えめに言って爆乳と言って良い。水色のドレスアーマー上部から谷間がはつきりと見えている。

「おい、エル教えてくれ。どっちがアイーナなんだ？」

「胸の谷……間が出て……ない方」

「実にわかりやすい。ありがとう。という事は、あの爆乳がイクルナだな」

俺はエルの方を尻目で見ると、コクツと相槌をうつのが見えた。目を元に戻し正面を

見るとアイーナと目が合う。そして一瞬微笑むと、スカート裾を両手で掴み、小さくお辞儀を俺に向かってしてきた。

「御機嫌よういい天気ですわね。晴れて良かった。しかし、本当にここまで来るとは思いませんでした。余程の自信があるのか、馬鹿なのか」

「お前等はギルドで皆と一緒に俺達の試合を見たりしなかったのか？」

俺の質問にアイーナは目をパチクリさる。

「必要ありませんわ。どうせ私達姉妹が勝つのですから」

「お姉様、もうお喋りはその辺で。そろそろ時間です」

聞き覚えのある声が闘技場に響きわたる。

「さあー！ やってまいりました。エキシビジョンマッチ！ 決勝戦にて極東に存在する忍者という摩訶不思議なジョブ、零影を見事打ち破った挑戦者チームパール！ 対するは前回、前々回と連覇中のチームジェミニスターライト！ 制限時間無制限エキシビジョンマッチ試合開始ッ!!」

「お姉様」

「わかっています！ イクルナ時間を稼いで下さい！」

アイーナが何やら魔力を貯め、イクルナが手を翳し魔法を放ってきた。

「ダークネス・ハウンド」

イクルナが詠唱すると魔法陣が展開され、ヘドロで出来た犬の様なモンスターが数匹召喚されエルに向かって来た為、俺は聖属性の防御魔法をエルに付属させる。

「ホーリー・プロテクション！ エル、お前は上空から支援してくれ」

「わ………かった！」

エルの周りに白く薄つすらとしたバリアを形成させる。ダーク・ハウンドがバリアに激突すると飛散し消え去ったの確認し、俺はエルに上空に行くよう指示する。そして、鑑定スキルを無詠唱で発動させ、イクルナのステータスを確認しする。

「なに……？ 私のダークネス・ハウンドを掻き消す程の防御魔法だと？」

「爆乳のお嬢さん、あんた面白い奴だなあ。お礼に俺も面白いもんを見せてやるよ。その前に、とりあえずアイーナお嬢さん何貯めてつか知らんけど、ちょっと大人しくしててもらおうか。グレイプニル」

「何!? キヤツ!？」

グレイプニルはウルガイスⅥ式のパッシブスキルだ。地中から人間の背骨のような物が数本飛び出し、アイーナはあつという間に縛られてしまった。

「よし、準備は整ったな」

俺は目を閉じて神経を尖らせ、イクルナに向かって手を翳し詠唱を開始する。

「音と空間の狭間に存在する精霊よ、我が前にその姿を表せ。絶音精霊ノイズ！」

俺が詠唱を完了させると空間に突如ガラスを叩き割ったかのような切れ目が発生し、そこから一体の精霊が徐ろおもむに現れた。

その見た目は人間の形を保っているが、全身がイカれたVHSの砂嵐の様なもので構成されており、ザーというノイズ音を鳴らしながら俺の前に立つと、ゆつくりと礼をする。

「久しぶりだな。ノイズいきなりで悪いが絶音界を発動してくれ。巻き込む範囲は俺と俺に対峙している2人だ」

『ザー！ ザ、ザザ、ザー！』

ノイズが両手を天に向ける。すると、小さな球体を自らの身体から生み出すとそれが見るみる大きくなり、俺とジェミニスターライトの双方を飲み込んでいく。

「ゲイン!!」

「悪いなエル。初めからこうするつもりだったんだ。お前姉達を殺すかもしれんからな。大丈夫、任せておけ」

驚いて急降下してくるエルを見ながら、俺とスターライトジェミニはノイズの放った砂嵐の空間に飲まれていく。

「さてと、お嬢様方、絶音界は特殊なフィールド魔法みたいなもんだ。外からは一切こち

らの姿は見えないし、一切音も聞こえない。これで堂々とお話出来るってもんだ」

俺は、グレイプニルの締め付けを強めると、アイーナを気絶させる。

「なんだ？ この……魔法は？ 何故私の魔法が発動しない！ 答えろ！」

「どうでも良いけどさあ、とてもお嬢様の口調じゃなくなってるよ？ 大丈夫？ 爆乳

の姉ちゃん。ま、もうわかってるから別に良いんだけどさ。ダークネス・ハウンドは攻

撃スキルみたいなもんだが、悪魔やら闇の眷属しか使えない筈だ。お前、悪魔だな？

何でイクルナに取り憑いてんだ？」

「チッ！ クソボディめが！」

悪魔が悪態を吐くと眼帯を脱ぎ捨て、隠れていた左目が露わになる。その目玉は全体が真っ黒であり、明らかに人間の目ではない。左目からコールタールの様なドロドロとした黒い涙を流しイクルナの足元に溜まると、そこから艶めかしい黒い下着姿の様な格好をしている悪魔が姿を現す。肌は人間と同じ様だが、頭に2つのデカい角がはえおり、眼球は金色に輝き蛇の様な目付きをしている。紫色の長い髪を弄りながら悪魔は喋りだした。

「このボディはもう使い物にならん。貴様のボディを私の新しい依り代としよう」

女性と男性が同時に喋っているかのような声を出しながら、悪魔は俺の元へ近づいてくる。

「出来るもんならやってみたら?」

俺は両手を軽く広げ挑発する。

「ほげけー!」

悪魔が叫びながら俺の身体に触れようとするが弾かれてしまい、悪魔は目を見開く。

「憑依すら不可能だ?!? あり得ぬ!」

「はい、残念でした。お前みたいな低級悪魔じゃ俺の相手になりませーん。おまけにこの絶音界はもうお前程度の力じゃ破壊はおろか、抜け出す事も不可能でーす」

「低級? 我はハイデーモンだぞー!」

「は? デーモンカイザー位になってから出直せ雑魚」

「デ……デーモンカイザー……だ……と」

ハイデーモンは悪魔の中で下から数えて3番目に位置する種族だ。レッサーデーモン、デーモン、ハイデーモンといった感じ。因みに、デーモンカイザーはデーモン種の中で1番上から2番目に属する。

「お前には聞きたい事があるからな。お前には俺の駒こまになつてもらうぞー」

「フ、フハハハハ! 愚かな! 我が貴様の駒になるだど? 出来る訳がなからうー!」

「いや、手はある。お前悪魔なんだからあんだろ? 真名まなが。悪魔は真名を知られると

知った奴には逆らえなくなるんだよな?」

それを言った途端、悪魔の顔から余裕の表情が消えた。

「に、人間の貴様が何故……我等最大の弱点を……いや！ 貴様が我の真名を知っている訳がない！」

「確かに今現在お前の真名なんぞ知らんよ。知らないなら調べればいい」「な——」

俺は絶句している悪魔を無視し、インベントリの中から人間が悲痛の叫びを上げているかの様な顔が表紙になっている、禍々しい1冊のデカイ本を取り出す。

「悪魔事典ネクロノミコン」。よく知ってるだろ？ こいつにはお前等悪魔の能力や設定は勿論、真名もゼーんぶ載ってる。ネクロマンサー御用達の1冊だ」

「——その本を寄越せえええええええ!!!」

悪魔が叫んだ瞬間、本がひとりで開き表紙の顔が喋り始めた。

『彼ノ者真名ヲ、セーレ。移動ヤ情報収集又ハ運搬ニ、長ケタ能力ヲ持チ、瞬キヲスル間ニ、世界ノ何処ヘデモ運ベルト言ワレテイル』

「セーレ、俺の言う事を聞け。俺が新しい主人だ」

セーレの動きがピタリと止まり、一呼吸置いて俺足元へ跪く。

「真名の元に、新たなる我が主の御意のままに」

「よし、お前は何故イクルナに乗り移った？」

「ハッ、情報収集の為に御座います。私の前主が情報を欲しておりました。前主は知識欲の深き者だと聞き及んでおります」

「お前の前の主は何と呼ばれていたんだ？」

「魔王と呼ばれております」

「やっば、魔王居るんか……まあそりやそうだよな。」

「わかった。次の質問だ。エルの母親を毒殺したのはお前か？ お前だった場合、何故毒殺したのか理由を言え」

「あの女は何故かはわかりませんが、私の正体に勘付いたのです。任務遂行の妨げになると思い毒殺しました。直接殺さず毒殺を選んだのは、じわじわと死んでゆく様を見たかったからであります」

「クソツ垂れな理由だ。流石、悪魔だな。エルが居なくて良かった。居たら間違いない。逆上してお前を殺していただろう」

「恐れ入ります」

「最後の質問だ。イクルナは大丈夫なのか？」

「気絶しているだけです。心配は無用です」

「よし、ではお前に命令する。この世界の神に關しての情報を集めろ。とりあえず今はそれだけだ」



「我が主の御意のままに」

「絶音界を解除すると同時に行け」

俺は再びノイズを呼び出し絶音界を解除するように言う。広がっていた砂嵐の空間に次々とヒビが入り、ガラスが砕ける様な音と共に元の空間が広がりにノイズが消え去る。それを追う様にしてセーレの姿も黄緑の炎に撒かれて散布する。

「ふう〜。終わったか」

「ゲイン!!」

俺の目の前には、目を血走らせて怒るエルの姿がそこにはあった。

俺はこの後、エルに無茶苦茶怒られた。

## 第44話 魔術大会 閉幕

エルは早歩きで俺の元へ歩いてくる。

「ゲイン！ どういう事!? 何故教えてくれなかったの!？」

「落ち着けて。お前が絶音界の中には入ってたら間違はなくあの悪魔を殺してた。今の俺には旅を続ける為に、情報が必要なんだ」

「情……報？ それにお姉様達も関係しているの？」

「あ、ああ」

直接は関係ないだろうが、あの悪魔はきつと役に立つ。それに姉妹が殺し合うなんて酷だしな。

「ゲイ……ン？」

「すまんすまん。ちよつとブーツとしてた。良いかエル、よく聞け。今はもうなんともないが、お前の姉ちゃんイクルナには悪魔が取り憑いてたんだ。お前の母親を殺したのも、その悪魔がやった事だ」

エルは絶句の表情を浮かべ、倒れている姉達を見ている。俺がエルの表情を見ながらどう声をかけようか困っていると、実況席から絶叫が聞こえてきた。

「なんと！ なんとお!? 一体どうした事か!? チームパープルのゲイン選手が放った謎のフィールド系統の魔法が砕け散ったと思えばチームジェミニスターライトのお二方が倒れております! 果たして安否は!? 無事なんでしょうか!」

実況者の妙に鼻に付く勿体ぶった喋り方に、イラツつとしつつも黙っていると暫くしてフィールドに審判だろうか? 一人の女性が現れ、ジェミニスターライトの双方へ駆け寄り心臓の辺りに手を当てるとフィールドの中心に立ち、両手で大きな丸を作る。

その瞬間、雷でも炸裂したのかという程の歓声が闘技場中に響き渡る。俺はこの時初めてジェミニスターライトの人気の高さを知った。主に男性客だが、何人かの客は泣きながら喜んでるのが見える。

「よ、がっだー! よ、がっだー!」

実況よ、お前もか。

やがて歓声が止むとジェミニスターライトは何人かの人間によって担架で運ばれていき、再び実況が大きな声で喋りだす。

「エキシビジョンを制したのはチームパープル!! 妖怪ワツペンむしりゲインそしてえ、死角なき魔術師エルメンテ!! では、僭越ながら私わたくし自らチームパープルヘインタビューしたいと思いまーすッ!」

実況席にいた男が俺達の側までワープしてくる。男の見た目は中肉中背で髪色は目

に痛いどピンク髪型は短髪で左右のもみあげが狩り上げられている。黄色のタキシードスーツの様なものを着込む、色々と派手な男がニツコリ笑いながら近づいてきた。

「はじめまして。私、バレインと申します。大変、面白い試合でございました。エキシビジョンマッチに勝ったら何でも1つだけ願いが叶えられます。あ！エキシビジョンマッチに勝ったチームは新たに王者を名乗る事も可能です。その場合5年毎に強制的に参加となっております。こちらは辞退が可能です。どうなさいますか？」

「辞退する。マイク貸してくれ」

俺はバレインからマイクを受け取り、高らかに宣言する。

「俺の願いはただ1つ！ 大賢者と話がしたい！ それだけだ！」

俺はマイクをバレインに返す。

一瞬の静寂が支配し、トマトの様な果物が俺の頭上を掠める。それを歯切りに、闘技場中を俺に対する罵詈雑言が支配する。林檎やらトマトの様な果物を直立不動で受け続け、暫くま的とになつていと遂に待ちに待った瞬間がやってきた。

「皆のもの！ 静まれ！」

白いローブを着た人物が立ち上がり声を張り上げると、騒がしかった闘技場が一瞬で物音1つしなくなつた。大賢者は白いローブを翻すと俺の目の前へワープしクリーンを俺に掛けてきた。

「大事ないか？ だいぶ汚されたようだ。悪気はないのだ許してやって欲しい」  
「別に良いさ。気にする程の事でもない」

「ふむ、ここで話すのはちよつとな。後で使いの者を寄越そう」

「今はシユビエル家にお世話になつてる」

「ああ、やり手の商人と言われている所だな。あい、わかつた。」

大賢者は俺との会話を終えると後ろを向き、大声で喋りだした。

「今回の魔術大会は近年にない波乱に満ちた大会であつた！ また5年後皆の活躍を期待する！ 最後に1つ、私は忙しい身である為、中々皆の前に姿を現す事が出来ぬ！

この者に罪はない！ その事だけは覚えて帰つて貰いたい。以上だ！」

今まで最も大きな歓声が闘技場を包んだ。

「ひえ、すつげえ人気だ。な、エル。エル？」

よく見ると彼女は突つ立たまま気絶していた。

「ハア〜」

俺は溜息を付きつつ気絶した彼女をおぶつて、エルの実家へと歩いていった。

## 第45話 エルと因縁

俺はアーサーと合流し、エルをおぶりながら、シユビエル家の門の近くまで来ていた。

「流石、お師匠様です！ 初めて参加してエキシビジョンで勝ちやうなんて！」

「中々興味深い敵だった。なんてたって——」

待てよ？ ここまで悪魔を倒さず手下にした。なんて言ったら面倒な事になりそうだな。黙っとこ。

「どの様な敵だったのですか!？」

アーサーはいつもの様に目をキラキラさせながら俺を見てくる。

「うツ……と、とても強い悪魔がエルの姉イクルナに取り憑いてたんだ」

「え!!? イクルナさんはどうなったんですか!？」

「大丈夫だ、気絶しただけで命に別状はない」

「そうですか！ 良かった。……悪魔？ あ、あれ？ そういえば！ 反応が！ 反応がない——」

アーサーは突然焦りだし狼狽えはじめた。

「どうした？ 急に?」

「そ、それが僕が元々この国をめざしていた理由は悪魔の反応があったからなんです！  
今思い出して反応見てみたら消えていたんです！」

「え……それってルゲームの悪魔の反応がって事？」

「違います！ 全部です！」

アーサーの言葉を聞き、俺の額から冷や汗がどんどん滲み出てくるが、外格のおかげで察知されなくて済むのを心の底から感謝した。

全部？ 全部ってあれオールって事？ これ確実に俺のせいじゃね？ やべえよ

……やべえよ……どうすんのこれ？

どうやって弁明しようか考えているうちにシユビエル家の門前まで着いてしまった。

「と、とりあえずエルを起こそう。アーサー、この話だが今は保留と言う事で」

俺はエルを起こすため、小さく体を揺さぶる。

「ンンア？ ここ……どこ？」

「寝ぼけてんのか？ お前ん家の前だよ」

「大賢者様は!？」

「もう帰っちゃったぞ？ 後で使いの者をここに寄越すんだと」

「残……念、握手して……欲しかったのに」

「まあ、良いじゃんか。どうせすぐ会えるよ。つーか、そろそろ降りてくれ」

エルは俺の肩に手をのせ、勢い良くジャンプし、背中から離れると門の取っ手を掴み門に叩きつけた。覗き穴から目が一瞬出たかと思うと、すぐに門が開いた。

「お疲れ様でした！ 皆さん！ どうぞ、お入り下さい！」

「ありがと、ネルロさん」

「どうもお疲れ様です」

「庭師さんもお仕事お疲れ様です！」

俺達は各々、ネルロさんに軽い挨拶をしながら真つ直ぐ屋敷内へと入っていった。

「おお！ 戻ったのかエルメンテ！ それに皆さんも！」

玄関の扉を開けると、目の前にエルの親父さんが立っていた。

「ここで……ずっと待っていてくれ……たの？」

「いやいや、流石にそこまで暇じゃないさ。見に行けなくて残念だ。門の開く音が聞こえたんでね。出迎えたんだよ。ところで、ゲインさん、アイーナとイクルナはどうなりましたか？」

「あの二人には傷を付けてませんよ。今は気絶しています。回復したら戻ってくると思いますよ」

「そうですか！ 良かった。本当に良かった」

俺と親父さんの会話を訝しげな表情で見ていたエルは合点がいった様で、親父さんの



顔を見上げた。

「ゲインがおかしな行動にでたのはお父様のせいなのですわね!」

「エルメンテ! すまない! 耐えられなかった! お前達3人は私の宝物なんだ! わかっておくれ」

「もういいです!」

エルは頬を膨らませ、プンスカ怒りながら歩いて行つてしまった。

「エルの自室つて何処にあるんですか?」

「西側に黄緑色の扉があります。それがエルメンテの部屋です」

「ありがとうございます。後で行つてみます。とりあえず客間に戻らせてもらいます。

俺もちよつとやらなきやならん事があるんで。アーサーお前は どうする?」

「おトイレに行つてきます!」

アーサーもテキパキと歩きながらトイレに向かつて行つた。

「娘達の件、本当にありがとうございました」

エルの親父さんと軽く握手し、俺は客間へと戻る。そしてクツキンググリエイトを起動させ、ありとあらゆる調味料や香辛料を作り始める。

「折角だからな。やるならとことんやろう」

そして約3時間後、部屋中が香辛料と調味料の瓶で埋まる事になった。

「うむ、これだけあれば向こう10年は大丈夫だろう。あとはこの家を出る時にレシピを渡せば完璧だな！ やる事やったし、エルの様子でも見に行くか」

俺は瓶だらけになった客間を出てエルの自室へと向かう。

長い廊下を道なりに歩き続け、1つだけ黄緑色の扉を見つけたため、ノックし扉を開け中に入る。エルの部屋は本が山積みになっていた。

女の子っぽい物といえばベッドの横にある熊のぬいぐるみ位だ。当人は椅子に腰掛け、本を読みふけている。

「ノックしたけど聞こえたか？ まあ、そのまま入らせて貰ったけどさ」

「うん。一応……聞こえた」

エルの読んでいる本がどんな本かはよくわからないが、表紙を見るに英雄譚の様だ。剣と杖が斜めにクロスしているシンプルだが中々格好いいデザインをしている。

「お前英雄譚とかが好きなのか？」

「うん、物……語を読むのは大好き」

「そうかそうか。俺も英雄譚的な物語を読んだりするのは好きだぞ。幾つか持ってる。読むか？」

「読む！」

俺はインベントリから1冊の本を取り出しエルへ渡す。この本に書かれているのは小説である。ハガセンでは「白紙の本」というアイテムが道具屋で売っている。

本来の用途は敵のスペックや、アクセサリ、武器や防具のパッシブスキルの効果等を忘れない為に残しておく為だけのアイテム所謂ノートなのだが、俺はハガセンにおけるほぼ全ての要素を記憶しているので不要なのだ。

ある日俺はこの白紙の本をどうにか役立てられないかと1人考えた。ゲームや特撮やらロボットの他にも密かな趣味を持っていた。それはネット小説を読む事だ。「小説読まんかい！」という小説投稿サイトが俺のお気に入りだった。

お気に入りのネット小説をコピーし、白紙の本に貼っ付ければハガセンの中にいながら小説を読む事が可能という事実がわかった俺は、白紙の本を買い漁り、小説読まんかい！にあるネット小説をコピーしまくったのだ。

エルに小説を渡して2時間程が経過した。エルは一切休憩を挟まず、俺が渡した小説を読み続けていたが疲れたのか、本を閉じ背伸びをし始めた。

「流石に疲れたか。どうだ面白いか？」

「こんなに奇……想天外で面白い物語初めて。まだある？」

「ああ、腐る程あるぞ。また読ませてやるよ。わかる。わかるぞ、お前の気持ち」

「うん」

エルの返事を聞いたその時、突然扉がノックされた。

「失礼、エルメンテ？ 入ってもよろしくつて？」

「……どうぞ、イクルナお姉様」

ドアがゆっくり開くとイクルナが部屋へ入ってきた。

「あら、お邪魔だったかしら？」

「いや、別にちよつと本を読んでただけだ」

「そう。あなた達には迷惑をかけましたね」

イクルナはゆっくりと腰を曲げ、エルにお辞儀をする。

「私は悪魔に乗っ取られた後の事を全て記憶しています。あなたの母を殺した事もしつかりと。そしてこの片目」

イクルナが、眼帯を外す。その目は一切光を持たない、漆黒の目になっていた。

エルの手が小刻みに震えるのが見てとれる。

「もう、この目は使い物になりません。眼帯があつて本当に良かった。見苦しいものね」

「だから……何だと言うの……ですか」

「はじめを着けに来ました。いいえ、あなたがシユビエル家の人間としてはじめを着けなさい」

イクルナはいつの間にか、短刀を手にしていた。

「ま、まさか！ 馬鹿な事はや——」

「部外者はお黙りなさい!!」

エルは椅子から立ち上がり短刀を受け取る。

「後ろを……向いて……下さい」

「一思いにやりなさい。エルメンテ」

エルは短刀を横に一閃する。するとイクルナの金色の後ろ髪が、肩の付け根辺りでバツサリと切り落とされた。

「な、何をやっているのです!? 貴女は!? 私が言ったことがわからないの!」

「わかっていきます。痛い程に。イクルナお姉様、幼少時代私が最も辛かったのは母から頂いた、この髪を馬鹿にされた事です。お姉様生きてください。ヨボヨボのお婆さんになるまで生き抜いてください。そしていつか死んだらお母様に直に逢って謝ってくださいー!」

「ごめんなさい。ごめんなさい。エルメンテ」

2人は抱き合い延々と泣き続けている。俺はゆっくりと部屋から退室する。

「どうやら仲直り出来たみたいで良かった良かった」

「御機嫌よう、騎士様」

声のした方を向くとアイーナが立っていた。

「イクルナはエルに謝ったぞ。お前はどうかんだ？」

「し、失礼な！ 私もちやんと謝ろうと決意を固めてここまで来たのです！」

「あ、そう」

「そういえば、アーサーでしたか？ お弟子さんが貴方を探しておいででしたよ？ 玄

関で小さな女の子と一緒にでした」

「小さな女の子？」

「ええ」

「しつかりしろよ？ 長女なんだろう？」

「しつこいですわね！ わ、わかっています！」

俺は長い廊下を走りながら玄関へと向う。

そこには茶髪のツインテール魔法少女に髪を引っ張られているアーサーの姿があった。

## 第46話 俺、賢者とお話する

「早く行きましょ！ パパが待つてるの！」

「痛い！ 痛い！ 髪を引つ張らないで下さい！」

俺は騒いでいる2人の間に割って入り無理やり引き剥がす。

「ちよつとお前等1回離れる！ お前が大賢者の使者か？」

「うん！ そうだよ！ 四つ目のお兄ちゃん！ 私はねりりかつて言うの！」

俺は目に前にいる魔法少女を見て、大賢者はハガセンプレイヤーであることを再び確信した。彼女の背中に一部機械化された杖「機神杖アルテオン」が掛けられていたからだ。

真ん中に黒い宝玉が浮いており、謎のプラグの様なものが取り込もうとしているかの如く宝玉の周りに張り付いている。

あの杖は超高難度ダンジョンにて1000分の1で入手できるマッドネス級武器だ。彼女は上下薄紫服を着ており、フリフリのスカートを翻し俺の向くとニカツと笑いながら俺に手を差し伸べてきた。

「まだ行くとは出来ないんだ。連れがまだ来てないし、この館の主人に別れの挨拶だつ

てまだなんだ。頼むからもう少し待つてくれ」

「む、わかった。早くね？　ここで待つてる」

俺はすぐそこにいたメイドさんを捕まえ、親父さんと呼んでくるように頼むと小走り  
で去つていき、親父さんはエルとアイーナ、イクルナ3名を連れて現れた。

「こ、これは使者様！　この様な館に良く来てくださいました！　申し訳ございません  
！　飲み物も出さず！」

「大丈夫。それよりあたしは早くダイケンジャーの所に行きたいの！　人数が揃つてな  
いっていうの！」

「わかった、行くよ。その前に親父さんお世話になりました。お礼つてわけじゃありま  
せんがこれを」

俺はインベントリから紙束を取り出し、親父さんに渡す。

「これは？」

「えつと、俺が居た客間に出来る限り調味料や香辛料を作り置きしておきました。その  
紙束はレシピですよ」

「よろしいのですか!?　この様な貴重なものを頂いてしまつて!?」  
「いいですよ。どうせまた作ればいいだけなんで」

親父さんは俺の手を両手で掴み握手してきた。



「ありがとうございます！ 有効活用させて頂きます！ よし！」

親父さんは手を離し、気合いを入れると去っていった。

「さて、行くとするか」

「はい！ お師匠様！」

「うん」

俺が屋敷を出る事を宣言すると、リリカが俺の前に立つ。

「や〜つとなの！ 待ちくたびれた！ ワープ使つてちやつちやと行つちやうね！」

リリカが背負っている杖を手にし、地面を叩き付ける。

「ワープ！」

俺達の周りに青い魔法陣が現れ足のつま先から徐々に青い光の粒子となって消えていく。

アイーナとイクルナの方を見ると、一糸乱れぬ動きで俺に対しスカートの両端を掴み、小さくお辞儀するのが見える。アイーナとイクルナの顔は晴れやかな笑顔に見えた。

2人の笑顔を見た瞬間、画面が急転換した様な錯覚を覚えると既にワープは完了していた。目の前は更地だ。何も無い。ふと、左を見ると薄い膜の様なものが張られているのがわかった。道行く人々が歩いているのが目に入る。

「はいは？」

「ここはね、パパ——じゃないダイケンジャーが作った幻の塔の中だよ！ ついてきてね」

俺達はリリカ後ろを付いていくとすぐに建築物が見えてきた。

「おいおい……マジかよ」

その建築物は純和風の一軒家だった。

「……これはどうやって開けるんですか？」

「そいつは引き戸って言ってな、こうやって開けるんだ」

おれは取っ手に手を掛け、力を軽く込めると何の抵抗もなく戸は左へスライドしていく。

「さ、入ってー」

下を見ると白い大きめのサンダルの様なものと小さめの靴が4足あるだけだ。俺は足のサバトンを解除し玄関を上がる。

「アーサーにエル良く聞け。ここでは履いてるものを脱いでここに置くんだ。それがマナーだ」

「ハイ！ わかりました！」

「うん」

薄暗く細い廊下。廊下の途中にドアが1つ。最奥にまた扉がある。

えっとね、途中の扉はトイレだよ。奥の扉はリビングだけどパパはそこじゃなくて2階の自室で貴方達を待つてるよ！ 階段はリビングの隣にあるから」

リリカはそう言うと、俺達を取り残してリビングがあるという扉を開けて行っちゃった。

「よし、お前達俺についてこい」

薄暗い廊下を進み、扉の前に立つ。右を見ると急そうな階段が現れた。俺はその階段を昇る。階段を登り切るとまた扉が現れた。ここがどうやら大賢者の自室の様だ。俺はゆっくりとノブを回し扉開ける。

「……」

部屋の中に入り俺は絶句のあまり言葉を失う。部屋の内部にはテレビ、冷蔵庫、エアコン、パソコンが設置されていた。部屋の電気を消し、布団を頭から被り、中性的な顔立ちの人物がパソコン画面を食い入る様に見つめていた。

「お、おい！」

「ん？ おー！ よー来はったな！ ハッ！ ゲフンゲフン……よく来てくれた、旅人よ。我こそが大賢者である」

大賢者は起き上がりエルに握手をする。エルは緊張からか手が思いつきり震えてい

る。

「だだだだだだいけんじゃしゃまがあくあくあく……」

それだけ言うのとエルは口から泡を吹いて気絶した。

「おや？　じゃあ、君はアーサー君だね。どうぞよろしく」

「わあ、僕の事もご存知なんですね！　よろしくお……」

アーサーとエルは同時に前のめりになり、大賢者がそれを肩で支えると2人をソファアーへ寝かせる。

「悪いなあ、こつから先は君達には聞かせる訳にはいかんねん。さあて、改めてよう来たな」

「ああ、あんたに会う為にちよつと苦労したぞ」

「そか、で？　何が聞きたいんや？　まあ、顔見たら大体検討つくわ。まあ、そう焦らんと、ゆつくり説明したるわ」

大賢者は冷蔵庫からキンキンに冷えた缶ビールを取り出し、俺に手渡してきた。

「まあ、まずは飲もうや！　いや、まさかハガセンプレイヤーと酒が飲めるとなあ。めっちゃおもろいやんけ！　なあ！　乾杯！」

「まあ、一杯位なら良いか」

俺はヘッドの外格を解除し缶ビールを啣あわる

「何だ……こりゃ？ マジもんのビールじゃねーか!？」

「当たり前やん。なんやジューズとちゃうで。ワイのユニークスキルの力よ。どや？ 凄いやろ？」

俺は辺りを見渡す。

「じゃあなにか！ あのパソコンもテレビも全部本物なのか!？」

「せやで」

パソコン画面にはあるものが映し出されていた。忘れる筈もない。映し出されていたもの、それはハガセンのログイン画面だった。

「ちよつとパソコン貸してくれ!」

「あー！ おい、あんちゃん!」

俺はキーボードを叩きアドレスト。パスワードを打ち込み、エンターキーを押す。すると画面には「エラー!このアカウントは既に削除されているか 存在しません」と表示され、俺はうなだれる。

「せめて……せめてさよなら位言わせてくれたっていいじゃねーか……」

「あんちゃん……もうあつちの世界とはワイ等は死別してんねん。ワイだつて何十回と試したんや。でも、結果はあんちゃんと一緒やった。ワイのユニークスキル【アンリミテッドクリエイト】は一切のコストなしで何でも作れるチートスキルや。でも、それで

も前のアカウントだけは作ることがでひんかった。そう、まるで何かに邪魔されてるみたいだに」

俺は大賢者の肩を借りて立ち上がり、2人が寝ているソファアの端へ座る。

「すまん、少し興奮した」

「ええてええて、あんちゃんの気持ちはようわかる」

俺は小さく深呼吸し、気合を入れ直す

「で、本題なんだが何でこの世界はヒーローとロボットがいないんだ？ ハガセンの時代設定だったメイタリオが崩壊したってどういうだよ！ ヒーローやロボットいないのとか関係あんのか!？」

大賢者が目を閉じ、ゆっくりと口を開く。

「結論から言うたる。関係は……ある。そしてメイタリオを滅亡させたのは——ワイヤ」

俺は反射的にローブの胸ぐらを掴む。

「喋り辛いやろが。離せ」

「何で滅亡させる必要がある!? 何考えてんだ！ てめえは——」

大賢者が俺の顔に手を翳す。至近距離で強大な風圧が発生し、俺の体は壁に叩き付けられた。

「がッ……！」

「昔話をしたるわ。ワイがこの世界に来たのは4000年以上前や。そんな時はヒーローもロボットもおったわ。ただな、ゲームと違ってこいつ等は生きとんねん。ワイが来た時はヒーローとロボットが戦争の真っ只中やった。土地を隔ててな。北がヒーロー南がロボット、ワイはロボット側の土地に転生を果たした。直接のきっかけは軽い自慢話から始まったらしい。それがあれよあれよと喧嘩になり気付いた時にはもう誰も止められへん様になつとつたらしいで」

「いってえな、お前はロボット側の陣営で戦ったのか？」

大賢者はビールを呷ると再び話始めた。

「ああ、せやで。流石、ロボットとヒーローや。剣と魔法のファンタジーガン無視の光学兵器やら何やらをこれでもかと装備しとつたわ。負けず劣らずヒーローも巨大ロボットみたいなのをだして徹底抗戦しとつたな。この戦争は100年以上続いたんや。そりやあそうや、ロボットは壊れない限り動き続けるし、ヒーローはヒーローで人造人間みたいなもんやから施設で幾らでも量産出来たらしいからな。でも、何にでもいつかは限界が来る。何をトチ狂ったのか、当時中立を貫いていた戦士や魔導師に矛先を変えよつたんや。ワイは堪忍袋の緒が切れた。ワイはワイが覚えてる最強最悪の魔法スキルをロボットとヒーローの両陣営に向かって放つた」

「まさかあれをやったのか？」

「ああ、せや」

マジックロードの最大最悪の魔法スキルその名を「ワールドエンド」このスキルは魔術師の系統における全スキル全ジョブを覚えた者のみに与えられる超広範囲特殊魔法である。

その効果はHPとMPの9割をコストに発動し、効果範囲内のものを強制的にモンスタ―化しすぐさま即死させるといふ魔法だ。このスキルはゲームでも同様の効果を発揮するが、まず使う事はできない。詠唱時間が10分以上掛かるとコストに使うHPとMPのせいで一撃死する危険性があるからだ。

しかし邪魔する者さえいなければ話は別だ。放られたら最後、もう誰にも止めることは出来ないのである。

「信じらんねえ……」

「ロボットとヒーローは文字通り全滅した。そしてHPとMPが尽きたワイは、最後のMPを使って別の大陸の草むらにワープし、すぐ様ホームへ入り眠りに付いたんや。起きたら数千年時が経過しとった。最初に驚いたのは文化の大幅な衰退やった。皆道端で馬場しとったんやぞ？」 中立言うてロボットとヒーローの文化に頼つとつたらしいからな、戦士や魔術師は。そこからもう色々教えて回ったわ。んで、歩き回ってるう



ちにリリカと出会う事が出来て、二人で頑張ってるって感じやな。あ、なんか大陸の名称変わっとったけど誰が唱えたかは知らん。あと、ロボットとヒーローおった土地は今瘴気が漂つとるから誰も近づかんようになった。誰が呼んだが魔法大陸って呼ばれとる」

「なんてこった」

俺は足の力が抜けへたり込んでしまった。

「まあ、そういうこつちや。気づいてるかも知れんけどリリカはワイのアナザーキャラやで」

「やっぱそうなのか。しかしコテツコテの魔法少女だな、このロリコンめ。あとそういうえび聞いた話だとルゲームに来た時は爺だったと仲間から聞いたが？」

「ああ、それはなスキルで顔変えとったんや。もし、ワイの事知った奴がおらんとも限らんと思ってたな。まあ杞憂やったけど。それとお前言うてんねん。ロリータは正義やぞ。魔法少女は人生やぞ？ お前だつてアナザーキャラの一体はおるやろ？」

「意味わからん。まあ、確かに俺にもいるけどな。待てよ、サラツと流されたけどやっぱアナザーキャラもこの世界でひとり歩きしてんの？」

「せやで？ え？ まだ会ってないんか？」

「ああ、なんとなく居るとは思ってたんだけどな。」

アナザーキャラは課金する事で開放されるお助けNPCである。アナザーキャラに

はプレイヤーが自由に設定を組み込むことが出来る。性別は勿論、性格、種族、武器、防具、アクセサリ etc

ミートシステムというプログラムが内蔵しており、100%必ず何処かでメインとアナザーは出会うことになっている。

元々はソロプレイヤー救済の為に作られた要素だが、皆こぞって購入し殆どのプレイヤーは着せ替えを楽しむ為に購入する。

### 閑話休題。

大賢者は懇親のドヤ顔を俺に向ける。

「ダッサー。まだ会ってないんく？ ダッサー」

「ぶん殴るぞ。そつかあ、あいつがこの世界にねく。どこに居るのか想像もつかんわ」

「まあ、ゆつくり探す事やな。ワイの昔話はこれで終いや。最後まで聞いてくれた礼や。取っとき」

大賢者が両手を広げると、青、赤、緑の光の粒子が発生し眩い光を放つ。すると地面に四角い大きな物体と小さな四角い物体が落ちた。

「こ、これは!?! 機動猟兵メウロスのブルーレイボックスじゃないか!?!」

「あんた、ロボット物好きそうやったからな。フルメタラーなんてよっほどロボットとヒーロー好きじゃないとなれんジョブやし。あとそのちっさいのはポータブルブルー

レイディスクプレイヤーやで」

俺は大賢者の手を取り思いっきり握手する。

「すまん。あんたの事誤解してたよ。血も涙もないクソつたれサイコパス野郎だと思つてた。ごめんな」

「やっぱそれ返してくれへん?」

俺は貰ったブルーレイボックスとプレイヤーをインベントリに入れる。

「おう、ちゃんとインベントリにはいるんだな。スゲーや。そういや充電はプレイヤーのどうすんだ?」

「そいつらは使用者の魔力で動くから充電要らずやで」

「割りマジでチートだな」

「さて、話す事はもうなくんもない。そろそろ起こしたるわ」

大賢者が指を鳴らすと、アーサーとエルが覚醒しだした。

「ハッ!」

「うくん、あれ? 僕いつの間に」

大賢者は2人に近づき手を差し伸べる。

「よく眠っていた様ですね。お仲間と少し話し込んでしまいました」

「2人とも行くぞ。もう聞きたい事は全部終わった」

俺は大賢者の家を出ると同時にリリカが現れた。

「お兄ちゃん！　パパと話相手になつてくれてありがとう！　じゃあワープするから行きたい場所とか会つたら言つてね。」

「んー、じゃりーメルの喫茶店で頼む」

「うん！　いいよー！　じゃあねー！」

空間が一瞬乱れると、俺達はりーメルの喫茶店の前に立っていた。

「どんな……話をしたの？」

エルは俺のマフラー引つ張りながら聞いてきた。

「魔法少女は人生なんだって。あとマフラーを強めに引つ張るのやめて」

「魔……魔法少女？　人生？」

エルはずつと首を傾げていた。

## 第47話 王立騎士団副隊長エスカの一曰

まただ。また、いつものあれがやってきた。

暗い何も無い空間には私は立っている。これは明晰夢めいせいせきむというやつだ。

もう何千何万とこの夢を見てきた。私は小さくため息をつき気合を入れる。すると、暗闇が突然消え去り場面が変わる。

私が持っている記憶の中でも古い方の記憶だ。気付くと、草原に一人立っていたのを覚えている。

武器や防具は敬愛するお兄様から頂いたものをそのまま装備していた。

しかし、私が求めている記憶はこれではない。

もう一度私は気合を入れなおす。そうしてまた空間が切り替わる。私はガラス張りの筒の様なものの中にいる。

目の前には全身を漆黒の甲冑で身を包んだ騎士が立っている。この御方が私の憧れの人、ゲインお兄様だ。

強力な効果を持つ武器や防具をくれた。

綺麗なドレスやアクセサリーをくれた。

一言お礼が言いたい。おもいつきり抱きついてありがとうございますと、しかしそれは叶わない。

言いたくとも体は完全に硬直しており、指先ひとつ動かすことすらままならない。いつもそうだ。この明晰夢は必ず私がお礼を言おうとすると終わる。

どうせまた——そう私が思った瞬間、お兄様が頭の兜を外し、笑いながら「相変わらずお前は美人だな」と言ったのだ。

「お兄様ッ!!」

私は叫び声を上げる。

周りを見渡すと、自室のベッドの上だった。私はベッドから出て寝間着を脱ぎ去り、クローゼットの中にある備え付けの服を着る。

部屋の隅にはお兄様から頂いた「ドラゴニック・スケイス」と「ニールングスレイヤ」が立てかけてある。

ドラゴニック・スケイスは魔防具と言われる物らしく、今の技術では人為的に創りだすのはほぼ不可能らしい。

真紅の美しい甲冑だ。特徴的なのは兜だ。猛々しいドラゴンの顔の様な装飾がなされてる。

ニーベリングスレイヤは見た目はただの剣だが、この剣には面白いギミックが施されている。刀身が伸びるのだ。

所謂、ガリアンソードというやつだったか。

ドラゴニック・スケイスとニーベリングスレイヤはお兄様から頂いた最後の贈り物。私の宝だ。

ドラゴニック・スケイスの兜を被ったところで部屋の扉からノック音が聞こえた。どうやらメイドが来たようだ。

私の名はエスカ。今は王都にある城に身を置き、王立騎士団の副隊長をやっている。

「大丈夫だ。入ってきてくれ」

「おはよう御座います。エスカ様」

入ってきたのは私専属の使用人ネアだ。

「すまないが、甲冑付けるのを手伝ってくれ」

「勿論でございます」

ネアの手際がよく、あっという間に着ることが出来た。

「ありがとうございます。もう良いぞ」

「よくありません。さ、兜を今一度お外しになってください。髪を整えさせて頂きます。エスカ様も少しは身だしなみに気を使うべきです」

「身だしなみなんてどうでもいいじゃないか。どうせ訓練や戦闘でボロボロになるんだし、私はダークエルフだから汚れも目立たない方だぞ？」

抵抗したが無駄だった。あれよあれよと兜を脱がされ、髪を解かされている。

「相変わらずとっても美しい褐色の肌そして銀の髪羨ましいです」

「そうか？ どれも変わらないと思うが？」

「そんな事ありませんよ。とてもお綺麗です。髪を横で結んであげますね。ずぼらなエスカ様でもこれなら簡単ですから」

私にとってネアは大切な友人だ。もうかれこれ15年以上一緒にいる。

「ありがとう。助かった。この髪型はなんて言うんだ？」

「サイドポニーテールといいます。お願いですから、もう少しらしくして下さい」

「努力するよ。では行ってくる」

私は自室を出て真っ直ぐ王女様の王室へと向かう。

王室の前に着いた私は大きめの声を上げる。

「サントイーヌ王女様！ エスカです！ 入ってもよろしいでしょうか!?!」

「エスカですか？ どうぞ入って下さい」

サントイーヌ王女様は私の恩人だ。王都に来たばかりの頃、右も左も分からない私を拾ってここに住まわせてくれたのだ。



「おはよう、エスカ。メイドがお茶を入れてくれました。貴女も一緒に飲みましょう」  
「ハッ！ 喜んでご一緒させて頂きます！」

私は王女様の向かいにゆつくりと座る。

「エスカ、堅いですよ。どうせ私達しかいないんですから」  
「いえ、しかし……わかりました。では、お言葉に甘えて」

私達は紅茶を口にし、一息つく。

「例のあれは今日もあつたの？」

「それが聞いて下さい！ いつもとは最後が違ったんです！ お兄様の声を確かに耳にしました！」

「まあ、それは本当？ 良かったわね。ということは、約束の日が近づいているのかもしれませんね」

「ハイ！」

私は紅茶を飲み終えた為立ち上がる。

「あら？ もう行ってしまうの？」

「もう行きませんと。外回りと団員達を見なきゃなりませんので」

「そう、名残惜しいわ。頑張つてねエスカ」

私は立ち上がり、王女様に深々と礼をし部屋を出る。

王室を出た私は次に、城の外にある兵舎へと西に向かう。兵舎へと向かう途中、私を呼び止める声が後ろから聞こえた。

振り返るとそこには、団員のひとりである犬獣人のファースが走りながら近づいてきた。

「おはようございます！ エスカ副隊長！」

「おはよう、ファース。今日も元気だな」

ファースは猛烈な勢いで尻尾を振っている。

「エスカ副隊長は何処に行かれるのですか？」

「ああ、見回りに行こうと思ってるな」

ファースは同じ亜人である為か、私を異様に慕っている。慕われる様な要素など何一つないと思うのだが。

「では、行ってくる」

「お気をつけて！」

私は街を歩きつつ思い出していた。私がただの居候から騎士団の副隊長にまでなったあの事件を。

その日、私は王女様と共に街の視察をしていた。視察という名目だがただ単にお菓子

を食べたりアクセサリーを見たりするだけの買い食いだ。

ただそれだけの筈だった——。街を歩いていると、突如上空から二体の巨大なグリフォンが襲ってきたのだ。この視察はほぼお忍びのようなものだった為、王女様を守れるのは私一人だけだった。

『守らなければ！』

この時私の頭にはそれしかなかった。逃げ惑う人々をかき分け、私はグリフォンに向かってニーベルングスレイヤを振りかぶる。伸びた刀身が二体のグリフォンを一挙にズタズタに切り裂いたのだ。

私はこの功績を認められ、騎士団の副隊長の任を王女様から直々に頂いたので。

「思えばあの頃からか、例のあれが始まったのも」

街へと繰り出したが、結局これといって大きなトラブルはなかった為、私は城の自室へと戻る。

これが私の大体のルーチンワークだ。余談だが、王都はあれから巨大な壁に四方を守られている。

## 第48話 俺、王都に行く

大賢者にあつた翌日、俺達はリーメルの喫茶店で最期の朝食を摂っていた。魔術大会が終わつた為か、店内は閑散としていた。

「知りたい情報は全て手に入れた。だから、朝飯喰い終わつたらこの街を出るぞ」

「うん……」

「はい……わかりました」

アーサーは喫茶店に来てから、ずっとこの調子だ。エルのテンションが低めなのはいつもの事だが、珍しくアーサーのテンションが低いのが俺は気になった。

「どうしたんだ？ アーサー？ 調子でも悪いのか？ 病気や怪我ならエクストラヒールで速攻治してやるぞ？」

「いえ、違ふんです。その……お師匠様！ 申し訳ございません！ 僕が無能なばかりに！」

アーサーはいきなり俺に向かって謝り始めた。額をテーブルに打ち付けながら謝辞の言葉を連呼している。

「うわ馬鹿！ 落ち着け！ なんだ一体！ 今朝からどうしたんだ！ ほんとにおかし

いぞー！」

幾ら閑散としているとはいえ喫茶店。俺達以外にも客や店員がいるのだ。俺はアーサーを両肩を掴み、顔を上げさせる。アーサーは目に涙がこれでもかと溜まっていた。まさに決壊寸前といった感じだ。

「お師匠様！　お願いがあります！　悪魔を察知するスキルが使えなくなっちゃった事を、王女様に報告しなければなりません！　王都へ付いてきて下さい！」

アーサーが朝からおかしかった原因を察知した俺は一気に脱力する。

「アーサー、お前は何を言ってるんだ。お前にとって俺は何だ？」

怒られるとでも思っていたのか、アーサーは俺の質問にキョトンとしていた。

「えっと……お師匠様はお師匠様です」

「違うだろお？　俺はお前の従者だ。従者ってのは付いてくのが仕事だ。お前の行く所が次の目的地になるんだよ！」

アーサーはハツとした表情になると俺の手を掴んで来た。

「じゃ、じゃあ付いてきて頂けるんですね！」

「当たり前だろ？　な、エルも別に行きたい所とかないだろ？」

俺はもしやもしやとパンケーキを食べてるエルに話題を振る。エルは口の中にパンケーキを押し込んだ状態のまま首をコクコクと揺らし、相槌をうつのが見えた。

「よし、じゃあとつとと王都に行っちまう。それに個人的に興味もある。金は俺が払つとくから外で待っててくれ」

「ハイ！ よろしくお願いします！」

「ンー」

俺が金を払い出ていこうとすると、リーメルに呼び止められ。

「この街を出るのね。エルの事頼んだわよ」

「わかつてるって。前に言っただろ？ コーヒー美味かったぞ。じゃあな！」

俺はリーメルに手を振り、喫茶店を出た。

「この街の出口は何処にあるんだ？」

「ここから北に……進めば出入り口の……門に辿り着く」

3人で北へ歩き続けると、やがて入ってきた門と同じものが見えてきた。

「あれが門だな」

門番は俺達を見ると、ゆっくりと身をひいた。巨大な門を俺はくぐる。

「やつとこの街を出る事が出来たのか。あゝ、長かった。そういや、王都にはどう行くんだ？」

「王都には第3大陸に行かなきゃなりませんから、ここから西にある、バニアル山を越えて港町に行く必要がありますね！ 大体、歩きで行くと4日程掛かる道程です！」

俺は思ったより道程が長かった為少し驚く。

「近くに人気のない草原みたいな所はないか？」

「この先西に行った所に草原があります」

俺は足早に歩き人気のない草原を目指し、草原の真ん中辺りで立ち止まると、腿を叩きギアの入ったケースから紫の歯車を取り出し放り投げる。

「ウエイクアツプ、紫炎龍」

俺が放り投げた歯車がどンドン分裂していき人の姿を形どつていく。

「おはようございます、皆さん。ゲイン様、今日はどの様な指令でしょうか？」

「ああ、お前には今すぐ飛行形態になってアーサーとエルを乗せてやってくれ」

「承知致しました」

紫炎龍は戦闘機に姿を変えると、エルとアーサーの元へ近づく。

「私！ 私！ 番前がいい！」

エルが目キラキラさせ、声を声を張り上げている。

「じゃあ、僕はエルさんの後ろで」

俺は紫炎龍のキャノピーを開け、手を差し出しアーサーとエルを順番にコクピットへ乗せる。

「ちよつと待つてください。お師匠様はどうするんですか？」

アーサーは身を乗り出し、俺の方を見ている。

「あ、俺飛べるから」

この場を一瞬の静寂が支配した。

「ええええええええええええええええええ!!?!?」

「あれ? 言わなかったっけ?」

キャノピーが閉まっていき、アーサーとエルを乗せた紫炎龍がバーニアを吹かし始めた。薄いキャノピーの奥でエルとアーサーが何か騒いでいるが全く聞こえない。

「紫炎龍、道はアーサーが知っている。俺は、お前の後を付いてくからな」

「承知致しました。では発進します」

俺は紫炎龍が飛んでいくのを見送る。

「さて、久々にやるか。チェインジ! ヤルダバオトⅧ式!!」

俺が叫ぶとウルガイスⅥ式が外れ、再び俺と対面する形で組み上がったいく。

「じゃあね、ゲイン様楽しかったわ。よかったら、また呼んでちょうだい」

「おう、じゃあな。ご苦労さん」

ウルガイスⅥ式が消えさると同時に、身体に軽い衝撃が奔るとヤルダバオトⅧ式を装着していた。

「お久しぶりです。ゲイン様」



「おう、ネメシス。早速だがブースターを起動しろ。先に紫炎龍が飛んでるのがわかるか？」

「魔力の察知を完了しました。追尾開始」

背中のブースターが起動した為、俺は助走を付け天高く跳躍する。

「どの位の距離差がある？」

「距離にして90キロ程です。直ぐに追いつけます」

ブースターの推力が急上昇しあつという間に紫炎龍に追いついた。

「ゲイン様、城が見えてきました」

地上を見ると、青い尖った屋根が特徴的などとも立派な城が目に入った。

「よし！ 王都の近くに着陸しろ！」

「承知致しました。ゲイン様」

紫炎龍と俺は王都近くの森の中へ着陸する。

キヤノピーが開くとエルが飛び降りて盛大にリバースする。

「オロロロロロロロ」

「やっぱり吐くんだな……」

遅れてアーサーが折りてくる。

「お師匠様！ 僕も空飛びたいです！」

「長距離飛行は……多分お前らには無理だ。エリアルダイブで我慢しようね！」  
しよぼんとするアーサーを尻目に、エルにクリーンを掛けてやる。

「アーサー、道案内を頼む」

「ハイ！ こつちです」

俺達はアーサーの後をついて行くと城下の入り口様な所へ出た。目の前には兵士が突っ立ったまま居眠りしている。居眠り兵士を無視し、城下町へと入る。

「門番が居眠りって……」

「ま、まあ王都はとっても安全ですからね」

「ほう、そうなのか。何か理由があるのか？」

俺がそう言うのとアーサーは目をキラキラさせて俺の方を向き喋りだした。

「なんと言つても王立騎士団の存在です！ この王都でゆりすぐりの猛者を集めて作ったと言われる。この国の要の様な存在なんです！」

「へえ、そうなんだ」

アーサーと世間話をしていると、どうやら城下町へ入ったようだった。ルギームも人通りは多かつたが流石王都と言ったところか、屋台やらアクセサリー屋やら武器屋やらが処狭しと並び多種多様な人がいる。

「うわー、人だらけだな。下手すると迷子になりそうだ。で？ 城は何処にあるんだ？」

「ついてきて下さい！ 僕は王都出身なんでもう道は頭に入っています！」  
「あつ、そつかあ。じゃあ頼む」

俺アーサーについていき市場と住宅区を抜け、城門前へと辿り着く。

門番はアーサーを見るなり声を上げた。

「勇者殿!? いつ王都に戻られたのですか?」

「すいません。王女様に謁見も申し込みたいのですがよろしいですか?」

「勿論です！ 少々お待ちください!」

走り去っていた門番を待つこと10分後……。

「王女様が謁見に応じるとの事です。どうぞ、皆様お入りください!」

「え? 俺達も良いの?」

門番は俺に対し背筋を伸ばし、ハキハキとした声で答える。

「アーサー殿のお付の皆様の事をお伝えしたところ興味があるとの事です!」

「じゃ、お言葉に甘えて」

城門を潜り城の中へと入る。城の入り口には階段が幾つもあり、初見では道に迷うだろう。わざとこうなっているのだろうか? アーサーがいなければ危ないところだ。引き続きアーサーについていき巨大な扉の前でアーサーは立ち止まった。

「ここが謁見の間です。入ります」

アーサーが扉を開ける。謁見の間には何人かの人物がいる。臣下だろうか？

周りにはヘンテコな白髪のかつらを被ったおっさんがいる。そして中央にいる女性が王女様だろう。

青い髪に小さな宝石が付いた金色のサークレットを頭に付けている。純白のドレスが似合う、ザ・王女といった感じだ。

アーサーとエルは王女に近づいていきある距離で跪いた。俺も見様見真似で跪く。

「息災のようで何よりです。勇者アーサー、今日はどうしたのですか？」

「はい！ 今日報告があつてまいりました！ 悪魔の反応が突如として消えてしまいましたので、その報告に立ち寄りさせていただきました」

「そうですか、仕方ありません。何も焦る必要はありません。ゆっくりでいいから確実におやりなさい」

「はい！」

アーサーが言い終ると王女様は俺の方をジッと見ていた。

ん？なんだ？ 俺なにか失礼な態度とつたかな？

「漆黒の騎士……？ まさか、もし？ 貴方は——」

王女様が俺に何か言おうとした瞬間、後ろの扉が乱暴に開き息を切らした門番が入つ

てきた。

## 第49話 俺、VSビッグ・アント

「突然、申し訳……ごいません。魔術師会の会長殿が……至急、王女様に面会をとの——」

門番が息を切らせながら王女へ報告していると、突如魔法陣が現れ緑のローブを着込んだ人物が現れた。

顔はローブを深々と被っており、俺の位置からでは見ることが出来ない。手に大きな水色に輝く水晶を抱えながら王女に対し跪く。

「急を要する為、王女よ許して頂きたい。儂は魔術師会で会長をやらせて頂いている。ギヌルベルという」

「本来なら即刻追いつく所ですが、魔術師会の長の名に免じて特別に許しましょう。顔を上げさない。一体、どうしたのです？」

許しを得たギヌルベルと名乗った魔術師は、顔をあげると手に持っていた水晶をから手を放す。

すると、水晶は空中でふわふと浮きながら上へと上がっていき、静止したかと思うと強い光を発し、映像の様なものが映しだされた。

2体のグリフォンが森を突っ切っているのが見える。

王女の方を見ると、親指と人差指で目を摘んでいる。

「はあ、またですか。あれくらいなら騎士団と冒険者達に任せておけば良いのです」

「いいえ。問題はこれだけではございません」

ギヌルベルが手を横に動かすと、映しだされていた映像が切り替わった。

映像には超巨大な蟻が森を破壊しながら進んでいるのが目に入った。映像が移った瞬間周りの人達がざわつき始めた。王女は目を見開きながら手で口を抑えている。

「災害級モンスターが真つ直ぐ王都に近づいております！ 持つてあと4時間！ おまけにグリフォン2体は東、こやつは西、別々の方向から挟まれる形でここを目指しているのです！」

ギヌルベルが言い終わると、王女が立ち上がり、声を張り上げる。

「この街にいる全冒険者を緊急招集します！ 王立騎士団も全員投入！ これは命令です！」

この場にいる殆どの人間が慌ただしく動き出した。俺はそんな中立ち上がり王女を見据えながらゆっくりと手を上げる。

「あのく、こんな時に申し訳ないんですけど、あのでかい蟻なら俺なんとか出来ますよ」

瞬間、慌ただしく動いていた人間全員が静止し、エルの顔面が蒼白になっているのが

見え、何故かアーサーは渾身のドヤ顔をしている。

「そんなわけなからう！ この不敬者め！ 貴様は何者じゃ！」

ギヌルベルが俺に人差し指を指しながらヒステリーを起こした。この時顔を拝められたが、しわくちやのばーさんだった。

「漆黒の騎士よ、貴方の名前は？」

「ゲインと申します。しがない世捨て人で、今は訳あって勇者アーサー殿の従者をしております」

「そうですか……やはり……。良いでしょう。必ず生きて戻りなさい。これは命令です」

俺は王女に向かい礼をし、謁見の間を後する。

「王女様、最初何か言ってなかったか？ 必ず生きてくの前が聞こえなかった」

「いいえ、僕の耳には何も」

エルも首を左右に振っている。

「そつかあ。ま、別にいいんだけどさ。悪いけどアーサーとエルはグリフォンの方に行ってくれ」

「なん……で？」

「お前等を巻き込む可能性があるからだ。ビッグ・アントはレイドモンスターってな、



他のモンスターとちよつと違うんだよ」

二人は俺の話を聞いて不満そうにしていたが、暫くすると納得してくれた。

「じゃ、俺先に行くわ！ 死ぬなよ、ふたりとも」

俺は軽く手を振りながら二人と別れ、城を出て城下町を下る。広場には人ばかりができていた。王都にいる全冒険者が一堂に会しているのだろう。

認識阻害魔法のインビジブルを自分に掛け、人混みを避けて王都の入り口へ戻り、森の中へ入る。

森へと入り30分後……。

「よし、この辺なら良いだろう。今頃王都の皆はグリフォンを討伐の真つ最中の筈だ。ネメシス、ビッグ・アントのステータスと距離を算出してくれ」

「魔力感知開始。ゲイン様との距離は約20キロ程離れています。レベルは350程度です」

俺は腿を叩き、ケースから一際でかい赤と金の目立つカラーリングの歯車を取り出し、叫び声のような大声を上げる。

「ウェイクアップ!!」  
「絶対強靱ゲキリンオー!!!」

俺の声に反応し、歯車が分裂合体し超巨大な人の形を模っていく。金と赤のド派手なカラーリングのスーパーロボットが出来上がった。

絶対強靱ゲキリンオーはレイド専用のマシンギアだ。余りにでかすぎて通常クエストでは使いものにならないのだ。

マシンギアは基本的に勝手に動くのが大半だが、レイド専用のマシンギアは搭乗し操作することが出来るのが特徴である。

「とうっ！」

ゲキリンオーの完成を見届けた俺は天高く飛び上がる。

俺が胸の辺りで停止すると、絶対強靱ゲキリンオーの胸にある黄色い宝石から俺に光が照射され、俺の体はゲキリンオーの内部へと吸い込まれていく。

暗く広い空間に幾つものウインドウが表示されているのが見える。

俺がフィールドの中心に降り立つと、ワイヤーフレームで出来たゲキリンオーが俺と重なる。

モニターには森を破壊しながら猛スピードで向かってくる、ビッグ・アントの姿が映しだされている。

レイド専用のマシンギアにもご多分に漏れず、固有の武器、技、パッシブスキルが存在している。

絶対強靱ゲキリンオーはスーパー系のそれであり、最も強力かつ手数に優れている最強のレイド専用のマシンギアだ。

ただ一つだけの欠点を除いて。

「よっしゃ、やってやるぜ！　ありんこ覚悟しろよ！　ウエボンセレクト、ギガンティックドリルアーム!!」

俺が叫ぶと、ゲキリンオーの手がドリルへと変わる。

「ギガンティックドリル・スマッシュャー・ナックル!」

俺は右腕を振りかぶると、ブーストを吹かし回転しながら銀のドリルを装備した右手が一直線にビッグ・アントへと向かっていく。

右側面に直撃し、足をズタズタに引き裂いていくのがモニターから見える。

「GYAAAAAAAAA!?!」

かなりのダメージなのか、血飛沫をあげながらのたうち回るのが見える。暫くしてぶっ飛ばした手が戻ってきた。

俺はトドメの一撃を加える為、気合を入れる。

「ギガンティック・バスターー!　&アルティメイタム・クラッシュユツ!!」

胸の黄色い宝石から極太のビームを照射し、ドロドロに溶解したビッグ・アントに対し、背中のブースターで飛び上がり、超巨大な剣を召喚そのまま勢いに乗って一刀両断、大爆発が起きる。

俺が顔を上げ、モニターを見るとビッグ・アントがいたそこは、爆心地の様な巨大なクレーターが存在しているだけだった。

俺は飛び上がり、絶対強靱ゲキリンオーから抜け出るとゲキリンオーもすぐに歯車へと戻っていく。

「ハア……ハア……疲れた。このパッシブスキル作ったやつ絶対狂ってるよ……」

「お疲れ様でした。ゲイン様」

絶対強靱ゲキリンオーの欠点、それは「技や武器を起動させると強制的に叫ばされる」というふざけたパッシブスキルが付いているということだ。

尚、技を決める度に《シユピーン》というSEと共に、眼が黄色に光るのだが、特に意味はない。

「ゲイン様、お疲れの所申し訳ございません。西の方に魔力を感知しました」

「何だ？ もう来たのか？」

「いえ、恐らくビッグ・アントの主だと思われます。如何がなさいますか？」

「は？」

俺は疲労しつつも、反応があった方へとブースターを吹かした。

## 第50話 俺、ビッグ・アントの召喚主と対峙する

マップを確認しつつ飛んでいると、赤い斑点の様な表示が現れた。

「こいつがビッグ・アントを召喚主だな」

俺は斑点に向かって推力を上げる。

段々と召喚主であろう人物が見えてきた。

よく見ると男性のようだ。緑の髪、右の頬に黒い炎のタトウの様なものが入っている。

あのタトウはハガセンにあるデフォルトで選択出来るスキンの一種だ。

間違いなくあのビッグ・アントを召喚したのはこいつだろうと俺は確信し、一気に男の目の前まで接近する。

「おい、コラ。お前だな？ ビッグ・アントの召喚主は？」

男の表情を間近で見ると、何故か口をあんぐりと開け、目が泳いでいた。

男の手にはムチが握られている。対峙している男の職業には検討がついていた。

サモナーかも知しくは、サモナーの前職業である猛獣使いだろう。ムチを使うのは基本的にこの2職だけだからだ。

「アホ面してねえで俺の質問に答えろ。なんで王都にレイドモンスターなんて寄越したんだ？ まあ、レイドボスじゃなかったただけ良かったが、もし俺がいなかったら今頃――」

「――ツ!!」

俺が文句の一つでも言つてやろうかとした瞬間、男は突然踵《きびす》を返し俺から逃げ出した。

「あつ！ おい！ 待てえい！」

男は無詠唱のワープでデタラメに移動を始めた。俺から逃げるつもりなのだろう。

「めちやくちやに動きまわりやがつて……弓じゃ狙えねえか。仕方ないあまり対人には使いたくなかったが……」

俺はインベントリから弓を取り出すがすぐに辞め、超ロングバレルのスナイパーライフルを取り出す。

「ネメシス、お前に体を預ける。弾道と相手の出現位置を割り出してお前が狙え。一応、手加減を起動させる。俺だと撃ち殺してしまうかもしれないからな」

「承知しました。弾道計算及び、出現位置の計算を開始。トリガーはお任せします」  
独りでに体が動きだし東の方角を向くと、銃を構えたままピタリと止まる。

「カウントダウン開始。3秒後トリガーを引いて下さい。2、1……今です」

俺は言われた通りにトリガーを引く。耳を劈く銃声と共に、スコープ越しから男の右足が砕け散ったのが確認できた。

男が右足から血飛沫をあげつつ、森へ落下していくのが目に入る。

「落ちていったな。まあ、死んではいらないだろう」

俺はゆっくり降下し、右足を抑えながら悶え苦しんでいる男の側へ着地する。

「ああ……くっ！ 僕の右足……が！」

「あのさあ、一応言っとくけど逃げたお前が悪いんだからな？ 改めて聞く。なんで王

都にビッグ・アントなんて寄越したよ？」

男は俯きながら少しずつ話し始めた。

「二年前、僕はこの世界に来た。王都の奴らは僕の従えてるモンスター達を見て急に騒ぎ出したんだ。悲しかった。辛かった。挙句、何もしてないのに王都に入れなくなつた」

いつの間にか男は泣き出していた。俺は仕方なく宥めることにした。

「おい、泣くなよ。どんだけ辛かったんだよ。お前王都に来た時どういふ状況だったんだ？」

「せつかくだから……サイクロプスみたいなかくて強いモンスターでアピールしようかと思って。うぐ……なんでもぼぐがごんなめ」



サイクロプスは全長30メートルの巨大モンスターだ。俺はこの男が何故王都に入れなかったのか一瞬で理解できた。

「お前アホだろ！ そんなの騒がれるに決まってるだろ！ 邪険にされたのが悲しかったからこんな事してたのか？ ちよつと突っ込みどころ多すぎるぞ！」

男は涙を拭い、真っ赤に腫らした目で俺の方に向き直る。

「僕が自分でやりだした事じゃない!! 王都の入り口でどうすれば入れるか迷ってたから、変な男が話しかけてきたんだ！ その男が見返してやれって言ったから僕は——」  
「ちよつと待て、何だ？ その変な男ってのは？ そいつが一連の犯人なのか？ 男の容姿は？」

「わからない。会ったのは一度きりだし、ローブを深く被ってて顔は見えなかったんだ」  
「何かないのか？ 例えば身につけているものとかローブ以外に何かあんだろ？」

男は目を瞑りながら考え始め、声を上げた。

「ネックレスだ！ 確か金のネックレスをしていた記憶がある。あと、妙に小綺麗な金の刺繍が入った紫のローブをした」

「金のネックレスに紫のローブね。その男の目的はよくわからんが、放置しとくとヤバそう」

「な、なあもう良いだろ？ 足治しておくれよ。頼む」

俺はかがみ、男と目を合わせる。

「もう王都にちよつかい出さないって約束できるか？ 今度王都にモンスター放つてみる。その時は足じゃなくて頭撃ちぬくからな」

男は超高速で頭を上下に振っている。

俺は男に対しエクストラヒールをかけてやると、足は瞬時に元通りになった。

「あ、ありがとう！ もう馬鹿な真似はしないと誓うよ。僕はリズロ、ジョブは猛獣使い」

「俺はゲイン、とつとと行け。最後にいい事教えてやる。王都の門番に居眠りしてる奴がいる。王都に入りたきやそんな時にも入るんだな。お前一人でだぞ？」

「あ、ああ！ ほんとに反省してる！ じゃ！」

そう言つてリズロと名乗った男は走り去つて言った。

「ハア、さて後はグリフォンか」

俺は再びブーストを吹かし皆戦っているであろう戦場へと急いだ。

## 第51話 邂逅

「くっ!! 皆の者持ちこたえるのだ! 一体は倒せた! このまま戦いつづければ必ず勝機はある!」

隊長であるアンドリュウの激励が私を含め皆の耳に届く。

二体目のグリフォンは空中に陣取り、羽ばたきによるソニックブームで波状攻撃を仕掛けてきたのだ。

グリフォンのソニックブームによる衝撃波で前衛の者は吹き飛ばされ、後衛の魔法もまた同じく衝撃波に弾かれてしまっている。

私もニーベルングスレイヤを振りかぶるが、やはり弾かれていもう。いつしか膠着状態へと陥っていた。

「この刃が届きさえすれば一瞬で決着が付くというのに!」

私は悔しくなり歯噛みした。グリフォンにはなく、無能な自分に対して。

「ちっ! グリフォン如きに何をやっている! もっと集中して魔力を高めろ! ダボ共めが!」

後ろでは、王立騎士団魔術師のロンメルが、他の兵士や魔術師に対し悪態をつくのが

聞こえる。

「副隊長、このままではいずれ……」

私の隣りにいるファースが不安なのか私に話かけてきた。ファースや、私が率いている兵士たちの顔色を伺ってみると、皆だいたい疲弊しているようだ。

「大丈夫だ。きつといつか活路は開かれる」

今も魔術師達が魔法を撃ち続けているのが見える。ダークエルフである私は一部を除き、魔法を扱う事が出来ない。

エルフが遠距離、弓や魔法に特化した亜人ならダークエルフは近接戦闘に特化した亜人だ。

我ながらなんとも情けない事だ。副隊長でありながら、打開策のひとつも思いつかないとは。

「……お兄様ならこういう時どうするのだろうか？」

私が現実逃避をした瞬間、討伐に参加している冒険者の一人が叫び声をあげ、私に返る。

「な、なんだありや!?! 謎の飛行物体があり得ないスピードでこちらへ向かって来ているぞー!」

声を上げたのはどうやら盗賊の様だ。盗賊のジョブに付いている者は皆、異常に視力

が発達していると文献で読んだことを私は思い出した。

私を含め、皆が盗賊と同じ方向方を見る。集中すると、確かに黒い何かがちちらへ向かって来ているのがわかった。

「ハハツ……嘘だろ？ 目がおかしくなったのか？ なんだよあれ」

よく見ると黒く巨大な鎌の様な、槍の様なものを持っているのにも見えた。

なんだあれは？

黒い鎌が鋭い風切音と共に飛来し、グリフオンの胴体を貫いたのだ。

「KYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!？」

叫び声を上げめちやくちやに羽ばたくグリフオン。

グリフオンの胴体に突き刺さったのは槍や鎌などではなく超巨大な蟻の足であった。

「なんだ!? どこからこんなもんが飛んで来やがった!?」

後方で魔法を撃ち続けていたロンメルが声を張り上げる。

皆あまりの事に言葉を失っていた。ただ一人を除いて。

「ツしゃあ！ オラアアアアアアアアアアアア!! キーック!!」

声の主はそのままグリフオンに激突し、木々をなぎ倒していった。

衝撃によりとてつもない風が巻き起った。土煙が辺りに充満し、周りがよく見えな  
い。

皆も突然の自体に混乱しているようだ。

「皆落ち着け！ 怪我しているものはいないか!？」

私が安否確認をすると、皆落ち着きを取り戻したようだった。

「エスカ無事か？ 一体何が起こったのだ?」

この土煙の中でも燦然さんぜんと輝く黄金で出来た甲冑着こむ人物、それは王立騎士団隊長ア  
ンドリユーに他ならない。

「ああ、アンドリユー大事ない。すまん、私にも何が何やら」

突如、風が発生し土煙が嘘のように飛散したかと思うと、ある一人の人物が上空から  
我々の中心、丁度グリフォンが居た辺りに着地した。

忘れる筈もない。その現れた人物は漆黒の甲冑に身を包んでいた。

「ウインダム、ご苦労さん。戻っていいぞ。いや、間に合ってよかった。もしかしたら負けてんじゃないかと心配した。俺のマツハ10キックが無事決まって良かったぜ」

「お主がグリフォンを討伐した者か?」

「おわく金ピカだな、すつげえ派手な甲冑着込んでんな！ まあ、そうだよ。ん?」

目が合った。私は知らず知らずのうちに漆黒の騎士の元へ来てしまっていた。

「——あ、あのもしや……お兄様?」

「その全身真っ赤な甲冑に褐色の肌！ お前エスカか!? こんな所で出会えるなんて思

いもよらなかつたぞ！ 相変わらずお前は美人だなあ！ 元気だったか？」  
「お兄様あッ!!」

私は居ても立つてもいられず、お兄様に抱きついていた。

遂にこの日、私は夢に見たお兄様との邂逅を果たしたのだった。

## 第52話 俺、称号を授かる

「ああ！ お兄様！ 本当にお兄様なのですわね！」

「おうよ、ようやく会えたな。いやあ、長かった。色んな意味で」

余程嬉しいのか、エスカが俺に抱きついて離れない。

「エスカ、そろそろ離れてくれないか？ 皆が俺達をガン見してるぞ」

「ハッ！ お兄様すみません。つい」

顔をピンク色にしたエスカは即座に俺から離れ、その後ろから白いローブの魔術師が現れた。

「お前！ グリフォンのソニックブームをどうやって破りやがったんだ！ 答えろ！」

「は？ あんなもん簡単に破れるぞ？ お前そんな事も知らねえの？ その格好魔術師

か……。え？ まさかソニックブームかましてるグリフォンに魔法ブツパしてたのか？」

「そ、その何が悪い!？」

魔術師の男は大層興奮し、目を血走らせながら俺を睨み付けてくる。

「ソニックブーム中のグリフォンは魔法耐性が大幅にアップするんだよ。1番の悪手だ



ぞ？ 槍や投擲武器をぶん投げるのが一番手っ取り早い。そんな事もわかんねえの？

「そんなんじゃないよ」

「クソダボ野郎が！ チツ！」

魔術師は俺に対し捨て台詞を吐き、何処かへ行ってしまった。

「困ったものなのである。わが名はアンドリユー。アンドリユー・ザン・グラガン。王立騎士団の隊長を任されている。ロンメルの子、申し訳なく思う。あ奴は優秀な魔術師なのだが、どうもプライドが高いようだな。いつもああなのだ。許してやってほしい」

エスカの隣にいた黄金騎士が手を差し伸べてきた為、俺は応じる。

「いや、別に何とも思っていない」

「そうか。流石はエスカの兄上寛大な御仁である。ガハハハ！ さて、もうここに用はない。我等も王都へ帰還するぞ！」

アンドリユーが踵きびすを返し歩き出すと、それと同時に皆歩きだした。

「お兄様、一緒に参りましょう」

「ああ、よろしく頼む」

俺もエスカの隊に混ぜてもらい、一緒に王都へ帰還する事となった。

城へ着くなり、門番が俺の元へとやってくる。

「お疲れ様です！ ゲイン様！ 王女様が貴方を呼んでおいでです！ 貴方に王都救済の褒美を授けるとの事です！ では！」

門番の言葉に周りの皆がざわつき始めた。

「褒美くれるのかあ。特に欲しいものとかないんだけどねえ」

何処からともなく『流石、お師匠様！』という聞き慣れた台詞が聞こえてきた。

「人が多過ぎてわからんけど、アーサーも無事のようになにより」

「お兄様、参りましょう」

城の中へ入り謁見の間へと入る。

「お出でになったか！ ささ、こちらへ」

魔術師会の何とかがって言った婆さんが、王女の近くに來いと催促してくる。

「何か最初と態度違くな？」

「ひい！ その節は大変申し訳ございません！ まさか伝説の機甲兵その人だとは思

いもしませんでしたので！ 平にご容赦を！」

婆さんは思いつきり頭を地面に擦り付け俺に謝っている。

「もう良いつすよ。そんな事より伝説の機甲兵つてなんすか？」

「は、はい！ 機甲兵はその昔存在したという、機械仕掛けの人型魔導兵器だところらの文献に載っております！ その威力は人智を超えた力を持ち、機甲兵一体で世界全土を

壊滅させられるとか!」

婆さんは興奮しながらロープの中からボロボロの本を取り出して俺に見せてくる。

そこに描かれていた人物は明らかフルメタラーに酷似していた。

「おほん! 私を無視しては困ります!」  
わたくし

王女様が、咳き込みながら俺たちを見ていた。

「これは……申し訳ありません。少々興奮してしまいました」

王女様は俺に向き直り、目を閉じて喋り出した。

「漆黒の騎士ゲインよ、よく王都の未曾有の危機をよく防いでくれました。何か褒美を授けましょう。言ってみなさい」

「そうですね。では、エスカ副隊長を私にお譲り下さい」

周りにいる騎士達がざわめき始めた。

「静粛になさい。一つ聞きます。エスカには生き別れとなった兄がいると聞いていました。それは貴方なのですね?」

「はい、エスカは俺の大切な妹です」

王女は真つ直ぐ俺を見つめ、こくりと頷いた。

「良いでしょう。エスカを託します。そして貴方に機甲騎士の称号を授けましょう」

俺は王女の前に跪いた。

「顔を上げなさい。夜になったら晚餐会を開きます。皆もよかつたら参加なさい」  
「「ハッ！」」

全員が跪いた後、立ち上がり一斉に謁見の間から退出する。

部屋を出た所でアーサーとエル、そしてエスカと出会う。

「お師匠様！ お疲れ様です！」

「おつ……かれさま」

アーサーとエルが俺に労いの言葉を向けてくれる。

「お兄様！ ようやく一緒になれたのですね！」

「ホームにお前の名前登録しとかなきゃな」

「ホームとは？」

「その名の通り、俺ん家だよ」

エスカは俺の言った意味がわからないのか首を傾げている。

「まあ、見りゃわかるって」

俺はエスカの名前を登録する。

「よし、これでいつでも入れるぞ。」

「で、では今すぐ入りたいです！」

俺は、ルームキーを取り出し回すと扉が開かれ光に包まれる。

「ここが、お兄様の家の中……ですか。何か懐かしい気がします」

「そうか、それは何より。お前の部屋だが、どうする？ 空き部屋はごまんとあるぞ？」

エスカはカツと目を見開き、俺に詰め寄ってきた。

「お兄様の隣室が良いです！ いえ、なんならお兄様と同室が——」

「い、いや流石にそれはまずいんじゃないや。ああ、そうだ！ コロッセオなんかもあるぞ？」

「お前の技量なんかも知りたいし暇な時にでも手合わせしよう」

「お兄様と私が手合わせ……是非！」

エスカの目がキラキラと輝いて見える。

「流石、我が妹。お前もそっち系だったか」

その後、宝物庫をみせたり、バーに行ったりして世間話をしているうちにあつという間に夜になってしまった為、俺達はホームを出て晚餐会へと赴くのだった。



薄暗くなった城下町を一人、紫で金の刺繍が入ったローブを着た男が足早に歩いていた。男は誰もいない裏路地へと入っていく。

「チイツ！ まさかあの獣使いの男失敗しやがるとは!! クソがクソがクソがッ！ おい、居やがるんだろうが!! 姿を見せる!!」

男が叫ぶと地面に魔法陣が浮かび上がる。緑のマスクを被り長く黒いローブの様なものを着た物体が姿を現した。マスクは目の辺りに黒い穴が2つ開いているだけの簡素なものだ。

「くヒヒヒヒヒ、残念デしたねえ。もうちよつとデ巧クいきそうだったのニ」

物体は歪な声を上げながら、くねくねと身を振っている。

「相変わらず気色の悪い奴め！　で!?　どうする気だ!?　サンプルとやらを集める代わりに、俺が王座に座る為に協力する手筈なんだろうが！　ええ!?　あの黒い男のせいで完全に失敗したぞ!?　デュアルのグルーヴさんよお!」

「マアまあ、落ち着いて。急いでハ事を仕損じると云ウではありませんか。綺麗な紫のローブが乱れテいますよ?」

「しいて……何?　クソダボが!　そんな言葉しるかッ!」

男は頭を掻きながら文句を言い、謎の物体はローブの袖から触手を伸ばし赤い腕輪の様なものを差し出す。

「コレを貴方に差し上げましょう。命の危機が迫った時につけてください。きつと役に立つ時が来ます。私ソロそろ古巣へ帰らなければいけません。名残惜しいですが一旦お別れです」

「ダボが!　何の役にも立たなかったらぶつ殺すからな!」

謎の物体は地面へとけるように消えていき、それを見届けた、ロンミルもこの場を離れていく。手に持った腕輪は夕日に照らされ、血のように真っ赤に染まり輝いていた。

誰も居なくなつた筈の裏路地に、黒い物体が再び現れる。

「ひひヒ、精々頑張つて下さいネ、実験サンプルさん」

それだけ言うと、グローヴは再び地面へ溶けるように消えていった。

## 第53話 俺、晩餐会に赴く

俺達は晩餐会の会場に来ていた。長テーブルには絢爛豪華な食器や美味しそうな食べ物があるけれどもかかと並んでいる。

「お兄様どうされました？」

「いや、俺さあダンスとか一切出来ないんだけど大丈夫なのかね」

エスカはクスクスと笑い出した。

「失礼しました。お兄様大丈夫ですよ、晩餐会は貴族と親睦を深め合ったり料理を食べたりするだけで、ダンスをしたりはしません。それは舞踏会の方ですね」

「あつ、そつかあ。無駄に心配して損した」

俺が胸を撫で下ろしていると、向こうから黄金の甲冑を着込んだ人物が近づいてきた。王立騎士団隊長のアンドリューだ。

「これはこれは、御二方、それがし某も会話に混ぜてもらっても宜しいかな？」

「いいとも。アンドリュー、改めて紹介する。私の最も尊敬する人、ゲインお兄様だ」

エスカが一步下がり片手を俺の方に向けると、間にアンドリューが入ってきて手を差し伸べてきた。



アンドリユーは2メートル以上ある巨体だ。手もかなり大きい。俺はそれでかい手をガツチリと掴み握手に応じる。

「——ふむ、やはりかなりの修羅場をくぐってきたと見える」

「そうかい？ そいつはどうも。あんたもこの世界の人間にしちや良いからだしてるよ」

「この世界？」

「——ツ!? いやいやいや、口が滑ったこの国の間違いだ。気にしないでくれ。H A H A H A H A H A！」

俺が言い訳をしていると、クラシックの様な音楽が聞こえてきた。

「どうやら晩餐会の準備が整ったようだ。アンドリユー、お兄様、ドレスアーマーに着替えてきますので、失礼致します」

「うむ」

「ああ、わかった」

エスカは俺達に一礼し、去っていった。

「なあ、ここだけの話。王立騎士団ってどういった組織なんだ？」

「どういったも何も、そのままである。王都に起きる厄災から民を守るために組織されたのが王立騎士団である」

「ふーん、お前が隊長なのは一番強いからか？」

「そうだ——と言いたいところではあるが、残念ながら戦闘力で言うのなら、そなたの妹君であるエスカの方がずっと強いのである」

アンドリユーは腕を組み直し一呼吸入れる。

「エスカが王女様をお救いになり、副隊長に任命された。本来であれば隊長になってもおかしくはない。何故副隊長に任命されたかわかりか？」

「……いや、何故だ？」

「彼女はダークエルフ……亜人だからである。昔より良くはなったが未だ亜人の差別は続いているのである」

俺は頭を抱えなくなった。

「くそつたれな話だ」

アンドリユーは俺の言葉を無視し話を継続する。

「王立騎士団にはエスカの他に犬獣人のファースがいる。彼も本来であればそれ相応の立場にいるべきなのだが……」

「嘆かわしいな」

「誠に。某もそう思う。だが我らに常識を変える力はない。それを持つのは王だけである」

ウエイターが通り掛かった為、俺はシャンパンの様な飲み物を手に取る。

そのまま外格を解除し顔をさらけ出す。

「なんと……これは驚いた」

「ん？ ああ、すまん。うるさかったか」

アンドリユーは小さく首を振る

「そうではない。エスカの兄上と聞いていたものだからエルフだとばかり」

俺は飲んでいたシャンパンを盛大に吹いた。

「ブツーーーーー!! え、えつとだなあ、これはそのく、あ！ そうですねばエスカが副隊長になる前は誰が副隊長だったんだ？」

「ロンメルである。あ奴は優秀な魔術師のだが、態度が悪くおまけに勝手に行動を起こすため、何かとトラブルの種になっていた。困ったものである」

「ふーん。そういうや、居ないな」

「また、どこかで油でも売っているのだろう。折角の王女による晩餐会だというのに……某だったら死んでも駆けつけるというのに」

俺は黄金の甲冑の奥の顔を透視機能をオンにし、覗き見る。そこにはブラウンの髪をし、右の頬に縦に一閃ガッツリ切り傷が付いた二ヘラ顔で鼻の下を伸ばす美丈夫の顔があった。

「なるほどなるほど、王立騎士団隊長アンドリユー殿は王女様がお好きなのですねぇ」  
「なななんななな何をお主は言っているのだ?！」

アンドリユーは声が完全にうわずっている。

「大丈夫、俺とお前の秘密だ。上手くいくかは知らんが応援している。とりあえず鼻の下を伸ばすのはやめた方がよいぞ」

「何故?! そのことを?！」

俺がアンドリユーをからかっていると歓声のような声が聞こえた。

見ると入り口に黄色いドレスを着た王女様と、連れ添うように歩く白いドレスアーマーを着たエスカの姿があった。

「王女様、では私はこれにて」

「エスカ、エスコートありがとう。会場の皆様。晩餐会に来ていただき誠に嬉しく思います。今日は王都の危機を救って下さいました、機甲騎士ゲインに対する、せめてものお礼をと思い晩餐会を開きました。存分に楽しんで下さい」

王女が挨拶を言い終わると、皆料理に手をつけ始めた。

俺も適当な料理に皿に載せパク付いていると、エスカが俺元へとやってきた。

「おお、エフカ——ご苦労さん。その真つ白なドレスアーマーすごく似合っているぞ」

「ありがとうございます! お兄様!」

「俺は、お前さんみたいな綺麗な顔立ちはしてないからね。みつともなく写つてなきや良いが」

「そんな！ とんでもございません！ お兄様はどんな男性よりも素敵です！」

エス力は真剣な眼差しで俺に詰め寄ってくる。

「そ、そうか？ あ、ありがとう」

「兄弟仲睦まじいですな！ガハハハ！」

「副隊長！ 大変お綺麗です！」

いつの間にか俺達の隣にはアンドリユーと犬の獣人のファースがいた。

「きみがファース君か、よろしく」

「ハイ！ よろしくお願ひします！」

ファースは尻尾をブンブン振り回しながら俺と握手を交わす。

ファースの犬耳はペタンと寝ているタイプだ。顔自体は普通の人と変わりが無い。

手を見ると茶色い毛に覆われている。少々黒い爪を生やしているが指も5本あった。

こうやって見るとやっぱほとんど人間と変わらないな。

旨い舌鼓を打ち、談笑している内にあつという間に晩餐会はお開きとなった。

4時間後……。

俺とエスカはホーム内のコロッセオで対峙していた。

## 第54話 俺、エスカと組手をする

「さて、我が妹よ。お前がどれだけやってきたのか見せてもらおうか」

俺達は夕暮れのコロッセオの中で互いに構える。

しかしエスカは一向に目を閉じたまま、剣を抜こうとしなかった。

「どうした？ 何故剣を抜かない？」

俺がエスカの様子を伺っているとカツと目を見開き大声で喋り出した。

「お願いがあります！ お兄様!! 私が勝つたらそのヘルメット必要な時以外脱いでください!! お兄様はみつともなくありません!! あと——」

エスカの顔がみるみるピンク色になってき、急にもじもじしました。

「あと、なんだって？」

「スウ〜、よかつたらお兄様と一緒に寝たいですツ!!」

迫真めいたエスカからの一緒に寝たいコールに一瞬ズツコケそうになったが、寸前の所でなんとか耐える。

「何かと思えばそんな事か。兜は正直、あんまり脱ぎたくないが寝るのは別に良いぞ。……そうだな、俺に参ったと言わせることが出来たら、お前の言う通り兜を脱いでやる

う」

「本当ですか!？」

「男に二言はない」

エスカはニーベルングスレイヤを抜き、高らかに声を張り上げた。

「王立騎士団副隊長エスカ！ 推して参るッ!!」

「オラオラ来いよオラアツ!!」

「お二人共頑張ってくださいーい!」

「眠い……がんばえー」

アーサーと今にも眠りそうなエルの声援が聞こえる。

エスカはニーベルングスレイヤを振りかぶり、ムチのように伸びた刃が俺に向かってくる。

「フツ——笑止」

俺は向かってきた刃を右手で掴みとり、思いつきりこちらへ引き寄せる。初撃でニーベルングスレイヤを俺に向けてくるだろうと思っていた。

あの剣はムチのようになり、近く中距離までの攻撃に最適な武器なのだ。

「甘いぞ！ その剣は俺がお前にやったもんだ。特性だろうが弱点だろうが頭に……」

エスカは刃を掴まれているというのに笑っていた。



「入っている。そう言いたいんですよね？ お兄様？」

突如俺の脇腹に衝撃が疾走り、周りの景色が振れ片膝を突く。

「グツ!? 何!？」

横を見ると知らぬ間にもう一人のエスカが俺の懐に入り、掌打を決めていた。

「ミラーージュボデイか!」

「その通りです。流石、お兄様存じていましたか! この技を!」

ミラーージュボデイは戦士職のジョブが覚えられる攪乱用のスキルだ。

自らの分身を生み出し牽制や攪乱に使われる。

このスキルは熟練度をMAXにすると分身そのものに当たり判定が発生するようになり、そのまま攻撃や肉壁として使えるようになる。

主にソロプレイの戦士職達に好んで使われるスキルである。

閑話休題。

「チツ! 実態付きとは大したもんだ! 良くそこまで昇華させたな! 流石、俺の妹

だ。ん? 待て? お前何故俺の言いたい台詞がわかった?」

「勝つたら教えてさしあげます」

「なんだ反抗期か? お兄ちゃんは悲しいぞ。俺に放つたのは八景掌だな。目がクラクラしたぞ」

エスカは未だ一歩も動かず、ニーベルングスレイヤを構え静止している。

「余裕のよっちゃんって感じか？ でも、残念ながらやっぱお前は甘いよ」

「何を言っているのですか？ 私は未だ一撃も貰っていない——ゴハッ!」

エスカは突如、口から吐瀉物をぶちまけながら両膝を地面につけ苦しみ始めた

「な、何?! 何も見えなかったのに!」

「俺はお前の剣を掴んだ時に痛み分けというスキルを無詠唱で発動していた。PVPでは予めカウンタースキルを詠唱しておくのは常識だよく覚えておけ。お前の八景掌良い威力だったぞ」

「……」

エスカはいつの間にか気絶していた。

エスカが気絶から回復して……。

「やはりそうか、お前未来を視る事が出来るんだな。凄まじいチートスキルだ」

「そうです。対象を視認し任意で発動すると相手の3秒程ですが、先を視ることが出来ます。しかし、カウンタースキルで返り討ちにされるとは思いませんでした」

「エスカまで……俺は……いつになったら覚えられるんだろう」

俺は遠い目をし、夕焼けのコロッセオの外壁を見つめた。

「お兄様、お見逸れいたしました。私の負けです」

「あ、約束の件なら別に良いぞ兜ならいつでも付けれるし。なあ、ネメシス」

「そうですね、兜どころか全身がなくなるとも呼んで頂ければ即着装が可能です」

「うむ、流石ネメシス有能」

エスカが目を白黒させながら俺を見ていた。

「お兄様から女性の声が!? お兄様はお姉さまだったのですか!?!」

「んなわけないでしょ!?! ——つて何かだいぶ前にもアーサー相手に全く同じ会話したわ!。えっと、ネメシス妹のエスカ。エスカ、俺の外格に住んでる妖精のネメシスだ」

「お初にお目にかかります。エスカ様、ネメシスと申します」

「妖精が宿った甲冑など聞いたことがない。まず妖精は信頼関係を築き、妖精王に認められて初めて行使が可能になるはず。いやそれよりも、人語を話す妖精など妖精王以外に存在しない筈……」

エスカは人差し指と親指を顎に付けブツブツと喋りながら何かを考えていた。

俺は精霊術という召喚スキルを持っている。これを使うには精霊と契約し信頼を得て初めて行使することが出来る。汎用性が高く誰でも習得できるが、ハガセンでもあまり人気の高くない召喚スキルだ。

何故か? 異常に手間がかかるから他ならない。しかし信頼さえ得ることが出来れ

ばサモナーや獣使いより有能で多彩なスキルが使えるようになる。

### 閑話休題。

「で、どうする？ 俺は構わんよ?」

「ハッ!? すいません。ほ、本当によろしいのですか!? じゃ、じゃあ、寝る時間になったらお兄様の部屋に寄らせて頂きます」

「了解」

「お疲れ様でした皆さん」

エルをおぶったアーサーが俺達に近づいてきた。

「おう、乙」

「勇者アーサー、私はお前とも是非、組手をしたい。暇な時よろしく頼む」

アーサーの顔がみるみる曇っていく。

「僕は……その……エスカ副隊長さんのように強くありませんから……」

「何を言っている？ 強い強くないの問題ではない。私はお前と組手をしたいだけだ」

「まあまあ、この話はまた今度で良いだろう。もう遅いし明日にしよう」

エスカとの組手が終わり、各々の部屋へと皆戻っていった

俺は自室に戻り機動猟兵メウロスを見ていた。青色のロボットが敵の巨大ロボに

レーザービームを浴びせ爆発、勝利するシーンが流れている。

「ああ、たまらねえぜ。やはりロボットアニメは最高や」

俺が愉悦に浸っていると、扉のノックが聞こえた為入室を許可する。

「エスカか？ 入って、どうぞ」

「お邪魔い、いたします……」

いつになく元気のない声になった俺は、ポータブルプレイヤーから目を離し顔をあげると、そこには全裸のエスカが立っていた

「おおお前なんちゆう格好で来てんだ!」

「一緒に寝てくれるとおしゃって頂きましたので……」

「寝るってそっち!? エスカさん色々とまずいですよ!」

俺がポータブルBDプレイヤーと機動猟兵メウロスのブルーレイボックスを大急ぎでインベントリの中に入れていっていると、Ⅷ式ヤルダバオトⅧ式の目が光り独りでに動き出した。

「何を騒いでいるのですか？ 全く」

「ネメシス！ なんとかしてくれ!」

「承知しました」

ネメシスはベット上にあがり俺の頭の辺りで正座をし枕を膝につめ、ガツチリと俺の

手を掴み、ベットに押し付けた。

「え？ い、いやいやなにやってんの？」

「なについてプロレスですよ？ 存分にお楽しみ下さい」

「ち、違——」

「私の愛、受け取って下さい」

その夜、エスカがめちやくちやハッスルしてた。

## 第55話 俺、アーサーの実家に行く

起床するとエスカの姿はなかった。

「いやあ、昨日はとんでもない目にあつた」

俺の声に反応したのか、ネメシスが俺にお辞儀をする。

「おはよう御座います。昨夜はお楽しみでしたね。人間の生殖行為に興味がございました。大変有意義な時間でした」

「やはりわざとだったのか。酷いやつだ」

俺はインベントリから適当なチュニツクとズボンを選び着込んでいき、上は緑のTシャツのようなチュニツク。下は茶色いズボンを着用する。

「ヤルダバオトⅧ式のグリーブとサバトンだけ着装していく。今日からこれで行こうと思ふ」

「承知しました。ゲイン様」

外格の膺すねと足の部分を残し、ヤルダバオトⅧ式は消え去り残されたグリーブとサバトンが独りでに内部が開き俺に取り付く。

「あつそうだ、折角だし決め台詞みたいなのを決めよう。変身ヒーローみたいでそつち

の方が格好いい」

「決め台詞……でございますか？　昨晚申しましたが、そんなものなくとも私を呼んで頂ければ——」

「いや、これは絶対に必要だ。男の浪漫だからな！　そういうえば、俺が呼ばなくともお前たちは換装や着装をしてくれるが、他の外格つて何処でどうなってるんだ？」

「専用の空間に各自待機しています。主人であるゲイン様がコールなされることで即召喚、換装、着装が可能という手筈になっております」

「へえ、そういう仕組みになってるのか」

俺は別の空間にいるという外格達が並んでいる光景を頭に思い浮かべる。

「願わくば行ってみたいもんだ」

「恐れながら、それだけは不可能です。あの空間は絶対不可侵領域ですので」

俺は気を取り直して決め台詞を考えることにした。

「うーん、短いのが良いな、外格……着装……外着で良いか。よし、俺が外着つて言ったら残りの外格を召喚してくれ」

「承知しました。ゲイン様がそうしたいのであれば」

俺が部屋を出ると皆、エントランスに集まっていた。

「おはよう御座います！」



「おは………よう」

「おはよう御座います。お兄様」

「おはようさん。皆、今日は王都を見て回りたいたいから各自、自由時間とする」

エス力が俺の隣へやってきて、徐ろに手を握った。

「お兄様、私のわがままを聞いてくださりありがとうございます。そして昨日は申し訳ありませんでした」

「あ、ああ、うん。まあ俺もお前をずっと一人にしていた訳だし、多少はね？」

俺がエス力をなだめているとアーサーが手を上げた。

「ん？　なんだ？　どうしたアーサー？」

「ハイ！　実家に一度帰りたいのですが、宜しいでしょうか？」

「あく、そういうえげば出会ってばっかの頃に王都出身だと言っていたな。そうだ！　折角だからアーサーの実家に挨拶に行こう」

俺がそう切り出すと急にアーサーが焦りだした。

「い、いえ！　着替えとかを取りに行くだけですから、わざわざお師匠様に出向いてもらうなんて！」

「お前は何を言ってるんだ。師匠兼従者だからこそ、余計行かなきゃならんだろう」

「お兄様、王都の道順なら私にお任せください。地図は頭の中に入っています」

「私……適当に暇潰してる。お菓子食べたい」

「よし、そうと決まればイクゾー！」

俺達はホームを抜け、少し歩き広めな道へと出る。

「エスカは道案内で、エルが買い食いか。集合場所を決めておいたほうが良いな。エスカどこか適当な場所はないか？」

「そうですね、では大広場の掲示板などいかがでしょうか？」

「そこで良いぞ。案内を頼む」

エスカのに付いて行くとそこには人が大勢おり、屋台が沢山並んでいた。

広場中心に大きなピラミッド型の物体があり、紙の様なものが沢山貼り付けられている。

「あれが掲示板です。お兄様」

「確かにあれは目立つな。よし、ここを集合場所とする！ では、解散！」

俺が高らかに宣言するとエルは一直線にある屋台へと走っていった。見るとクレール屋の様だった。

「あいつ、スイーツが好きなんか。知らなかった」

「では、アーサーの家に参りましょう」

俺とアーサーはエスカの後ろに付いて行き、大広場を抜け歩き続けること4分弱、居

住区の様な所へ着くと、とある一軒家でエスカの足が止まった。

「確か、ここがアーサーの家です」

アーサーの家は木造で出来た中々立派なペントハウスの様なデザインをしていた。

「お、良いじゃん。綺麗な家だな」

「ありがとうございます！ 皆さんどうぞ、入って下さい」

アーサーが玄関の扉を開け、その後エスカと俺も家の中へと入っていく。

「ただいま戻りました！ お父様お母様！ いますか？」

アーサーが声をあげると、家の奥からメガネを掛けた金髪の優男が現れた。

「おお、アーサーじゃないか！ 良く帰ってきたね。後ろの人達……真紅の甲冑に褐色

の肌。——まさか副隊長殿!」

「突然の訪問を許してほしい。縁あつて勇者アーサーと行動を共にさせて貰っている。

王立騎士団副隊長エスカだ。よろしく」

エスカが手を伸ばし、アーサーの親父さんと握手している。

「我々が安全に外に出られるのは騎士団のおかげです。特に副隊長殿は熱心に見回りをなさつてらっしゃる。私も買い物がてら姿を何度もお見かけした事があります」

「そんな、あれは私が勝手にやっていることだ。大したことではないよ」

俺がエスカが褒められるのを見て、懇親のドヤ顔をしているとアーサーの親父さんが

俺の方を見た。

「君は？」

「あつ！ ども、始めまして。勇者アーサー殿の従者やつてます。ゲインです。よろしくどうぞ」

俺は親父さんの元へ行き握手をした。握手をした瞬間とても懐かしい感覚を受け、俺の思考は一瞬停止する。

「これ……この感覚」

「君……いや、貴方は……すまないアーサー、この人と個人的に話したい。申し訳ないがエス力殿と一緒にリビングへ行っていてくれ」

「は、はいわかりました」

エス力とアーサーは部屋の奥へと消えていった。

「この家には地下室があります。そこで貴方と話したいことがあります」

「わかった。行こう」

俺はアーサーの親父さんと後に付いて行き、薄暗い地下室へとやってきた。

地下室の中は意外と広く人が十人程度なら十分入れる広さがあつた。高さは4メートル近くある

「あんた、まさか」

「ご存知ですか？ 世の中には2つの魂を持つ人間がいることを。僕もそうなんですよ。貴方と握手した瞬間もう一つの魂が貴方と会話させろってうるさくって。ちよつと変わりますね」

アーサーの親父さんが目を閉じたかと思うと、全く違う男性の声で喋り出した  
「愛弟子ゲインよ、久々じゃのう。どこで何をやっておった」

「マジかよ、これが零影が言ってた御魂返りって奴か。しかもアーサーの親父さんがそうだったとは。どこで何をつて見りや分かんदार。アーサーの実家に挨拶に来てんだよ。あんただってなんでこんなことになってんだよ？ ガイドウの爺さん」

そこには御魂返りによりアーサーの親父さんの姿となった俺がハガセンで師事していたNPCのガイドウがいた。

## 第56話 俺、ガイドウと一騎打ちをする

「そうさあなあ、かくかくしかじか。色々あつたんじゃ」

「もうね、明らかに面倒くさがってるよね」

「うっさいわい！ 儂はあれこれ考えたり喋ったりするのは苦手なんじゃ！ さあ、愛弟子よ！ 抜けい！」

ガイドウはバックステップし、俺から距離をとり何本か立てかけてある中から一本の剣を取り、構えたまま動かなくなった。

「さあ、死合おうぞ」

「しまらねえな」

「何じゃと？」

「しまらねえつつたんだよ。やっぱガイドウの爺さんならこつちだろ」

俺はインベントリから二本の刀を取り出し、一方をガイドウへ放り投げる。

受け取ったガイドウは鞘から刀身を抜き、しげしげと見た後ニヤリツと笑った。

「良い刀だ。かたじけない貰っておこう」

「ああ、良いぜ。とつとと始めよう。一発勝負のデュエルで良いよな？ 攻撃をぶち当

てたほうが勝ちな」

俺達は互いに刀を握り、構えを取り、ジリジリとずり足で微調整しながら間合いを取り合う。

俺はガイドウが完全に間合いに入ったのを確認し、火蓋を切る。

「ガイドウ流剣術奥義 神域・裂斬」

神域・裂斬は前方に対し、完全無敵状態になったまま敵に突貫するという一騎打ちに最も適したガイドウ剣術の技の一つである。

「ガイドウ流剣術奥義 後牙一閃」

ガイドウと俺の刃が交差し火花を散らす。一瞬の静寂、突然俺の背中から縦に血が吹き出した。

「何をおおおおおッ!?!」

「まだまだ青いの。間合いから既に神域・裂斬を狙っておったのがまるわかりじやったからの。後ろを取らせてもらった。精進せい」

「わかった! わかったから出血を止めてくれ! 背中じゃ手が回らねえからエクストラヒールかけねえんだよ!」

ガイドウは俺の後ろに回るとエクストラヒールを詠唱し俺の傷をあつという間に完治させた。

「後牙一閃は抜刀からの斬撃の余波を背中に伝え、前方にいながら後ろを取ることが出来る儂の編み出した新技よ。正直、汎用性は皆無に等しいが一騎打ちやハツタリに効く。どうじゃ？」

「どんな技でもいつか役に立つ時が来る。教えてくれ」

「うむ、その通りじゃ。流石、我が愛弟子。ガイドウ流剣術奥義 後牙一閃、貴様に伝授する」

ガイドウは俺の前に経つと、俺の額に手を当て、すぐに手を離れた。

「確かに伝授したぞ。さっきも言ったが、精進せい我が愛弟子ゲインよ。久々に面白い死合いであったぞ。ではさらばじゃ」

ガイドウが刀を鞘に戻し壁に立てかけ目を閉じふらつくと、既にアーサーの親父さん意識を渡したのか、尻もちをついた。

「——うわッ！ いきなりタツチしないでくださいよ！ びつくりするじゃないですか！」

タツチ？ 一体どうやって意識変えてるんだ……？

土埃を払いながらは立あがろうとする親父さんに、俺は手を差し伸べる。

「ありがとうございます。いや、素晴らしい太刀筋でした。僕には死んでも真似出来ないでしょうね」



「え？ 意識乗っ取られてるとかじゃ？」

「乗っ取られてますよ？ ただ視ることだけは可能みたいなんです。あ！ 申し遅れまして大変申し訳ない。ローリンです。よろしく」

ローリンはメガネをクイツと上げながら、俺に向かってナイススマイルで微笑む。

「どうも、こいつはご丁寧に」

「さあ、ゲイン殿。家内が料理の支度をして待っている筈です。参りましょう。自慢じゃありませんが家内の料理は中々美味ですよ」

俺はアーサーの親父さんローリンの後について行き、地下室を後にした。

## 第58話 俺、アーサーのリュックサックを確認する

アーサーの実家を出た俺達は一旦広場へと戻る。

「では、ここからマジで自由時間とする」

「ハイー！」

「私は見回りに行かせて頂きます。では」

「ん、……ばあつふぁ」

エルは広場にある露店でお菓子を買い漁っていたようだ。手にはいっぱいのお菓子の山。

口にはペロペロキャンディを突っ込んで喋っている。

「あのさあ……エル？ 一度お菓子置こうよ。あと口に食べ物突っ込んだ状態で喋っても何言ってるのかわかんねえから」

エルは抱えていたお菓子を床に起き、口からはみ出ているキャンディの取手を掴み引き抜いた。

「もおわ。わかった」

「ああ、うん。そのお菓子は——とりあえずアーサーのリュックサックの中にでも入れ

させてもらえ」

エルは地面に置いたお菓子を両手で拾い上げると千鳥足でアーサーの元へ近づいていく。

「お菓……子をお願い」

「ハイ、良いですよ」

アーサーは背中に背負ったリュックを地面に置くと、リュックのフォックを開けた。すると、エルの手に持った全てのお菓子が宙に浮き、リュックの中へ吸い込まれていった。

「……………これは！」

「す……………」

「勝手に吸い込まれていきました！ どうなってるんですかね？」

俺はおもむろにリュックの中を覗く。リュックの中は小さなブラックホールの様なものが入っており、お菓子はどこにも見当たらなかった。

「間違いねえ！ これは【何でも入る君リュックサックver】だ。生産職を極めた者でも作れる確率は0.0001%以下っていう最狂マジキチアイテムだ！」

「そ、そんなに凄いアイテムなん……ですか？」

「凄い？ 凄いなんてもんじゃねえ！ 俺ですら何千何万回と作ろうとして出来たのは

ウエストポーチレベルだぞ？ 持つてるだけ神もしくはキチ○イ扱いを受ける。今お前が背負ってるリユックはそういう代物なんだよ！」

ハガセンのアイテムにはコストが設定されており、インベントリ内に保存する場合キヤパシティよりけりだが、必ず限界がやっっている。

課金すれば幾らでも拡張できるのだが、無課金戦士やケチンボ廃生産職プレイヤーにはその選択肢は存在しない。

一部の廃プレイヤーと無課金プレイヤーが運営に突撃し、緩和策として作られたのが何でも入る君シリーズだ。

何でも入る君を作る条件は常軌を逸した難しさであり、まず大前提として生産職で作れるアイテムを9割コンプシートする必要がある。その上幾つもの素材をドブに捨てて神に祈りながら出来るのを願う。

大抵の生産職——いや、まともな思考回路を持つ人であればやろうとは思わないだろう。その何でも入る君シリーズで最も出来る確率が少ないのがリユックサクバージョンである。

こいつのヤバイ所は例のブラックホールの様なものそのものだ。噂によるとあの中に入ったアイテムはコストが0となり実質容量は無限となる……らしい。

閑話休題。

「それは俺ですら持つていない恐らくこの世で最もレアな代物だ。そのリュックに比べたら俺がお前にやった魔剣などヒノキの棒みたいなもんだ」

「僕の……お母様つて……いい、一体……」

「……自分で聞け。そうだ、一度確かめたい事がある。リュックの中に手を突っ込んでみても良いか？」

「はい、どうぞ」

俺は恐る恐るリュックの中に手を突っ込む。中は空洞化しているようで何も掴む事が出来ない。

「ん？ エルが買ったお菓子が無いぞ？ 何処だ？ 何でもいいからお菓子を……」

俺がそう言った瞬間手に感触が伝わった。掴んでみると棒状のお菓子ようだ。俺はそれをしっかりと握る。

「よし、掴んだぞ。ネメシス今掴んでいる物体のキャパシティを測つてくれ」

「今掴んでいるチョコバーのコストは0となっておりません」

俺は思いっきりチョコバーを掴んだまま手を引っ込める。

リュックから引っ込めた手にはブラウン色の包み紙に包まれたチョコバーが確かに握られていた。

「ネメシス再び計測してくれ」

「チョコバーのコストは0.5です」

「まさか本当に0になるとは……とんでもないな。あの女……出来るッ!」

俺はチョコバーを再びリュックの中へと戻そうとしたところ、エルが凄いスピードで俺からチョコバーを掠め取った。

「食べる」

「あ、あつそ。どうぞご自由に」

エルはチョコバーをニヤニヤしながら食べるとまたお菓子屋に並び始めた。

「あいつどんだけ甘党なんだよ……」

「お師匠様! もう大丈夫ですか?」

「悪かったな。アーサーもう良いぞ。お袋さんが作ってくれたリュック大切にしろよ」

「ハイ!」

アーサーはいつも以上にニコニコ笑顔だった。

## 第59話 俺、大衆酒場に行く

「じゃ、俺もちよつくらぶらぶらさせてもらおうかな」

「僕部屋で待つてます。着替え整理したいですしとてもじゃないですが、このリュックを背負って歩く自信がありません」

「わかった。まあ、昼寝するなり運動するなり好きにしてくれ。見られるとヤバイから速攻で入ってくれ」

俺は辺りを見回しキーを回すと扉を出現、アーサーは足早に中へと入っていった。

「よし、幸い見られなかった様だ。俺も行動開始しよう」

俺は足の踵を2回コンコンと叩く。すると脛すねが開き小さく白い蜘蛛の様な物体が手のひらに乗る。

「エクステンションスパイダー。こんなのが役に立つ時が来るとは。流石異世界。ハガセンじゃスーパーネタガジェットだったからなあ」

コンコン、コンコンと何回か地面で踵を叩き、エクステンションスパイダーをどんどん手のひらに載せていく。

「まずはこの広場だな。5機位で良いだろう。行け」

おれが命令すると5機の蜘蛛の形をした小さなロボットは、広場に散らばっていく。「よし、じゃあ次は住宅区に行こう」

俺は独り言を言いながら歩き、住宅区へ向かう。アーサーの家族が住んでいるのがその辺りだ。

「出戻りみたいでなんかかつこ悪いけど一番ばら撒き安そうだし仕方ない」

暫くして家々が見えてきた。

「よっしゃ。ここからが本番だ。」

俺は住宅区道をゆっくり歩きたまに立ち止まっては踵を叩き、エクステンションスパイダーを出して家々に放っていく。

「よしよし、良いぞー。どんどん家に入っていけ」

エクステンションスパイダーの体は液体金属で出来ており、小さ過ぎて入れそうになる隙間でも問題ないのだ。

住宅区を隈なく周りどんどん放っていく。住宅街を周り終わる頃には日が傾き始めていた。

「やっべ。夢中になり過ぎて知らんうちに夕方になってた。もうちよいやりたいなく。ネメシス、近くに人が集まる所ないか？」

「300メートル程東に行ったところによく多くの人の反応が見られます。恐らく大衆酒場



かと」

「大衆酒場！ 良いねえ。 んじゃ、さっそくいきまひよ。 いざ、鎌倉」

俺は早歩きで大衆酒場へと向かう。大衆酒場はとて大きな木造の建物だった。ドアを開けると、いかにもなケルト風の音楽が奏でられており、皆騒ぎながら飲み、食べ、語らっているのが目に入った。

俺は酒場へ入り適当な席へと座る。そして踵を叩き、何体かが散らばっていくのを確認する。

「よし、折角だし酒でも飲むか。あのすんませーん！」

「はい〜！ ちょっと待って〜。今行くから〜」

俺の声に反応した店員さんが俺に近づいてきた。店員さんはオレンジの髪を三つ編みにし、鼻の少し上辺りにソバカスをしたタレ目のおっとりとした雰囲気的女性だ。胸のがつつり開いた赤い服を着ており、下はフリフリの水色スカートを履いている。

「いらつしや〜い。何にしますかあ〜？」

「んとね。ビール頂戴」

「ビールだとジョッキしかないんだけど良いかしら〜？ あとシェフ長が今日はファイ

アーベアーのステーキがオススメだって言ってたの〜。」

「じゃあ、ビールとそれで頼みます」

「あつ、追加でサービスするけど〜？ どうします？」

「サービス？」

俺が首を傾げると店員さんはクスリと小さく笑った

「うん。ここね〜？ 娯館も兼ねてるの〜。1番最初にビール頼むのはその暗号みたいなものなの〜。どうする？ する〜？」

「いや、俺は良いよ。そういう気分じゃないしね」

「そう。わかつたの〜。ビールとファイアーベアーのステーキつね〜？ ちよつと待ってて〜」

店員さんはカウンターの奥へ歩いていった。

「なるほどね〜。だからあんなエロい服来てるんだな〜。しかし言っちゃなんだがアホっぽさ満点の女の子だ。大丈夫なんだろうか？」

暫くして店員さんがステーキとジョッキに入ったビールを持ってきてくれた。何故か頼んでいないが水の入ったコップも持っている。

「は〜い。お待ちど〜。熱いから〜気をつけてね〜？」

ファイアーベアーは文字通り炎を纏った熊のモンスターだ。今現在も肉は赤い炎を発している。

「ファイアーベアーの肉なんて食おうと思った事ねえな。どうやって食べるんだこれ

「？」

店員さんは俺の顔を見てクスクス笑っている。

「お客さん。知らないんだ？ 教えてあげる。あのね？ 水あるでしょ？ これを鉄板の周りにドバツてするといんだよ？ やったげる」

炎を発している肉の周りに水を店員さんがふりかけると、炎が収まり旨そうな匂いと弾けるような音とともに肉汁が肉から溢れ出した。

「おお！ これは美味そうだ！ いや待てよ確か——」

俺はエルは親父さんの家での一幕を思い出していた。確かにこのステーキは頗る美味そうではある。しかしこの異世界ローゼスでは調味料や香辛料の文化がないに等しいのだ。

「店員さん、付かぬお伺いしますが塩コショウなんて……ないよね？」

俺が恐る恐る聞くと店員さんが俺の隣にいきなり座ってきた。

「凄くいい！ なんでシオン・コーションの事知ってるの？ 料理長がモモンガシユツパツって言ってたのにな！」

「モモンガシユツパツ？ あ！ 門外不出か」

「なんかね？ 何処かの凄い商人さんが新しい料理に使う魔法の粉を手に入れたんだって！ この料理長がね？ その凄い商人さんの幼馴染らしくって、レシピと

材料を格安で譲りうけたんだって〜！ その粉を振りかけるとお肉が凄く美味しくなるの〜！ このオーナーの奥さんがその粉がかかったお肉を泣きながら食べてたら良く覚えてるの〜！」

間違いなくその商人とはエルの親父さんの事だ。ごく一部の様だが、どうやら俺のレシピと調味料等が広まりつつある様だった。

「へえー、そっかそっか。教えてくれてありがとう」

「あー！ 言っちゃた〜！ 内緒にしてね？」

「もちろん。誰にも言わないよ」

俺がそう言うのと店員さんが俺に覆いかぶさりキスをしてきた。

「——!?!」

「本当にしなくても良いの〜？」

「お、お気持ちだけで結構です……」

「今日は受けが悪いの〜。皆喜んでくれるんだけど。そういえば、お客さん以外にもう一人同じ様な人がいたの〜！ なんか変な格好した人で紐みたいな腰にぶら下げた〜！ 顔に変わった刺青してたから良く覚えてるの〜」

紐みたいな物、変わった刺青と聞いて俺は一人の人物を思い浮かべた。

ほう、例の彼無事王都に入れたみたいだな。ざる過ぎる。いや、そんな事はどうでも

いいか。

「そいつ、もしかしたら知り合いかも。何処に居るか教えてもらっても？」

「イイよ。2階の1番奥のテーブルに案内したのよ」

「そうか。ありがとう店員さん」

## 第60話 続 俺、大衆酒場へ行く

俺は鉄板とジョッキを持って2階へと上がり1番奥のテーブルを覗くと、緑の髪、右の頬に黒い炎のタトゥーをした少年が小さな一角を生やした青いリスを撫でながら、お茶を飲んでいるのが見えた。

俺は歩きながら近づいていき、隣の席へと座る。

「あ、あのく出来れば別の席へ移って貰えると——」

「よ！ 久方ぶり！ 俺を覚えてるか？」

少年はドギマギしながら俺の方を見ている。

「だ、誰かと間違えていませんか？ 僕はここでは新参者なんで……」

「なんだ。あんな強烈な出会い方したのにもう忘れたのか？」

「恐れながらゲイン様、今はグリーブとサバトンのみ着装した状態ですのでわからないかと」

俺はネメシスの進言を聞き、俺は後頭部を軽く搔く。

「あー！ そうか！ うっかりしてた！ ほら、お前の足を撃ち抜いたのは俺だよ！ お前王都に入れたんだな！ 良かった良かった」

「——ひい！ 殺さないで！ お願いします！ 何でもしますから！」

猛獣使いの少年は俺とわかつた瞬間ガタガタ震えながら土下座しました。

「ん？ 今何でも——つて違う！ 馬鹿馬鹿！ 人聞きの悪い事言いながら何やってんだ！ 立て！ いや、座れ！ 何もしねえから！」

俺はビクついている少年を何とかなだめる事に成功し、話を進める事が可能になった。

「で？ 少年、君はどうやってローゼスに来たの？」

「僕、昔から虐められてたんです。それである日、いつもの様に呼ばれたら大切にしていた野良猫を目の前で殺されたんです。カツとなつてもみ合いになつたんですけど、ふっ飛ばされて勢いで後頭部に石ぶつけちゃつてそのまま。僕生き物が大好きで、特にリスが好きなんです。ハガセンの召喚獣は可愛いの中から格好いいのまでいっぱい居て、楽しいから」

少年が一角リスの面倒を見ているのを観察しながら、俺はビールと肉を喰いつつ話を耳を傾ける。

「へえ、そんな事がねえ。少年名前は？」

「すいません。僕リズロつて言います」

「俺、ゲインよろしく。ジョブは言わんでもわかるわな。リズロ君はなんで王都に入り

たかったんだ？」

「は、はい、実は……この酒場で働いている人に……ひ、ひとめぼれしまして」

まさかの理由に俺は固まる。

「マジでか。そういう理由だったんか」

「は、はい」

「んじゃあ、もし俺が君を止めてなかったらヤバげな事になってたんじゃねーの？」

「その通りです。あの時の僕はおかしくなっていたんだと思います。あの時は本当にごめんなさい」

リズロ君は俺に対し深々と頭を下げる。

「俺に謝ったって意味ないっしょ」

「そ、そうですね。すいません」

「まあ、別に何ともなかったし良いんでねーの？ 終わり良ければ全て良しってやつよ。話は変わるけど、リズロ君がひとめぼれしたって店員さんはどんな人なの？」

リズロ君は下を向いて喋り出した。

「え、えつとミンクって名前の店員さんなんです。タレ目でその……」

「タレ目？ あー！ あの胸元フルオープンで店員さんミンクって名前だったんだ。ちよつとあれな喋り方する人でしょ？ ん？ 待てよ？ ここつて娼館も兼ねてるら



しいぞ?。 お願いすりゃ良いじゃんか」

俺がそう切り出すと、リズロ君の顔はみるみる赤くなつていく。

「そんな恥ずかし過ぎて無理です!」

「良いじゃんか。頼んじやえよ。まあ、フアイト! 応援しているぞ」

その後、俺達は互いのアドレスを交換しお開きとなつた。

俺は一足早くミンクさんの元へと急ぐ。

「店員さん、ごちそうさん! ステーキとビール美味かつたよ」

「あら、それは良かったです。また来て下さいね?」

「お会計はミンクさん相手でも良いの?」

ミンクさんはニツコリ微笑むとお盆を前に付き出す。

「はい。大丈夫ですよ?」

「実はさつき緑の髪の少年リズロ君っていうんだけど、彼と賭けをして負けちゃつてさー。」

俺持ちになちやつたんだよね。彼、ミンクさんのお世話になりたいんだつて。幾らになるかな?」

「あら、光栄なの。そうですね、ファイアーペアーのステーキとビールそれにお茶と私込みで15000ローゼスになります」

俺はインベントリから金貨を鷲掴みにしお盆に載せる。

ミンクさんが、凄い勢いで指を動かしあつと言う間にお盆の金貨が仕分けされていく。

「けけ、計算早いツスね……」

「私ゝ、計算だけは得意なんです。何故か皆凄いびつくりされるんですよ？ 何故なんでしょ〜?」

「さ、さあ？ さっぱりだね……。じゃ、ありがとう。また来るよ」

「またのご来店をお待ちしています」

俺は、おっとりしたミンクさんの声を後ろで聞きながら大衆酒場を出た。

「リズロ君、ファイト！ 一発！」

その日、一人の少年が大人の階段をフルスロットルで駆け上がったのは言うまでもない。

## 第61話 反逆

ゲインがリズロと会話を楽しんでた頃、城の中を一人の犬獣人が巡回していた。

彼の名はファース。王立騎士団のメンバーの一人だ。

彼の嗅覚と聴覚は人間の500倍程あり、この生まれ持つての能力を使い、城内部の警備を自主的に行うのが彼の日課である。

「今日も城内はなんともないようですよ。そろそろ皆帰ってくるだろう。ん？ この匂いと色は……」

ファースには物体が持つ匂いそのものを視認し、色による状態判別能力が備わっている。

この能力は彼の生まれ持つたユニークスキルなのだが、自身は全くそのことに気付いていない。

大した戦闘技能を持たないファースが王立騎士団に入団出来た最大の理由は、この判別能力を使い敵の状態や攻撃のタイミングなどを見切りながら戦ってきたからにほかならない。

「クンクン……間違いない。この匂いはロンメルさんのもの。しかし……この赤い色は

強い警戒をはらんだ色だ。一体？

彼は匂いを嗅ぎながら歩き、謁見の間直ぐ近くまでたどり着く。

ロンメル匂いは謁見の間内部まで続いていた。不審に思った彼は自らの聴覚を拡張する。

神経を集中させるとロンメルと王女様の声が耳に届いた。

「——ロンメル!? 一体どうしたのです!? 何故臣下を石に変えたのですか!? これは……これは明確な反逆行為です!」

「ちツ……うっせえな。邪魔だったからに決まってるんだろ。あんたはオレの後になるんだからな。おとなしくしてろ」

「いやー やめて! 誰か助け……」

彼は耳を疑った。しかし、ロンメルが発する匂いの色が赤から白へと変わる。白は赤とは真逆の満足感などを示している色だ。

彼の脳裏に一人の男性と女性の姿が浮かび上がる。ファースは匂いを嗅ぎ分けながら全速力で走りだした。

「は、反逆だ! まさかロンメルさんが! 僕一人じゃどうする事もできない! 隊長と副隊長は……外か! 急がなきゃ!」

ファースは中庭を抜け、城内を脱し外へと続く門を接近すると勢いそのままに天高く

飛び上がり、城門を飛び越える。

「よ、よし！ 近いのは……クンクン……アンドリユー隊長だ！」

そのまま城下へと降りて行き走り続け、市場にて黄金の甲冑を着込んだ人物を彼は発見する。

「アンドリユー隊長！ 大変です！」

「おお、ファースではないか。珍しいな、お主がそのように慌てるとは！ ガハハハ！」

ファースは城内であつた出来事をアンドリユーに説明した。

「それは誠か？」

「この耳でしっかりと聞きました！ 間違いなく謀反です！ ロンメルは国賊となつたのです！」

「あいわかつた。今すぐ城へ戻ろう。ファース、お前はエスカにこの事を伝えてくれまいか」

「ハイ！ 今すぐに！」

ファースはアンドリユーと別れ、今度はエスカの元へと向かう。エスカは住宅区の巡回を行っていた。

エスカと合流したファースは口早に出来事を彼女に伝える。

「……では何か？ ロンメルが王女様を手を掛けたと？」

「そこまではわかりません。ですか、最悪……」

ファースの言葉を無視し、エスカは城に向かって歩き出した。

「私は王女様の騎士だ。王女様に手を掛けたと言うのなら——私は死んでも許すつもりはないッ!!」

ファースは今まで見たことない程に激昂するエスカの後ろ姿に、少し怯えながら付いて行く。

城に着くとアンドリユーが既に城門前へと来ていた。

ファースは我が目を疑った。城全体に灰色の魔障防壁が張られていたのだ。

「ぼ、僕が外に出た時はこんなものありませんでした!」

「うむ、どうやら我々は閉めだされてしまったようであるな」

エスカが魔障防壁に近づいていき、勢いよく殴りつける。

「クソッ! この中に王女様がいるというのに!」

「落ち着けエスカ。焦ってもどうにもならんのである」

「アンドリユーお前は心配じゃないのか!?!」

「某だつて心配である! しかし我らを取り乱してはならぬのだ! エスカ副隊長、周りをよく見るのである」

エスカは周りを注視する。住民が心配そうに、こちらを見ているのを知り我に返る。

「す、すまないアンドリユ。あまりにも私は未熟だった」

「うむ。落ち着いて、この魔障防壁を解く方法を考えようではないか」

3人は魔障防壁をどうにかしようとしたがびくともせず、途方に暮れるのだった。

「おや？ 王立騎士団のお三方、こんな所でなにやってるんだい？」

声の主は魔術師会、会長のギヌルベルだった。

城に張られている魔障防壁を見た瞬間、彼女の目が鋭くなる。

「これは……お前さん達これに物理攻撃したね？」

「わかるのであるか？」

「私は魔導に生涯を掛けてきたババアだよ？ 当たり前さね。良いかい？ この魔障防

壁はね、アタックリフレクトバリアって言って、殴れば殴るほど固くなっちゃうんだよ。

やっちまったね。こりやもうどうにもならんよ」

「そ、そんな……」

エスカの表情が絶望に染まる。

「もうだめなのか。私達では王女様を助けることは出来ないのか」

「おい、エスカ！ お前なんで待ち合わせ場所に来ないんだよ。約束は守ってくれない

と困るだろ」

エスカが諦めかけたその時、左の方から声が生振り向くとそこにはエルとアーサーを連れたゲインの姿がそこにあつた。



## 第62話 俺、城にカチコミをかける

「お前らなんで城の前でたむろってんの？」

「おお！ ゲイン殿！ 実は——」

俺はアンドリユーから事の顛末を聞く。

「ほーん。で、どうにも出来んからここで突っ立ってたわけか？ 砕けばいいだけだろこんなもの。バリアブレイク属性のアイテム使ってもいいし、割れるまで殴り続けるのも手だ」

バリアの前に立っていたギヌルベルが俺に近づいてくる。

「待って下され！ これはアタックリフレクトバリアという魔障防壁で——」

「殴れば殴るほど硬くなるんだろ？ 知ってるよ。でもな？ こいつはバリアの中じゃ下の上位のバリアーで、ある一定量のダメージ食らわせると普通に割れるぞ？ あと、バリアブレイク属性の前には無力だ」

俺はインベントリから銀に塗装されたデリンジャーを一丁取り出す。

「はい、どいてどいて。あぶねえから」

俺はわざとらしく両手を左右に振り催促し、バリアの前に立ちデリンジャーの引き金

を引く。

けたたましい音と共に銃弾が射出されバリアに当たった瞬間、バリアの壁に大きくヒビが入ると同時にガラスが割れた様な音が響き、城を覆い尽くしていたバリアは跡形もなく消え去る。

「よし、バリアは消えたぞ。つてうお!？」

後ろを向くとギヌルベルが目の前にいたため、俺は後ずさりする。

「なんとこの事か！ その面妖な形！ 本に載っていた武器とそっくりじゃ！ 機甲騎士殿！ もし、よろしければ手にとって見てみても？」

「え？ あ、うん。どうぞ」

俺がデリンジャーを手渡すと、ギヌルベルはしげしげと観察し始めた。

「形……大ききこそ違うが……なるほど。文献で見た通り、やりようによつては様々な種類の……なんという汎用性か」

「あ、あの、それやるからさ、そろそろ城の中入つて王女様助けなきや」

俺がそう言った瞬間、ギヌルベルの目が血走り、シワだらけの顔を俺に向けてくる。

「このような貴重な物を頂けるのですか!?! この武器を解明し必ずや魔術師の地位向上に役立てたいと思います！」

ギヌルベルはデリンジャーをロープの中にしまおうと早歩きで去っていった。

「行っちゃったよ。まあ、良いか。よし、城の中へ行くぞ！ カチコミだ！」

俺達の中へ入ると一切の静寂が城内を支配していた。

玄関前の大きなロビーには人っ子一人おらず、俺は不気味な空気を感じた。

「うむ、おかしいのである。静かすぎる」

「何処かに皆、囚われているのではないか？」

「うゝむ」

アンドリユーとエスカが会話をしているのを尻目で見てみると、ファースが走りながら二人の元へ近づいてきた。

「大変です！ こちらへ来て下さい！」

俺達がファースの後へ付いて行くと静寂の原因が判明した。皆石化により、モノ言わぬ石像と化していたからだ。

「こいつ等は……完全に石化してやがる。おい、ちよつと聞きたい事がある。お前らの話によると反逆者はロンメル一人だと言っていたな？ それは本当なのか？」

「僕が察知した気配、そして嗅いだ匂いは王女様とロンメルさんの二人だけでした！間違ありません！」

今俺達がいるのは城内の東側の長廊下だ。幾人もの女中や兵士が石にされていた。これは一人でやるには広範囲型の石化魔法を使用するのは明白だった。

俺達は石像と化した人々を尻目に見ながら慎重に慎重を重ね、ゆつくりと長廊下を歩く。

「この世界の魔術師にそんな事が可能なのか？ まさかロンメルはハガセンプレイヤーである可能性が？ 仮にそうだったとして何のメリットがある？」

俺はロンメルがハガセンプレイヤーである仮説を立てたが、すぐに頭から消去する。「いや、違うな。そんなことをするメリットが一切ない。この現象は恐らくアクセサリーが装備によるパッシブスキルの影響だろう。やっぱ、協力者かバックボーンが居ると思った方が良さそうだな」

「お兄様、失礼ながらその可能性は低いと思われれます」

俺が独り言を喋っているとエスカが口を挟んできた。

「ん？ なんで？」

「ロンメルはプライドの高さ故に一匹狼を貫いていました。その為、同じ城に常駐している宮廷魔道士や兵士達を使うのすら躊躇っていたくらいで——あれはッ！」

エスカが俺との会話を途中で打ち切ったかと思うと、一人の女中へ近づいていく。

「間違いない！ ネア！ お兄様！ なんとか出来ませんか!？」

「落ち着けエスカ。石化された人間はすぐ死んだりしねえよ」

「で、ですが！ お願いします！ 大切な友人なんです！」

俺に懇願するエスカを見ると目に涙を貯めているのが目に入った。

「うッ……わかった。わかりました」

俺はエスカの友人だというネアに向かってエクストラヒールを唱える。

すると、石像はあつという間に一人の綺麗な女性へと変わる。

鈍色の髪にツインテールが似合う。黄色の目をした女性だ。

「ハ、ハハはっ？」

「ネア！ 怪我はないか!?!」

エスカはネアの肩を掴みながら確認しているようだ。

「エスカ様。怪我……でございますか？ いいえ、私は大丈夫です」

「そうか！ よかった」

「あのく、悪いんだけど君が覚えてる最後の記憶教えてくれるかな？」

「——思い出しました！ ロンメル様が私達の後ろを横切って行く瞬間、影が広がったんです！ 黒い布のように！ そこから……覚えていません」

「黒い……布？ なんだそりゃ？」

エスカの友人ネアの予想外すぎる返答に俺は混乱した。

## 第63話 俺、VSロンメル

「知らんなあ。恐らくオリジナルの魔法か、何かしらのパッシブスキルだろうが……」

「申し訳ありません。私もとっさの事でよく覚えていないのです」

「ネア、ここは危険だ。遠くへ避難して欲しい」

「わかりました。ご武運を」

ネアは俺達一人ひとりに礼をし、小走りで走り去っていった。

「一体、王女様とロンメルは何処に居るんだ？」

「僕が察知したのは謁見の間です。まだ恐らくそこに」

「そうか、じゃあとつと行つちまおう」

「うむ、王女様の身が心配である。某も急いだほうが良いだろう。皆の者、某に続け！」

アンドリユーが走りだすと、エスカとファースも走りだした為、俺は置いてきぼりにくらうまいと

アーサーとエルを脇に抱えて走りだす。

先行した3人の後を追い、幾つかの長廊下を抜け、追いつくと3人は巨大な扉の前で待機していた。

「何で突入しないんだ？」

「今フアースがロンメルと王女様の状態を確認しています。お兄様それが済むまで——」

「ウルルア！ カチコミだ！ オラア！」

俺はエスカの言葉を無視し、渾身のヤクザキックでドアを蹴破り中へと入っていく。

左右を見ると護衛の兵士や臣下もやはり石像と化していた。

「なにッ!? てめえらは!! どうやってあの魔障防壁を破った!？」

俺は王座らしき豪華な椅子にもたれながら、狼狽えている紫フードの男の台詞を無視し、王女の状態を確認する。

猿ぐつわを噛まされ、手はロープで縛られているが命に別状はなさそうに見える。

俺はアーサーとエルを離し、腕を組みつつロープの男を真っ直ぐに見据えた。

二人を離れたと同時に後ろから幾人かの足音が聞こえてきた。どうやら騎士団の面々が突入してきたようだ。

「人の名前尋ねる時はまず自分からって習わなかったのか？ あ？ 王様になろうって

人間がそんな礼儀も知らないの？」

「反逆者め！ この勇者アーサーが許さないぞ！」

「う……わ悪趣味なロープ、気持ち悪い……死ねばいいのに」

「ロンメル！ 愚かな奴！ 貴様であればそれなりの地位に就けたものを！」

「ロンメルさん……」

「なんと、なんと馬鹿な事を。ロンメル、某はお主を——」

俺達がロンメルに対し、言いたいことを言っていると、ワナワナと手を震わせながら裾からナイフを取り出し、王女様の喉元に押し付けた。

「黙れ黙れ黙れッ！ 黙らなければ王女を殺すぞ！」

「ガイドウ流剣術奥義 後牙一閃」

俺はインベントリから刀を取り出し、その場で抜刀しすぐに鞘に戻す。

「馬鹿か？ 俺とてめえの距離がどれだけ離れてると——ぎゃあああああッ!!」

「誰でも良い！ 王女様を連れてここから離れる！」

「王女様！ 失礼致します！」

王女様がファースにお姫様抱っこされながら、謁見の間から出て行くのを確認する。

目の前のロンメルはというと、椅子からずり落ち、前のめりになって背中を抑えようとしていた。

「ぐああああ!!!」

「王女様を殺そうとするとか、もう色々と終わってんな。背中からドバドバ血出てるぞ？ 止血しねえと死ぬなこれは」



「クソ馬鹿が！　ここであつてめえらを皆殺しにした後、ファースをぶつ殺せば……」

俺はかかとを地面を軽く叩くと、かかとかから一匹の蜘蛛が出現し、俺の手のひらへ登ってくる。

俺はそれをロンメルのすぐ側へと放る。

「なん、だ？　このちつせえ蜘蛛みたいなモンスターは？」

「それさ、エキスパンションスパイダーつつつてな。主の半径一キロ圏内の声を拡大するつてジョークガジェットなんだけどさ。」

俺はこいつを全ての住宅区や酒場、広場なんかにはら撒いてきたんだよね。何が言いたいかつつーとだな。

この謁見の間に入ってきた時点で拡張機能オンにしたから、お前との今までの会話ぜーんぶ筒抜けなんだよね」

「なん……だど？」

「もう二度と王様ごっこ出来ないねえ？」

ロンメルは側にあるエキスパンションスパイダーを握りつぶした。

「クソツ！　クソがああああああッ!!」

ロンメルが雄叫びをあげた瞬間、ロンメルの影が突如巨大化し謁見の間全体が包み込まれた。

俺は一瞬あつげにとられたがなんともないことがわかり、確認のために後ろを振り向くと

アーサー以外の騎士団の面々とエルが完全に石化していた。

「なに？ 一体なにが？」

「へへへへへ、ヒャーはハハハははは!!」

俺は笑い声に釣られて前を向くと、そこには致命傷であつた筈のロンメルがケタケタと笑いながら立っていた。

自らの第六感が警鈴を鳴らしている気がした。

俺は足のミニマムブースターを起動させ、アーサーの側へとバックステップする。

「お師匠様！ あれは一体!？」

「わからねえ！ 突然何が起こつたんだ!? それよりアーサーお前なんともないのか!？」

「ハイ！ お師匠様のくれた腕輪のおかげみたいです！」

「エルは……レジストできなかつたか。失態だ！ こんなことなら、エスカやエルに優秀なアクセサリーなり防具なり渡しておくべきだった！」

俺は後悔の念を抱きつつロンメルを注視する。

依然としてケタケタと首を前後に揺らし、笑い転げているロンメルに言いようのない

不気味さを感じた。

俺はロンメルに鑑定スキルを無詠唱で掛け、出てきた文字に驚愕する。

すべての項目がUnknownで埋まっていたのだ。

「な、に？」

「どうなさったんですか？ お師匠様？」

「ひとつ、わかつた事がある。俺達の目の前にいるあれは生物じゃねえって事だ……」

「そ、それってどういう——」

「今から俺とお前で相手すんのは正真正銘の化物って事だ！ 気合入れろ！ 下手打つたら俺もお前もここで死ぬぞ！」

俺は前に躍り出て、思いつきり腹の底から声を出す。

「外着ッ！」

俺の前に魔法陣が現れ、頭から順に出現し、外格がバキヤッ！という音と共に外れ自動的に俺へと着装されていく。

「ゲイン様、ご機嫌麗しゆう」

「ネメシス！ 悪いが反応している時間はない！ ログを見てくれ！」

「全て未確認……ですか」

「そうだ！ この世界に来て以来のガチエマーゲンシーだ！」



## 第64話 俺、v s アンノウン

「無茶だ！ アーサーに扱える訳がない！ しかもこいつには弾数制限があるんだぞ！」

「しかし、これが最も確実にアンノウンを倒せる方法かと」

「ぐぬぬ」

俺は、インベントリから銃身に赤い宝石の様な物が一列にくっ付いているライフル銃を取り出す。

「アーサー！ お前にこいつを託す！」

俺はギガンティック・マナ・ブレイカー 神威をアーサーの側に落とす。

「な、何ですか!?! この黒くて長いものは!?!」

「いいか！ 説明してる隙がない！ よく聞け！ 俺が合図したらそいつをあいつに向かってぶつ放せ！」

そいつはレーザーライフルって武器で弾数制限があつてだな。2発だ！ 2発まで撃てる。おまけに撃つのにチャージする必要がある。銃身に付いてる赤い玉が全部緑になったら撃つことが出来る！ 正直言って欠点だらけの武器だ！ でも、あいつを一

撃で倒すにはこいつを使うしかない！」

「で、でも！ 僕こんな武器、見たことも使ったこともありません！」

「んな事はわかってる！ でも、頼めるのがお前しかいねえんだ！ 大丈夫だ、俺がお前を守る！ 指一本触れさせないと約束する！」

アーサーは恐る恐る、ギガンティック・マナ・ブレイカー 神威を手に取るとアンノウンに向かって構えた。

「勝てたら……新しい技教えて下さいね」

「——いいとも！ 技だろうがなんだろうが教えてやる。さっきも言ったが、赤い玉が緑になったら指に掛かっているボタンみたいなのを押せ」

「も、もし撃ちつくしたら——」

「そんな時は二人仲良くあの世行きだ。頼んだぞ」

ギガンティック・マナ・ブレイカー 神威

ハガセンには、レーザーライフルもしくはレーザー銃という武器がある。

このレーザーライフル銃は一言で言ってしまうえば原子破壊レーザー銃であり、撃たれた対象は一定時間の後、原子分解が始まる。という、設定の武器である。

幾多のレーザーライフル系統において、最悪のクソ武器と言われているのが、ギガン

ティック・マナ・ブレイカー 神威

略してギマカである。俗称は文鎮。

ギマカが何故、最悪のクソ武器と言われているのか？ それは偏にデメリットの多さに他ならない。

まず、レーザー故のMPの消費率の高さからくる弾数制限。ギマガに至っては50%を消費するためMP全開の状態でも2発しか撃つことが出来ない。

そして、最大のデメリットは撃つのにチャージが必要な事。チャージ中は一切の行動が不可能となり、ただの的と化す。

しかし、そんなクソ武器ギマカだが、当たりさえすればどんなボスでもほぼ一撃で屠る事が出来る。

勝てば官軍負ければ賊軍を体現した武器、それがギガンティック・マナ・ブレイカー 神威である。

「行くぞオ！ 笑い袋野郎コラア！ 化け物なら容赦はしねえ！

ウエポンセレクト！ パイルバンカー黄龍《ホアンロン》！ 弱点がわからねえならなら全て叩き込むのみ！」

俺が叫びながら右腕を天に掲げると、右手にワイヤーフレームが生成され、金色の籠を模り虹色に輝く杭のパイルバンカーが生成される。

こいつの杭は7つ全ての属性を宿している為、弱点がわからない敵に対してこれ以上ないほど有効なのだ。

「ぎやはははハハああああアアアアア！」

俺が右腕の換装を済ませたと同時に、アンノウンが腕をムチのように腕を振り回し、俺の首に巻き付いてきた。

巻き付いた腕は徐々にアンノウンの方へと近づいているようだった。

「まるでB級映画のエイリアンみてえな攻撃してきやがって！。そんなに近づいて欲しいならお望み通り近づいてやるよ！」

俺は手刀で腕を切り落とし、ブースターを起動させ勢いそのままに杭を土手っ腹にぶち込んだ。

虹色の杭が発射され、後ろの壁に打ち付けられたアンノウンはもがき苦しんでいる。

「ああああああああああ!?!」

アンノウンが叫ぶと足から凍り始め、パキパキという音を立てつつ完全に氷の彫像と化した。

「こいつは水属性が弱点だったのか。やはりウィークポイントがわからん的には黄龍《ホアンロン》に限る。アーサーすまん。それ要らなかつたみたい——」

俺が気を緩めた瞬間、バギッ！ という音が聞こえ俺は前に向き直る。



「黄龍《ホアンロン》の杭を打ち込まれたのにまだ生きてんのか!? マジかよ、とんでもねえ硬さだ。アーサー! まだか!」

「すいません! 初めてで勝手がよくわからなくて! 赤いのが緑にはなつたんですが、どうすれば良いんですっけ!?!」

「トリガーを引けええええええええええ!!」

バギバギっ! という音を立てながら氷がひび割れ、再び出てきたアンノウンは、腹部から緑色の仮面の様なものをした黒い物体が這い出ており、

そいつが俺を取り込もうと布状になつた瞬間、後ろからバゴン! という音が聞こえ、俺がとつさに伏せると蒼い閃光が疾走り、アンノウンの体がバラバラに砕け散った。